



沙■羅ら沙ゝ良ら囉さ
ラ 修 ら
沙 ■ ら さ 羅 さ □
ら ら 紗
□囉さ沙佐ら佐ゝらら

目次

修羅ら沙羅さら 2	1
---------------------	---

修羅ら沙羅さら 2

修羅ら沙羅さら 一篇以二部前半蘭陵王三章後半夷族一章附外雜部

蘭陵王第二

かくに聞きゝ壬生その日終日ユエンが家にありき義父コイと俱なりコイ息子タンと俱に住セル部屋から出デず出でテ稀なりきこノ比早朝はやくタンひとり出て近隣親族の家に詣で雑談シ遊ブ乃至黙シスマートホン弄ベリ十時廻る比歸りて昼食用意す之レ都市封鎖されたるゆゑなりかくて壬生又タン又コイ又は集ひて食す又は時に壬生かタンを缺く又はそれぞれに食すかくてタン及びコイ同室に昼寝すこノ日ゝの常なりき此ノ日午前9時半廻りたるに壬生居間にパソコンを弄ベリきレ・ハン詣で來たりきレ・ダン・リーと俱なり是れレ・ヴァン・クアンが後妻に生ませたる娘なりき後妻が名ダン・ティ・タムと曰すハン居間をシャッター半ば開きたる翳りに笑ミて居間が内伺ひ又笑ミて入りかくてレ・ダン・リー隨ひて笑みて又隨ひて入りき壬生思ふに今タムかのレ・ヴァン・クアンを見舞ひ來たりテひとりクアンを介護しをるならんかクテレ・ハンみづからにリーを連れて連レ回リてユエンが家リーに紹介すること我が家ナルが如し少女ふたりの聲笑ひて希薄に室内に笑へる聲ひゞくハン戯れ壬生にジャレか廻り殊更にもじゃれ廻かるに壬生ハンを寢室に誘ひき是れコイが眼に気付かるゝを厭ひたるゆゑなりき壬生思ふにコイ未だふたりが詣でたるを知らずコイ糖尿病重なりか廻りてをればすでに耳弱まりき如何にか夜波岐笑ひ聲聞き取り得ルやらんハン歡喜し戯れ又戯れじゃれて歡喜シ壬生に隨ひき又レ・ダン・リー俱に隨ひて戯れ遠巻きにじゃれて歡喜し戯レ又隨ひてレ・ハン目にみづからに隨ふ妹を厭ふハン寢室に壬生を愛でテ又壬生に愛で羅れりレ・ダン・リー姉のそれ嬌態曝したるヲ見てこゑとこゑに笑ミ遠クじゃれて離レて笑ひこゑとこゑにひとり笑ひキ時に家がうちひとり戯れひとりこゑとこゑに遊ビ飛登里歩キ回りキ廳而こゑにこゑは庭に戯れ出デきタオこゑにつらなりこゑは叫きけりハン寢臺が上に口に弄ブに初めてこゑにかさなりこゑは觀じたる味口蓋に觀じキゆゑ須臾こゑに茫然とシ後レ・ハンひとりこゑをかさねて歡喜せり壬生を見テ見上げてふたびこゑは素直に上目に白めがちタルに歡喜しこゑに同ジくに登麻ド飛テそのこゑとこゑの儘口に含みたるを垂らしき壬生がつらなるこゑに腹穢ス壬生その頭を撫でキかくてハンふたたびかさなりこゑのそれらつらなるこゑの戯れ弄びキかくて廳而やゝありて壬生かさなるこゑの思ハずに目を閉ジきハン是れを壬生の上に馬乗りて見き時にハン胎内にこゑは

あふれるようにこゑは

ふそめるようにもこゑは

かさなりあい

つながりあいさえしながらこゑは初めてそノ流れ出ヅるヲ感じ我に返りきかくて又歡び
歡喜シ壬生を見て見汗露斯ふたび素直に歡喜シ同ジくに登麻ド飛テ壬生に覆ひかづさ
りテ壬生が軀を抱けり壬生茫然とシ未だ我に返らザリテかくて頌シて

あなたに話そう

音もなく

まさにあなたの爲に話そう

その

誰の眼を避けようとしたともなく、姉妹は

音もなく

戯れていた。その

まるで他人のように

ユエンの家屋の中に

流れ出すもの

誰かに秘密にするために二人は誰かの眼を避けようとした

流れ出し

聲をひそめて笑い合いながら

垂れて

避けるべき誰の目の有る譯でも無く。その

したゝりおちる

ユエンの家屋の中に

雫

レ・ハンは私の体を誇るようにリーに見せた

溶けて仕舞った氣がした

リーの眼が素直な歡喜を

乾いた

曝した。レ・ハンは

沃土に？

自分を誇って口づけた

飢えたわけでもなく

私のからだに。…肉体に。——精神に？

餓えたわけでもなく

半開きのドアの翳りの内に、私の体を立たせたままに

しみこむように

外にいない、誰かの氣配をリーと探って

溶けた氣がした

ハンは自分を誇って戯れた。誰に？

ちいさな、あるいは

レ・ダン・リーに？ あるはその肉体に？——精神に？

広大な沃土に

時には、——同時に？ みずからの
不意打ちのように
私のからだで。みずからの軀の知るわたしの
思っても居なかった時に
レ・ハン自身の体を？...肉体で。——精神に？
飢えたわけでもなく
寝台にかかる蚊帳の色の白の内に、私の体を横たえさせて。
餓えたわけでもなく
外にいない、誰かの気配をリーと探って、レ・ダン・リーは
流れ出たもの
瞬いた
溶けたに違いなかった
時に私の体を見ながら
その雫は
それを見た
齒のない
私は翳りのなかに立つリーの素直な笑みの顔の右の脛に
沃土が咬む
レ・ダン・リーはまばたいた
噛み千切り
時にハンのさらしたその褐色の、むしろ筋肉の息吹きかんじさせた肌を見ながら
その
咀嚼し
息遣いを見ていた
沃土は目覚めるだろうか？
私はドアにもたれて顔をのそかせたレ・ダン・リーの素直な笑みの顔の右の脛に

音もなく
リーはまばたいた。
咀嚼したあとで
時にハンとハンの、さらしたその行為の、歓喜する歓喜とむしろ苦悶する苦悶の
息遣いを見つめながら
沃土は繁茂する
その肉体の。——精神の？ あざやかな命の。
飢えた譯でも無く
時に私とハンの、さらしたその行為の、歓喜する歓喜とむしろ苦悶する苦悶の息
遣いを見つめながら
餓えた譯でも無く
その肉体の。——精神の？ あやうく息切れする命の。
沃土は繁茂する

時に私と私の、さらしたその行為の、歓喜する歓喜とむしろ苦悶する苦悶の息遣いを見つめながら

みづからを

その肉体の。——精神の？ 自壊しようと欲すかに見えた命の

引きちぎって分裂し

時にハンと私の、さらしたその行為の、歓喜する歓喜とむしろ苦悶する苦悶の息遣いを見つめながら

引き裂かれて分裂し

その肉体の。——精神の？ まじりあった汗にまみれた命の

分散せずに

それを見ていた

散乱せずに

私は聲を立てて聲をひそめてはしゃぎ、うずくまって顔をのぞかせたリーの素直な笑みの顔の右の脛に

散逸するなく

リーはまばたいた

沃土は集合する

それを見た

咀嚼したあとで

私は立ち止まってスマートフォンを弄り、不意に顔をあげたリーの素直な笑みの顔の右の脛に

噛み千切ったあとで

リーはまばたいた

溶かした後で

それを見ていた

侵犯したように

どこかへ逃げこもうとして聲をひそめ、何かをどちらかに言いかけたリーの素直な笑みの顔の右の脛に

侵入したように

リーはまばたいた

降り注いだ無数の雫に

まるで自分が漏らしたものの穢したかのように、濡れたシーツをハンは笑った

侵犯されながら

誰かを気にして聲をひそめて

侵入されながら

まるで自分のそこが吐き出してしまったかのように、しみは

沃土は咀嚼した

落ちた。レ・ハン

蛇が殻を脱いだように

私を見て笑った

沃土は潤う
バイクの音にハンのはねおきる
つややかな肌を曝した蛇の
タンが歸ってきたにちがいがなかった
その潤いの光沢のように
服も着ないで部屋を出た
沃土は
リーを連れ、時に置き去りにし、置き去りにして、時に連れて引っ張り、さまざ
まなものの影にひそんだ
まさに蛇がその
彼女たちは逃げた
め覺めたまなざしに
リーはハンと俱に、時に別々に、又足を潜め、息さえ潜め、別々に、時に俱なり、
さまざまなものの影に
かたちを見出し
ひそんだ。
色を見出す様に
私はタンと食事を済ました
沃土はかたちをなす
振り向けば、どちらかの眼がどこかにあるのは知っていた
沃土は咬んだから
彼女たちが殊更につくった秘密の爲に
噛み千切り
あえて秘密にした
咀嚼したから
彼女たちのことを
ふたたびひらいたまなざしに
タンは気付いていただろうか？
見た。わたしの眼差しは
サンダルは脱がれた儘だった
レ・ハンの眼差しが見ていた
ハンとレ・ダン・リーは戯れた
レ・ハンと私の共謀を
コイはその日食事を遅れてひとりでした
レ・ハンの目の
タオが叫んだ
わたしを赦したやさしい色を
タンから隠れたその、埃りを溜めた棚の影にレ・ダン・リーは嗅いだ。耳元に、聞き取れ
無い程に鳴ったレ・ハンの笑った息の吐かれた、その匂いを。匂いと言う程の匂いも無
い、にもかかわらず鮮明な生き物の体内の温度のある匂いを、そして素肌を曝した儘の

姉の、大人のからだの肌の匂いを。姉と戯れた男の肌がうたたい程にも立てた芳香を、名残らせた気がした癖のある匂い、砂糖黍を発酵させたような。餘りにも見すばらしい戯れを、レ・ダン・リーに誇った姉をリーは赦した。姉の爲に笑んだ。横に流した眼差しが庭に立ったまま、頭のおかしなタオが、赤いパーティードレスのそすをまくって顔の汗を流しながら、そこからは丸見えの自分たちを見ているのを見た。レ・ダン・リーはふたたび笑んだ。唇から笑った聲さえこぼれた気がして、そしてレ・ダン・リーは思わず息をのんだ。意識もなく、レ・ダン・リーは息を止めた。まみれた。汗に、そして汗にまみれて、肌を汗の粒が、そしてまさに背中のかぼみに流れ落ちたのを虫食いだらけだよ。

と。

知っていましたか？
蟲喰いだらけだったんだよ。知れ。お前の、その——と、
はばいたのでした。

貴様の背骨に咬みついた蝶の

その羽根はきのうもひそかに、と。

そして我に返ったタオはまみれた。蝶の吐き捨てた蟻の亡骸の傾斜に、ひからびて行った涙に、タオはひとりで、そしてタオはひなたで汗まみれだった。タオが鼻に笑ったのを背後にマンゴーの實が諫めた。レ・ハンは眼差しのむこうに遠く見ていた。壬生が自分たちの方を見た一瞬を。そのあまりにも短かった刹那の短さの須臾の一瞬に、レ・ハンは自分が彼の眼差しを見つめそこなったに違いなく想われたとき、壬生の目は突き当りの翳る隅の、使われない戸棚の雙つ並べられたそこにひそんだしたレ・ダン・リーさえ自分に見蕩れた気配の、なまめいた陰湿さに籠るのをひとりで濃んだ。かくて偈を以て頌して曰く

姉はまるで少年のように美しかった

褐色と白が

ならんだ齒のどこかに牙を

白と褐色が俊敏に

隠し持った少年のように

緩慢に

整えた爪のどれかに

翳る影と影の

棘を生やした少年のように

翳りの翳りに駆けて

笑いもせずに咬みつくだろう

音も立てずに

軽蔑するよりすみやかな速度で

身を潜めた。その

褐色の肌にそんな幻を陽炎わせた

白と褐色と

妹はまるで幼虫のように醜かった

褐色と白は

蝶になど永遠になる術もなく
失踪するように
そのままに蠢く幼虫の春のように
連れ去られたように
甲虫になど永遠になる力もなく
身を隠し
そのままに這う幼虫のぬらした迹のように
すでにその時にもう犯罪者だったかのように
威厳と共に微笑むときも
身をまるめ
ただ卑屈をしかささないだろう
翳りの中に
真っ白い肌に現実の凄惨をたゞひとり現じた
目配せをして

かくに聞きゝハンとリーを放置せる昼食の後タン自らの部屋に入り入りてスマートホンの音ひゝかす炊事場に片付けもの放置せり是れユエン言さくわたしが片付けるから、と

義務として？

妻の

強制されたわけでもない傲慢なまでの

義務として？ 壬生の手伝はんとすルをユエンは拒絶すゆゑなり英語にわたしが片付けルからとタンの手伝はんとすルをもユエンは拒絶しベトナム語にわたしが片付け祈流迦良登かくテ皿等放置常なり壬生寢室にハン又はリーを探してふたりはをらざりきゆゑに壬生炊事場裏にハン又はリーを探してふたりはをらざりきマンゴーの樹木日に照りテゆゑに葉と葉ゝ枝と枝ゝ翳りを投げ翳りおとし翳らせき上の葉と葉ゝ枝と枝ゝにものノ動く音サル？

猿が？

さる？

真っ赫な裸に柔毛を茂らせて

振り返った猿が？ ありき壬生見上げズ猫はかくまで上に這いのぼれるやかくに壬生心に疑へり又鼠はかくまで上に這いのぼれるやかくに壬生心に疑へりかくて表なる庭にハン又はリーを探してふたりをらざりき遠くにサイレン鳴り鳴りて響き飛飛岐豆那利救急車の音ならん Covid19 に憑かれたるあうたに発見されたるやかくに壬生思ひき庭の先なる道に人影なしその先河流れ光に泥の河白濁しきらめきさざめききらめき散るに人影なり通に人通りも無き是レ何処に於いてもすでに常なりて久しきゆゑに壬生ふたたび居間にハン又はリーを探してふたりをらざりきゆゑに壬生仏間にハン又はリーを探してふたりをらざりき i-pad が念佛常にひくク鳴り飛飛岐岐是レ常に常なりタオが叫き聲背後に聞こゑ振り返るに佛間向かふの中庭にタオ立ちてひとり壬生が方を見て飛登里那里岐タオが嫩しさいまさらにたゞあざやかに観じて壬生の眼雙つ俱なりて窓が格子の向こうにタオを見き振り返るに夢のように？

夢にあこがれた夢の女のように？

いじましい、

馬鹿げた、

愚かな夢の不意の実現の莫迦馬鹿しさのように東なる庭が椰子ノ樹ノ影に隠れテゐたる
レ・ダン・リー顔出して壬生を見かくて笑みかけ観をはりてひとりレ・ダン・リーは笑
みき壬生その笑ミに應へずここにハンを探シ目にリーの笑ム顔の影淡い斑らに翳りタ
るヲ乃美見キその頭乃上に椰子葉コスレテ音鳴りき壬生の肌に風は感じざりき又リーの
くくりたる髪の毛の先のわずかの騒ぎに風観ぜられ又くくられて垂れたる髪の毛の根元に風観ぜ
られず又くくられたるにくくられきうざりシ髪ノ美陀禮を風須臾數本ざわめかしきゆゑ
にたゞ知らざり見えざる大氣さまさまの陥穽なすどこかしらに風吹き流れてありシやラ
ン迦久弓頌シ氏

あなたに話そう。

その少女は聲を立てただろうか？

まさにあなたの爲に話そう。

ゴック・アインに

笑った。リーは。

からだだけ愛されながら

聲もなく。

その少女は

かならずしも聲を殊更にひそめひかえたふうもなく。

喉に聲を立てただろうか？

リーはただ聲をたてないで笑った。

ふたり以外に

わたしの方こそ間違っていたのだった。

蜥蜴さえいなかったその日の部屋で

リーの顔が曝した事象にわたしは何かのその固有の意味をさぐろうとしていた。

ゴック・アインの腕の中で

その時にふと思い出した。

壁に這う

寝室にハンを探した時に、——リーを？ 彼女を探した時に、私はすぐさまに匂っ
た気がした。

蜥蜴の裸眼の眼差しさえ無い儘に

リーが体内から零れおとしたものの匂いが。

レ・ダン・リーは

思った。

聲をたてただろうか？

ハンの残した体臭だったに違いない。

その喉に

思った。

その鼻に

自分の体臭など気付かない。

その唇に

女たちが云った。

ヴィンコムで...と

あなたはいつもいい匂いがする、と。

ゴック・アインは云った

乳児の口元の匂いに砂糖をまぶして、さらに後ろに百合の冴えた凶暴な匂いを置いたかのような。

ヴィンコム・センターの本屋の前で

わたしは一度もかがなかった。

彼は笑んで

ゴック・アインは嗅ぎ取りはしなかったはずだった。

まるで昨日の天気を話す様に

彼自身の鼻には。

彼女は僕を見ていた

あの悪臭を。

ゴック・アインはそう云った

美しく可憐で、凶暴な褐色のしなるゴック・アインの体躯の放った悪臭を。

だれも

誰もが知る悪臭を。

だれも周りにいないで、だれも

かれが最後に毀したレ・ダン・リーも知ったに違いない悪臭を。

だれの目も彼女を素通りするように

或は彼女が怯えた悪臭を。

だれにも

彼女がおののきを以て知った悪臭を。

だれにも関わらない儘に

彼女がひそかに、時にはあからさまに歓喜して嗅いだ悪臭を。

彼女は僕は見えていた。ずっと、

そのなめらかな肌の、雨に撃たれた野生の獣の濡れた柔毛のような匂いを。

ゴック・アインはそう云った

そのなめらかな肌に垂れながれおちる汗の、雨に撃たれた野生の獣の濡れた柔毛のような匂いを。

私を見て、そして鼻に笑いながら

その凶暴な唇のほゝ笑んだかたちに、匂う雨に撃たれた野生の獣の濡れた柔毛のような匂いを。

ゴック・アインはそう云った

わたしが感じたその匂いは、——ハンが体の中から垂らしたその匂いは、すでにハンのものであったに違いない。

数歩あるいて振り返ったら

わたしもはっきりと匂ったから。

彼女はやっぱり僕を見ていた

レ・ダン・リーは思ったのだった。

もう数歩あるいて振り返ったら

おそらく、今まさに自分はひとりでハンの男にみつめられていると。

彼女はやっぱり僕を見ていた

ショートパンツだけに身を隠して、じぶんを見ている男に。

だから

今まさに自分はひとりでハンの男にみつめられていると。

僕が彼女に手招きした時

姉を抱いて、そのあとで喰って喰い終わった男に。

彼女はまさに、喜んで走った

今まさに自分はひとりでハンの男にみつめられていると。

僕のもとに

レ・ダン・リーは眼をそらさなかった。

僕はその日の

知っていた。

グイン・ヴァン・ヴーとの約束を破った

私は、レ・ダン・リーは私を、自分の男であるかのように私を見ていた。

彼女の爲に

そして、自分を抱いた男であるかのように私に笑んでいた。

グイン・ヴァン・ヴーとの待ち合わせを破った

自分勝手に素直に、私に赦しをくれた眼で。

ココナツの木の下に、レ・ダン・リーは顕らかに穢らしく見えた。壬生の眼には、その明るい屋外の、ほどよく翳った淡いあかるさの中に赤裸々に、極端に痩せた体躯。レ・ダン・リーは思った、なぜ、

あなたは今泣きそうな顔を？

細く、へし折れそうなほどに細く、レ・ダン・リーの十二歳の体躯は無理やりに女の性別を腰回りにだけ兆して見せた。長すぎる首がまるで異質な民族の末裔を思わせた。下唇がめくれ上がるようにも肉付いて、そして顔にも腕にも太ももにも、出た肌の至る所に何らかの皮膚疾患の赤らみが目に痛みを与え、——なんて...

と。

思った、——なんて、無様な。

なにもかもに歎くような顔をしたの？...と。

レ・ダン・リーはひとりで、いま、...と、

その一瞬に。なんて、

なんて、無様な、と。櫛で梳かれたことなどあったのだろうか？ 壬生はそう思った。レ・ダン・リーの髪は、うしろでひつつめられても猶もことさらに多く、豊かにすぎて、黒い白光大る大口の異物に後ろから咬みつかれているようにも見えて、見つめるひと。

あなたは、ただ、わたしをみつめる。

ほゝ笑み、ほゝ笑んだことさえ、ほゝ笑んだ自分をさえ忘れて
見つめる人、——と、
鼻で、しずかに息をしながら。
やさしいその呼吸をさえ
あなたはだれにも秘密にしたまま、...と。
レ・ダン・リーは心に、見つめ、
見つめる、
見つめる人、と、壬生はレ・ダン・リーを見、かの女の押し付けたまなざしに顯らかに厭
いながら、レ・ダン・リーの爲だけにほゝ笑んでやった。かくて偈を以て頌して曰く

醜い子

みあげれば
あざやかなほどに
あなたはかぜのありかをしるのに

醜い子

みあげれば
姉とは似ても似つかないどこに
さ、さ、さらら、さ、さ、らら、さらら
遺伝子の伝えた言葉があったのだろう？
かぜのありかをかぜみずからは

醜い子

しっていたように
きたならしくて
さ、さ、さらら、さ、さ、らら、さらら

醜い子

かえりみれば
いじきたなくて思えるほどに
そのいろがおちるのをあなたはきっと
目が痛むほどに痩せて、ただ貧弱な子
そのめにみたにちがいがなかった

見て観れば

ゆら、らゆら、ゆ、ゆら、らゆら、るら
誰もが知った。醜い子

はいごにさいたブーゲンビリアの
かならずしも、——その目はつぶらであどけなかった
そのはなを

見て観れば

つつんでかおりもなくいろを
誰もが知った。醜い子
むらさきにちかいくれいに變えた
かならずしも、——その唇はちいさくささやかだった

そのはのむれのなりのはて
見て覩れば
ゆら、らゆら、ゆ、ゆら、らゆら、るら
誰もが知った。醜い子
しろいかべんをみちづれにして
かならずしも、——その頬は時に可憐のいろをほのかに兆した
散る
見て覩れば
ゆら、らゆら、ゆ、ゆら、らゆら、るら
誰もが知った。醜い子
みぎをみれば
かならずしも、——その頸筋はほそくながくすなおに頭部を置いた
みぎのむこうをよくみれば
見て覩れば
あなたもそのめにみたのだった
誰もが知った。醜い子
蛇の皮がまさにみていたように
かならずしも、——そのなで肩はいつか心に、無垢の想いを思い出させた
る、るる、る、るるろ、りろ、り、り、る、るろ、り
見て覩れば
みぎのじゅもくのかげりのしたに
誰もが知った。醜い子
ちのうえに
かならずしも、——そのあやうい歩みは、地につま先だけで戯れた
ちにおちたものらのかげりの
見て覩れば
もののかたちを
誰もが知った。醜い子
とどめぬかげりに
顯らかに、——その夥しい斑点は何だったのだろうか？
る、るる、る、るるろ、りろ、り、り、る、るろ、り
赤變したちいさな吹きで物のたどただしい繁茂
その蛇が皮をぬぎすてるのを
肌に斑らに繁殖して飾るその赤みは。かならずしも——時には心をやさしくさせ
た
る、るる、る、るるろ、りろ、り、り、る、るろ、り
レ・ダン・リーは醜かった
その蛇のあたい皮が自分であからさまに潤う照かりを
醜い子。見て覩れば
る、るる、る、るるろ、りろ、り、り、る、るろ、り

誰もが知った。レ・ダン・リーは

乾き渴いた殻の干るのを

醜い子

かくに聞きゝ壬生あふれ寢室に歸りき歸りて寝台にあふれて横たはりたるレ・ハンを見
キ未ダあふれ着衣せざりきハン壬生にあふれてき附きて壬生に笑みき身をあふれ起こ
し時ことさらに壬生レ・ハンの髪ノ聲をことさらに嗅ぎ取りきことさらに

あふれて

ことさらに

あふれるように

艶なり壬生ハンに笑み迦祁多ル邇ハンそノ麻に傍ラに逃げて部屋をあふれ出き居間を
過ぎて庭にあふれて出きバイクー臺前をとおりて木陰にあふれハンを見ざりきハン壬生
をあふれ振り返りて笑ミき日差シあふれて直射しレ・ハンが肌の褐色なる色すであふ
れかえって奪ひきハン聲を立てテあふれ笑いひき壬生のハンを追はざるをハンみづから
にあふれて走り笑ひ逃げ息あらげあふれ笑ひあふれて笑みてあふれかえって

こぼれだし

あふれかえって

とめどもないほどに

ハンひとり歡喜せり壬生庭に出き昼ノ光りあざやかに過ぎてたゞまぶしきレ・ハン聲た
てき言葉なりき壬生解せずコイ聞きたるや壬生は知らずタン聞きたるや壬生は知らず壬
生レ・ハンが逃げたる足ノ庭ノ隅に沙羅ノ花ふみ散らス多留を見ざりき壬生舞ふ蝶を見
やり祁禮バ那里レ・ハン笑ひき邪氣もなしレ・ハンひとりかくて歡喜しき迦久豆頌して

あなたに話そう。

彼女はほゝ笑むのだった

まさにあなたの爲に話そう。

いつでも

左手の方にレ・ハンの聲を聞いた。

まるで彼女に

時に立てる、笑った聲を。

知性などかけらもなく想えたほどに

年齢よりも大人びて聞こえるやや低いピッチのアルトと、その年齢より幼く聞こ
える笑い聲の無邪気を。

無垢に（——清楚に）

私の耳は聞いていた。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

私は見ていた。

彼女はほゝ笑むのだった

蝶のいる空間を。

いつでも

光と、ものの翳りと、まさにそこに蝶のいた一瞬の痕跡を無際限に想われるほど

に撒き散らし

まるで彼女に
揺らめかせるそれ。
知性などかけらもなく想えたほどに
蝶のいる空間を。

無垢に（——清楚に）
誰もが知っていた。
無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）
レ・ヴァン・ハンは死にかけたレ・ヴァン・クアンを介護した。

彼女はほゝ笑むのだった
まさに娘としてけなげに。
いつでも
彼女自身が臆而やつれて仕舞うことを案じさせるほどに。

まるで彼女に
私も知っていた。
知性などかけらもなく想えたほどに
誰もが知っていた。

無垢に（——清楚に）
レ・ヴァン・クアンは家出した娘に殺されたようなものだった。
無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）
レ・ヴァン・クアンは死にかけの息を吐きながら。

彼女はほゝ笑むのだった
ハンが家出した一週間後にクアンは病院につれて行かれた。
いつでも
不意に失神して倒れたからだ。

まるで彼女に
レ・ヴァン・カンと、レ・ヴァン・ヒエンと、レ・ヴァン・タムの家で、親族の男
とビールの二本目を飲んでいる時に。

知性などかけらもなく想えたほどに
レ・ハんと、自分の家で、思わず聲を立てゝ笑おうとした時に。
無垢に（——清楚に）
レ・ヴァン・クアンはビールを吐きながら前向き倒れた。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）
テーブルの皿を顔面で撃って。
彼女はほゝ笑むのだった
両脚をくの字に一気にたたんで一瞬だけ痙攣させて。

いつでも
レ・ヴァン・カンと、レ・ヴァン・ヒエンと、レ・ヴァン・タムとその集った親族
たちはみんな知った。
まるで彼女に

レ・ヴァン・クアンは尋常ではないと。

知性などかけらもなく想えたほどに

レ・ヴァン・クアンはすでに死に懸けているのかもしれないと。

無垢に（——清楚に）

レ・ヴァン・クアンはあるいはもう死ぬのではないかと。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

レ・ヴァン・クアンはいずれにせよもうすぐ死ぬに違いないと。

彼女はほゝ笑むのだった

レ・ヴァン・ハンは知らなかった。

いつでも

家出したばかりだったから。

まるで彼女に

電話番号さえ変えていたから。

知性などかけらもなく想えたほどに

フェイスブックも Zalo も、親族の総てをブロックしていたから。

無垢に（——清楚に）

レ・ヴァン・クアンは入院した。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

誰もが知った。レ・ヴァン・クアンは癌だった。

彼女はほゝ笑むのだった

レ・ハンは知らなかった。

いつでも

家出して一週間たったばかりだったから。

まるで彼女に

電話番号さえ変えていたから。

知性などかけらもなく想えたほどに

フェイスブックも Zalo も、親族の総てをブロックしていたから。

無垢に（——清楚に）

レ・ハンを誰もがさがした。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

誰もがすでに知っていた。

彼女はほゝ笑むのだった

レ・ヴァン・クアンは娘の爲に死んでいくに違いないと。

いつでも

娘こそがレ・ヴァン・クアンを癌にしたに違いないと。

まるで彼女に

レ・ハンを見つけたのは7月の始めだった。

知性などかけらもなく想えたほどに

グイン・ヴァン・ホアンがダナンで見つけた。

無垢に（——清楚に）

その土曜日に、再開していた週末のドラゴン・ブリッジのイベントの人の群れの中に、ハンは友達と戯れていた。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

女が二人と男五人。

彼女はほゝ笑むのだった

同じ年頃の一群の中から、グイン・ヴァン・ホアンはハンを引きずり出した。

いつでも

ハンの手首をつかみ取って。

まるで彼女に

黄色いドラゴンが水を撒いた。

知性などかけらもなく想えたほどに

その時に、黄色いドラゴン・ブリッジが水を撒き散らした。

無垢に（——清楚に）

ライトアップの光に緑り色になりながら。

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

ハンは素直に笑っていた。

彼女はほゝ笑むのだった

無邪気なまでに、ハンはホアンに笑いかけた。

いつでも

その、五十四歳の、クアンをよく知る親族の一人との偶然の邂逅を、ハンはあまりにも素直に笑って喜んだ。

まるで彼女に

ホアンはレ・ヴァン・カンの家に連れもどった。

知性などかけらもなく想えたほどに

レ・ヴァン・タムが罵りながらハンにクアンの入院を告げた。

無垢に（——清楚に）

レ・ヴァン・タムは見た。レ・ヴァン・タムは

無邪気に（——素直に）だから（——ふしだらなまでに）

レ・ハンがあまりにも素直に歎いたのを。

彼女はほゝ笑むのだった

ただ、病を得た父の苦悶の爲にだけ、心のそこから歎いたのを。

いつでも

わたしはそして振り返った居間の翳りに、いつかレ・ダン・リーがソファに身を預け、スマートホンを弄っているを見た。

寝室に見つけ出したレ・ハンに、思わず壬生は聲を立てて笑った。邪気もなく、そしてレ・ハンはただ、嘲弄するような不遜な眼差しの傲慢を、殊更に作って見せ、...あな

たは。

あなたの肌はいやらしく匂う。

わたしのせいで？

思い、独り語散るように喉の奥にだけさゝやき、そしてその眼差しに壬生を息をひそめながら（——渴いた？）見つめた。（——飢えた？）射す様に。ただ（——渴いた？）純粹に彼を（——渴きゝった？）侮辱しながら。壬生は（——まさに沙漠があふれ出た滂沱の涙さえ一瞬にして飲み干すように）その目の前にだけ、そのすがたを曝していた。かくて偲を以て頷して曰く

ハンの褐色の肌が汗を知る——かさなりあう

ざわめきたつのを知るだろう

それをリーは見ていたのだった——聞き取られ得る音さえもなく

肌はすでに

笑みながら——肌の上に。さらされた

肌それみずからのざわめきのざわめくおとが

時には笑い聲を立ててしまいそうになりながらも——その色彩の上に

ざわめきたつのを知るだろう

ハンが戯れて乳首を咬む——さまざまなヴィルスの生息

のどのおくに、肺さえもすでの

わたしのそれを——さまざまな命の群がり

いきづかう、いきのさまざまの

リーはベッドの端に腰かけ——群がる

さまざまにもその

蚊帳のさがった向こうに見ていた——かさなりあいながら、それら

ざわめきたったざわきめのおんどが

白い、時にゆらぎのある翳りの中に——いのちの群れが

ざわめきたつのを知るだろう

からむふたつの異なる褐色の色の戯れ——溶かし合いながら？

ふれあうものと、ふれあうものの

そのかたちの戯れを——お互いを

ふれあいのうちに

ハンはわざと聲を立てる——溶かし合いながら？

ざわめきたった、それら

いつもと違って、いままさに——それら、さまざまな

ざわめきの、おもさのある気配。その

女は男に抱かれて歓喜する——無際限なまでの

息吹きを

まさにそんな聲にリーを見て——群がる。命の

ざわめきたつのを知るだろう

見捨てた——群れの群がり、例えば

女はひらいた眼の中にも

軽蔑さえも匂わせながら——咀嚼し合いながら

かくに聞きゝレ・ハン一時廻る比には歸りきひとりみづからのバイクに乗りて歸りたるなり是れユエン嘗て使ひたるを貸シ與へたものナリき壬生リーを案じレ・ダン・リー

をさがせりかくて探シて見當らずひとり知らレザルうちに歸りたるやらん迦久邇壬生思ひきタオ佛間が床に宇津布世天伏シき卧シて時に叫き、チャンが持て來たルやらん食器喰ひをはらぬを東方の庭に捨て投げられたるを壬生は見きタオ四肢をすでに死にたるにも擬態させテ脱力させテありき宇津伏セなれば髪そノ顔と叫び聲をだに顔は覆ひきユエン歸リテ騒ぎ壬生にはしゃぐ迦邇母見ゑて言さく市場に感染者発見されたり云々かくてユエンかの女のスマートホンに市場テープに封鎖されたる写真見せりこの市場日常に頻繁に通ふ市場なりき週末にもユエンと俱なりテ行き、子供ジみて案じたるを壬生あやすにも似てなだめてわざとに案じわざとに古度母ジみて案じたるゆゑになだめ得ずして壬生のち寢室にユエンを抱き、いつもに變はらずユエン壬生の最後をは知らズ臆而腕に眠りき明けテ朝早くユエンめ覺メき未だ六時も回らず起コスともなくに壬生に戯れじゃれ弄びするに壬生メ醒メてユエンを抱くユエンこの時はじめて壬生のをはりたるを知りきユエンひとり素直に歡喜しきかくてシートを触れて笑へり壬生恠しみて又ユエンが爲に笑みきかくて頷して

あなたに話そう。

まさにあなたの爲に話そう。

会社のスタッフも病院に行つたとユエンは云つた。

義父の熱が下がらないから。

そして同じ通りの家に、感染者が出たことを知っていたから。

ユエンはそう云つた。

——心配？

問うわたしにユエンは応えた。

勿論だ、と。英語で。

そして大聲をさえ上げた。

最悪よ！ と。ベトナム語で。

なじるようにささやいた。

Troi oi と、...まったく、...なんてこと！、...やばい、...すごい！、...まじか！、...うそでしょ？、...ちょっとちょっと、...

Oh my god、と。日本語で。

思う。...あなたは、あなたを心配しているのだろうか？

あなたと、あなたのわたしと、あなたのあなたたちを。

その未来を。

行く末を。

あなたは、病院に行つた同僚を心配しているのだろうか。

その家族を。

あるいは残されるかもしれない家族を。

その未来を。

行く末を。

コイが部屋を出てきた。

冷蔵庫に自分でひと口に捌いたスイカの切り身のタッパーを取りに。

そしてわたしたちのはす向かいに座つた。

わたしが昔かった黒いテーブルの向こうに。
わたしが昔かった四脚の白い椅子にすわって。
あまりにもそれはいびつな趣味だった。
淡いグリーンペンキを剥げかけさせた、その家に似合いはしないことは知っていた。
コイにもタンにも似合わないことは知っていた。
わたしにも、あるいはユエンにも、それなりのカフェでなければ似合わないことはしっていた。
スイカをすするように食べるコイの上半身裸の肉のたるみには、まさにあまりに不似合いだった。
笑うまでも無く、ないし哀れみに心が痛むまでに。
耳にコイの唇のすすり上げる音を聞いた。
歯と口蓋の咀嚼の音を聞いた。
テレビにユエンはニュースを流して居た。
コイは殊更に自分の意見をまくし立てた。
誰も答えなかった。
わたしたちはニュースの音声を聞いてた。
コイは殊更に自分の感想をのべた。
誰も答えなかった。
コイは罵倒した。コイは嘲笑した。コイは罵った。コイは憐れんだ。コイは軽蔑した。
日本に関するニュースにだけコイは深い同情と、又笑い聲を以てした。
私に気を使ったのだった。
それ以上に意味はない。
コイの眼をぬすんでユエンは口づけた。
私の額に。二度。
鼻の頭に。
一度。
タンがめずらしく帰ってきて、そしてユエンは罵るようにその日の結果を報告した。
タンに、今日のベトナム各地の新型コロナの惨状を。
かならずしも未だ悲惨には遠くいたらない、その。
アメリカに比べれば。イタリアに比べれば。スペインに、ブラジルに比べれば。そして日本に比べれば。
いつか中国は姿を消した。
二月の比をいまや、まさに單なる思い出の淡い影にしおおせて。
タンは喚くように騒いだ。
ユエンは叫ぶように騒いだ。
壁の向こうの、おそらく庭でタオが一人で月にでも吠えた。
號ばれた聲の狭間に、テレビの音声とコイのしゃぶりあげる音を、私は耳にだけ

聞いた。

その時に、自分のそれに昼間に感じたのと同じ感覚が、陥穽に堕ちたように、ふいに芽生えたのを壬生は懐かしくさえ思った。レ・ハンの時と同じく、零れ、滲みだしたように、その陰湿な感覚を壬生は、そして想った、雪菜にさえ、——と。十代の頃にさえ、と、壬生は、——なぜ？ と、恠しみ、壬生は、女などに、——と。

射精など（——あなたは）...女などに...

なぜ？

母親のせいなのだろうか？

十二歳の時に、彼の（——あなたは）目の前で大口を開けて笑った、その。

なぜ？

壬生がからだの中に（——あなたは）果てたのをユエンは、その（——まさにあなたは、大人になった。...と）喜びの失せた眼差しの中に（——ようやく、と、）ただ、言葉もなく（ユエンは、自分の喉の奥にだけ）赦した。そんな目をしているように（ささやき、ユエンは）覆いかぶさった壬生には（赦した。）見えた。死の（壬生を。）可能性が、周囲に拵がっていたからだろうか？ 壬生は（だれもが）思った。いつもよりは広範囲に、普段よりは（だれもが、）はっきりと。明ける前の夜の（だれもが、雪崩れるように）いまだ暗いころ、壬生は（大人になる。サパの雪が）腕の中に眠るユエンの寝息を（溶けて、）聞いた。そのときに（くずれおちるように、）唐突に亂れる寝息が（...と、）變らず永遠に（雪が、いまだ、...と、）持続するかのように、壬生は（いまだ一度もわたしの）思って（わたしの見たことのない）陰惨さをだけ觀じた。かくて偈を以て頌して曰く

その夜に

ひとがしぬまえに

だれがあなたを愛するだろう？

もはや自分の気配さえなくした気がした

ここではだれもがあわててへやを

醜い子

静かだったから

かたづける。その

だれがあなたを愛おしむだろう？

封鎖されたその町は

しんだもののたましいを

ダン・ティ・タムさえ

もはやかたわらに立つ

すみやかにむかえにこさせるために

あなたをむしろ

ユエンの寝息さえまるで

ひとがしぬと

ののしり聲に

いつかにつかれた嘘を

ここではいちにちじゅう

纏わせた

いまさらにやっと思い出したように思った

うちをひとびとにかいほうする

だれがあなたを愛するだろう？

観光都市は

いもんのきやくを

醜い子

最早

ちゅうやをわかつ

だれがあなたを愛おしむだろう？

そこに住むひとしかいなくなれば

むかえいれるために

どうして

どこよりも簡素な町でしかなくなった

にわかいえのまえのろめんに

だれもが生まれなければならないだろう？

観光都市は

はみだしてもへいきで

どうして

あまりに無防備に

テントをはって

黙って滅びてはならないのだろう？

素顔だけをさらした

だれをもむかえる

だれがあなたを愛しただろう？

まだどこかにレ・ダン・リーが

テーブルのうえに

醜い子

そのままの格好で

スイカのたねがまきちらされる

だれがあなたを愛おしんだだろう？

ココナッツの下に

テーブルのしたに

どうして

ひとりでたっているような気がした

スイカのたねのからがまきちらされて

だれもが誰かに

身を起こした私には気が付かなかった

ときにふまれて

愛されなければならないのだろう？

自分にさえすでに満足していたユエンの寝息は
おとをたてた
どうして
暗がりというにはあまりに明るかった
もうすぐクアンはしぬにちがいない
そのままに捨て置かれ
観光都市は
いまだにしないクアンのかげりは
どうして
壁の向こうの遠くに誰も見ないライトアップをさらしていたに違いなかった
ユエンがこゑをたてそうになった、そのときに
そのままに忘れ去られてはならないのだろう？
観光都市は
てんじょうにつきだしてこうもんをかんだ
あなたは見たか？
惰性の中でだれにも求められなかった、誰の爲でもないきらびやかさを曝し
さめのそれのように
醜い子
そこに輝き出していたにも違いなかった
いつかしげったはのならびで
その蝶が
ココナッツの下にタオがいた
すきほうだいに
白い翅の
その翳りが
かれのこうもんをかみちぎった
粉末をわずかに散らして
斜めに螺旋を描いて伸びた肉と、肉に
だれかがしんだとき
目には見えない
喰い憑かれた骨と、骨に
あさからばんまでひらかれたうちの
散った粉末の
斜めにさかだち喰い千切られた肉と
テーブルをだれもおとずれない
わずかな散り塵りのその気配のうちに
筋のような管を浮かべた
よるのふかい
浮かぶように
重力など

そのしんやには
飛び去ったのを
顛倒した世界観が見せた一瞬の陥穽だったと
ねずのぼんの
もはやだれが
わたしの眼差しにだけはっきりと告白して
しろしょうぞくのおんなたちが
だれがあなたを愛しただろう？
まだどこかにレ・ダン・リーがひそんでいるように思った
ささやきあって
すでにだれが
その影を
こゑをかさねる
だれがあなたを愛おしんだだろう？
又は気配を
ときにはわらい
まるで嘘のように
わたしには探す気をさえ
そのこゑがなり
かぎりなく愛してしまったかにも
起こさせないで
鳴りひびきながらも
ゴック・アインは擬態して

かくに聞きゝ 7月29日すでにダナン市飲食店舗各種ことごとくテイクアウトのミ許サル
かくて店内飲食禁じられたりきかくて住民感染恐れたれば外食制限せりかくて自炊せり
かくて会社等ことごとく閉鎖スかくて早朝いまだユエン汗流シタるに壬生にゴックから着
信ありキ壬生これを見せりユエンを氣遣へる譯でもなくにかくて後ユエン送りかくて
後ゴック・アインが家ヲ詣でキ壬生道中に見ルに会社事務所等軒なみシャッター閉じ多
里岐迦久ヨゴック・アイン在宅なりキ訪問ゴック・アインを又油彩に描カンと想ひ付き
タるゆゑなり壬生ゴック・アインと語りタるに壬生に画家を紹介せんと云シキコレ壬生
が上書きシタルキャンパス数枚の元繪の画家なりキゴック・アインすでに二十數枚彼ノ油
彩を購入シをはりキ壬生笑みゴック・アインがかたわらにゴック・アインが爲にのミ笑
みてかくて壬生承諾せりゴック・アインいつとも明言せざりキ迦久ヨゴック・アイン壬
生を求めキゆゑに壬生ゴック・アインを赦シキ壬生ゴック・アインに用を足さずゴック・
アイン笑ひキ諦メることなく又諦メざるトもなクにたゞゴック・アイン壬生に戯レキ壬
生なスが儘にまかせキかくて頌シテ

あなたに話そう。

まさにあなたの爲に話そう。

その日影で見たプルシャン・ブルーのような。

わたしに油彩画を教えたのは大津寄虎次郎という男だった。

その乾く前のカーマイン・レッドのような。
なぜデッサンを教えなかったのだろう？
その厚塗りのコバルト・ブルーのような。
彼は画家ではなかった。
その溶いたキクナドン・バイオレットのような。
敵島で能面を作った。
そのうすいマゼンタ・イエローのような。
能面と、時に雅楽面と、多くの時には土産用の蘭陵王面。
その日の下のコバルト・バイオレットのような。
あくまで簡易的なもの。
その西日に見たグレイ・オブ・グレイのような。
大津寄虎次郎は身寄りがなかった。
そんな白。
自分以外にはひとりも。
白。
戦争のせいだったのかもしれない。
白のいくつかのヴァリエーション。
大津寄虎次郎はわたしが十歳だった時、すでに七十近かった。
グラデーションがかかる白。
絵が好きだった私の為に、祖母はかれに私に教えさせた。
抜けるような白。
ふたりは親密なゆうじんだったから。
砂のような白。
大津寄虎次郎は平成元年の1月8日にひとりで死んだ。
行き止まりのような白。
居宅の縁に座って、腹を切っていたのだった。
あわい白。
遺書は何も残さなかった。
絶望的な白。
縁は東に向いていたかも知れない。
濃すぎる白。
そして大津寄虎次郎はきちんと北東を向いていたのかもしれない。
絶望的なまでの白。
誰も彼が右翼だとは思わなかった。
裏切りの白。
腹を切った、かつて交安に拘束されて拘禁されていたマルクス主義者が。
懐疑的な白。
長崎と広島がもうすぐ焦土になるころに。
不安の白。
だれも彼の殉死をうたがわなかった。

歓喜の白。

あばれた腸と、苦痛にあばれた肉体の、縁に前のめりずりおちかかった儘に時を止めた。

沈黙の白。

その様を祖母が見出した。

みずからをみずからに隠し通した白。

彼に土産物をとどけようとしたのだった。

そのジंक・ホワイトのような白。

私の父が京都に出張した時の土産を。

そのシルヴァー・ホワイトのような白。

ゴック・アインを見た時にわたしは彼を描こうと思った。

そのチタニウム・ホワイトのような白。

道具は彼が用意した。

そのパーマネント・ホワイトのような白。

彼にとっては戯れだった。

そのセラミック・ホワイトのような白。

わたしの眼差しを独占し自らのかたちに淫させる、色めいた戯れだった。

その紫がかった白。

私にとっては彼のかたちがいかに不可解に見えたからだった。

その橙がかった白。

そのかたちの嘘の美しさが。

その朱を暗示させた白。

わたしにも等しい美しさが。

その匂うような白。

レ・ダン・リーを壊した美しさが。

そのブルーに近い白。

わたしは彼を処罰するように描いた。

空の真ん中のブルーに。

まるで強姦するように。

空のふもとのブルーに。

まるで掠奪するように。

空のあがりかけのブルーに。

まるで拷問するように。

雲の切れ目の日照のすぐそばに見えたブルーに。

まるで侮辱するように。

海のブルーに。

まるで凌辱するように。

磐を打ったしぶきの匂わせたブルーに。

まるで愚弄するように。

覗き込まれた海の人影の反映のブルーに。

まさに、彼の肉体に、——精神に？ あますところなく刻むために。
海の紺碧の波立ったブルーに。
鮮明な痛みを。
霞みを知った淡かすむブルーに。
あきらかに知らせるために。
蝶の羽根に見た一瞬のブルーに。
鮮明な痛みを。
しげた葉が時に影に暗示した気配としてのブルーに。
まざまなと教えこむ爲に。
人の肌の翳りの色がわずかにきざす暗示としてのブルーに。
鮮明な痛みを、まさにその肉体に。——精神に？
セザンヌのいくつかのブルーに。
皮膚に。——精神に？
セザンヌの水浴のいくつかのブルーに。
肉に。——精神に？
セザンヌのリンゴの塗りつぶされた下のかすかなブルーに。
筋肉に。——精神に？
セザンヌの手の血管らしき翳りに薰った気がした思い出のブルーに。
筋に。——精神に？
あくまで白く。
軟骨に。——精神に？
その雪のような白。
咬み合う骨格に。——精神に？
ふる雪のような白。
毛髪にまで、うぶ毛にまで、——精神にまでも？
ただ、白というだけの棄てられた白。
まさに調教するように。
無理なポーズを厭わなかった。
まさに調教するように。
ゴック・アインは、ひそかにそれを愉しんで居たに違いなかった。
まさに調教するように。
見られる苦痛を。
まさに調教するように。
肉体の痛みを。
まさに調教するように。
苦痛をみられることを。
まさに調教するように。
痛みをのみ知る肉体を。
まさに調教するように。
そのむえせぶ無言の痙攣を。

まさに調教するように。

ゴック・アインが用意したのは使い古しのカンバスだった。

最初二枚用意した。

さまざまなかたちで、様々に、さまざまな白をそれぞれに塗った、ただ白い絵画。

ベトナムの画家が描いたものだと云った。

ゴック・アインは、手に取って見る私を振り返り見て。

その九月、一年近く前の日曜日に。

抽象画には違いなかった。

色彩をだけ、その白のヴァリエーションをだけ用いた、簡素な。

あるいは複雑な？

同じ色は一つもなかった。

同じ白の色彩の中で。

どれもが固有のその白だった。

或は、——と。

——雪、書いたのかもしれないね。...これ。

そういった私にゴック・アインは無音の笑みをやさしくくれた。

いつもの軽蔑の色を潜ませて。

——雪、見たことある？

私は云った。

ゴックアインは応えた。——あるよ。

と。

——日本で？

——日本とベトナムで。

——ベトナム？

——北のサパで、時々雪はベトナムにも降る...

わたしは白いおうとつを、ゴック・アインの形に色彩の直線と曲線でつぶした。

彼を、あるいは愛する爲？

あくまで独善的に、かれの痛みを知った肉体の、その事実に淫する爲に？

愛する爲に？

ホルバインの油のそれと絵具のその混ざった、揚げ古しの食用油を腐らせたような臭気の中で？

すぐ近くに、住んでる。そうゴック・アインは云ったのだった。この、繪、書いた人、——男？ 壬生が不意に尋ねたので、ゴック・アインは一瞬とまどって、そして壬生を見詰め、そして笑み、その笑みが壬生の目に、すでに音もなくふりかかった気がした時には、——知らない。ゴック・アインの独り言散るに似た聲を聞いていた。——知らないって？——見ても、良く判らない。...聞かなかった。性別は？——判らない？——逢えばわかるよ...かわいそうな人——臆而、ゴック・アインは（——そうやって、）思いだしたように、（——そうやってひとりで）病気なのかな？（——そうやって）

病気？（——いつでもあなたは）

あの（——まるでいま）画家。

画家？（——気付いたような）
だったら（——あなたは）嫌だな。
なんで？（——まるで）
うつったら、...（——まるで今）嫌なんじゃない？...やっぱり。
そして（——振り返ったそこに）壬生は（——気付いたかのように）ゴック・アインが
その（——ぼくの）唇の端に（——ぼくの）ひとりで立てた笑い聲を（——あなたは、）
聞いた。（——ぼくが存在を。）邪気も無く、素直な、（——そこに）
じゃない？
そして（——振り返ったそこに）
違う？（——あなたは）
そのささやき聲を（——はじめて、と）聞き（——ゴック・アインは）かくて（——ほゝ
笑みさえしながら）偈を以て頌して曰く
その画家はひとりでかいている
そう云った。ゴック・アインは、私の
その、言葉など、うめき声さえ発さない
同じ白い繪を。そのバリエーションを
許可を得ることもく、又
その口。分厚い、斜めにゆがんで垂れた
おそらくは
許可など得ようとししないで、ひとり
その唇。なぜか
それがバリエーションだということを気付きもしないで
自分勝手に、そして傲慢に
こさらに黄色い齒、ぎざついた
その画家はクアン・ナムの海の近くの家で
そのやさしい聲で
疎らな齒。片方の目をおおいつぶし
ひとりでかいている。いまも
ややピッチの高いテナーで、耳元に
膨らんだ奇妙な腫瘍？...の
彼が死んでさえいなければ
そう云った。私の傍らに
表面に生えた毛の密集
例えば新型コロナで？
横顔を許可も無く
そりかえた背で
世界中で大流行の
私の許可も無く
自分の背中をへし折ろうとたくらんだほどに
結局はどうすればいいのか未だ

許可など得ようもしないで
反り返った背なかで
誰にも判っていない
そう云った。彼が
息遣う。いつでも
その病気で。結局は
或は彼と私が
あらい、深呼吸のように
これからどうなっていくというのか
これからなにをするのか
大きく開き切った左目の黒目は
未だ、誰にも
私はすでに知っていた
白い
たぶんわかってはいない儘に、綺麗に
まかせたのだった。わたしは
雪の降ったようにも
とてもあざやかに
ふたりがそうするように
まさに白く
アメリカをぶち壊して崩壊させた
ゴック・アインが私を抱きしめる儘に
ひたすら白く
新型コロナで？
目を閉じはしなかった。わたしも
自分が惨殺されたとしても
死んでさえいなければ
彼も。お互いに
彼は気付かないはずだ。自分が
その家はむかし豚と鶏を飼っていた。いまは
見つめるのだった。あまりにも近いふたりの
死んで仕舞ったことさえも
その画家とその母親しか住んではいない
その距離の中に
死に懸けた眼にさえも

かくに聞き、7月30日壬生ユエンを送りテ後町をバイクに廻りき行ク宛ても那ク爾町を
通ルに飲食店等悉く店を閉メき政府所謂ロックダウン通告シき町に Covid19 の注意看板
注意広告等張りめグラシきベトナム社会主義国家なればもトより町にスローガン付き看
板散見され日に灼かれり日本の戦後の教科書に見る日本ノ戦中期教科書等思はせる絵柄
に軍人ヲ農民ヲ市民ヲ母ヲ父ヲ子供ヲ一致団結し向かふの方向を見て笑みて見て決意し

てありきそれらが絵柄と全く異なりて Covid19 看板今風なればさざなみは異なる時代が
雙つ同時にさざなみは出現したかに見ゆ壬生さざなみおかしくてひとりさざなみつづけ
て笑ミキユエンが家の近クにさざなみミーの店すでにさざなみつづけたそのなみの
ふいにめざめた

その

めざめたなみののたうちまわったなみしぶきの

しぶくひまつ

さわぐひまつよ

さわぎちったひまつよ

ひまつよそのしぶきあげたかみに

シャッター下ろして人気なし店の前に隣の家ノ者プラスチックの椅子出してひとり翳
りに勝手に憩ひき是れ三十代の男なりき半身裸に汗の気配なく短パンに殊更に太き足に
ノみ日が差シ當るを男いさゝかも気に留メざりてをりき壬生家に歸りてメッセンジャー
にレ・ハンのメッセージアルを見きいまなにをしますかかく也壬生返さんトすルに居間
に隅に物音ありきかくてそちら見テ視遣るに鼠ノ大なる一疋むしろ壬生が方に向かひて
疾驅して俊敏なりきその色灰黒色の翳り足の先の遠からざるを駆け抜けテ庭に消えり壬
生片岡信夫がこと思ひ出テ壬生彼に連絡せりかくて頷シて

あなたに話そう。

まさにあなたの爲に話そう。

——どうしたの？

そう云ったのは私の方だった。

私が鳴らした着信を片岡は取って、そして、笑い聲さえたてずに、或いは戸惑い
さえ見せずに云った。

——何が？

——どうしたの？

——電話、かけてきときて自分がそれ云う？

片岡は聲に出して笑った。私は云った。

——今日、何曜日だったか？

——今日？

——木曜日？

——いや、...それ明日だね。

——まだ生きてるの？

——死んではないね。もうすぐ死んだらごめんな。

——今日仕事じゃないの？

——だったら連絡するなって。...家にいる。いないけど。

——四次元にでも迷い込んだ？ ひょっとして異世界ってやつ？

——カフェ。...というか、喫茶店。純喫茶。昔ながらの。...暇だからね、ここ。

若干高いけどな。

——金持ってるじゃん。

——椅子がいいんだよ。家にいても暇だし。

——仕事は？

——今も工作中だよ。リモートワーク。…的な。ネット対応してるだけ。ま、…暇だね。お前も暇そうじゃない？

——すさまじく暇だね。こっちも始まったよ。また。コロナ。

——聞いた。コロナ優等生だったけどな。

——たぶん、相当深く入り込んでる気がするな。日本みたいになるかも。…ならないか。

——こっちはやばいよ。又 8000 人だっけな？…新しい患者。…もうすでに前みたいになってるよな。三月四月の…

——それで、何もしないんでしょ？

——非常事態宣言？…何をいまさらっていうのもある。

——そう思ってるの、日本人だけじゃない？ 来年、ふと気付くよ。

遅ればせながら。自分たち所詮、島に生きてる島の莫迦なカエルだったって。

一回、滅びちゃった方がいいんじゃない？ もう立派な後進国だしね。

…去年からうじて二流国。たぶん来年三流国。ないしそれ以下。

——結構云うね。恨んでる？

——暇だからさ。若干自虐的な、とはいえ客観的な事実。

お前、外人だったとして、コロナでさえ違いが出せない先進国カテゴリーの所詮外国に、お前、興味ある？

——俺、思うんだよ。

——何を？

——結局、中国の武漢で…諸説あるけど、とりあえず武漢の市場で蝙蝠買って食った奴が居たでしょう。

とりあえずの、いま一般にそう云われているように仮定しようよ。そいつが、最初のコロナ患者だろ？

——そうな。

——そいつ、例えばコロナのアダムと名づけようよ。乃至、コロナの伊弉諾ノ尊、…か？ おれたち的に云ったらば？

——で？ 黄泉の国にでも行って仏陀にでも逢うか？ ツァラトゥストラの亡霊にでも？

——コロナの伊弉諾は死なずに生きてたでしょう。ひとり完璧な抗体持ってゝね。

で、そのコロナの伊弉諾は、…ま、殲滅の創造者伊弉諾は、悪意があったとは言えないだろ？

——好きなもん、喰っただけだからな。

——クジラ喰い生食する日本人の野蛮、牛豚ジビエ屠殺して肉食の白人たちの野蛮、犬喰い蝙蝠喰う中国人の野蛮。

どっちもどっちな。とは言え、真鯛の刺身が文化なら蝙蝠喰うのも文化だろ？

——で？

——悪意もない世界殲滅の創造者伊弉諾は今、武漢の外れで今、どんな想いで世界みてるんだろう？

或いは、自分以外の家族が自分がまき散らしたウイルスのせいで死んじゃってたとしたら？

...たったひとり残ってたとしたら？

——孤独だろうか？

——世界で一人だけ生き残った気がしてるだろ？ おそらく。俺には判る気がする。

——なんで？

——わかるよ。さらに、彼は自分に悪意がないこともちゃんとしてるんだよ。

世界殲滅の創造者伊弉諾は。

彼は多分野に咲く花が好きで詩経暗唱するのが趣味なんだよ。世界殲滅の創造者伊弉諾は。たぶんね。

でも、世界殲滅の創造者伊弉諾は、彼こそが世界殲滅をもたらしたことを知ってるんだんよ。...どう思う？

...すさまじい悔恨、判るでしょ？

——なんで？

——わかれよ。その気も無いのに、気付いたら世界を殲滅してたんだぜ。

世界殲滅の伊弉諾は、そんな風景を見た譯よ。...たぶんね。

まちがいなく、世界殲滅の伊弉諾は、ひとり誰よりも深い悔恨の中で桃でも喰ってるのさ。

なすすべもなく。もうコロナじゃ死ねない快癒した世界殲滅の伊弉諾は。

伊弉冉の体を焼いた焰さえ、自分の体が吐いた焰だと知りながら、...ね。

——なんの話？

——罪と罰。そして罪ならざる罪の罪と、罰にあたわざる罪にふさわしい罰を求める魂の懊悩について。

——愚劣だね。

——なんで？

——あきらかに、自分に落ち度、ないんでしょ？

——だろうな。

——結局、それ、自己憐憫でしょ。そうやって、懊悩を以て自分を無罪化する。

——そうかな？

——じゃ、なんて言ってほしい？

片岡は黙った。

そして笑った。

そして笑って、後に云った。

自分の笑い聲がおさまるのを待った後で。

片岡はわたしに言った。

——べつに。なにも。お前にはなにも求めてない。

——何かあったの？

——そのうち判るよ。

そしてわたしは彼の爲に聲を立てて殊更に笑った。

——知ってるか？

私は云った。

片岡の爲にだけそう云って息音に笑った。

——コロナになって再感染するらしいね。いくら快癒しても... 治っても。

——それで？

片岡はその通話を切った。

「日本ってさ？」壬生は云った。「何？」片岡は応えた。「封鎖とかしないの？」「経済優先... だってさ、たぶんコロナの実被害以上に、人、死ぬね。放っといたら。たぶん。日本人... 政府って、放っとくのが好きだけだな。ま、死ぬね。大量に。」「仕事なくて？」「つぶれて。首になって。あぶれて。」「おれと一緒にじゃない。」「或る意味、飢饉の危機な。むかし百姓今サラリーマンね。百姓もサラリーマンもみんな飢えて死んじゃうよ。そのうち、一揆起きるんじゃない？」片岡は笑った。壬生も彼の爲に笑った。かくて偈を以て頌して曰く

その朝夢を見ていた

いつものように

あのひとの

ひとりで、あるいはなぜ

ユエンは体温をはかった。わたし

ははの

ひとりでしか夢を見ることが出来ないことに驚かないのろう？

たぶんコロナよ。... と、彼女は笑って

ははなる

ないし、恐怖を?... その、圧倒的な

わたしに耳打ちした。英語で

ははのおおぐち

固有性そのものきらめきに散る

わたしはもう、たぶんコロナよ

あけひろげたくらいあな

それら花のような小さな粒が

そう云った。戯れとして

あのひとの

空間の中に。夢見られた

真摯な、ただ自分にたいしてだけ真摯な

ははの

むしろうす紫に翳る淡い空間の中に

あきらかな歎きとして

ははなる

暗示だよ

熱あるの？ 云った私に

ははのおおぐち

わたしはささやく

ベトナム語で答えた。——ないわよ
あけひろげたくらいあな
暗示だよ
わたしは平熱よ。でも
あのひとの
わたしは自分の耳にあざ笑いながらささやく
すこしくらいなら、一日のいつかは微熱を感じるに違いない。だから
ははの
あなたは今、夢にまでそのナノ・ウィルスの夢を見る
知ってる？...なにを？
ははなる
ちいさな、臙而ほろびるしかない花のような粒が
わたしはもう、コロナなのよ。...どうする？
ははのおおぐち
滅びる前にはじけて割れた...分裂する
何が？...わたしが死んだら
あけひろげたくらいあな
それは繁殖だったのだろうか？
コロナで、みんなと同じように
あのひとの
引き裂かれる...それを
私が死んで仕舞ったら
ははの
あくまで繁殖と呼ぶのだろうか？
あなたはどうするの？
ははなる
割れて砕ける...その凄惨を
わたしは笑った。聲に
ははのおおぐち
いくつかに割れた残骸のむりやりの自己修復のそれぞれを
わらった聲にはしないままで
あけひろげたくらいあな
それは繁殖と呼ばれるものなのだろうか？
わたしは吐いた自分の息に
かえりみれば
ほろびる前にみづから滅びる
かすかに笑った
わたしのめはみるのだった
淡いうす紫の翳りの中に
わたしは彼女の爲に

そのまどのむこう
わたしの口の笑った聲の
笑った。いつもの
ははのあごを
残忍を聞いた
いつもの朝のように

みつめたまなざしのむこうに

かくに聞きゝ 7月31日午前雨降りき故に雨の中壬生ゴックが家を詣ヅ家出るに先立ちて
那我琉流摩麻爾連絡することナしすデに都市封鎖されヲはりたればながれよゴック在宅
ならんかくに壬生思ひきゆゑなりかくて那我琉流摩麻爾ゴック在宅せり家前ノ鐵門内か
ら鍵かけたルが前に着きて壬生ながれよクラクション鳴ラシタるにゴック那我琉流摩
爾一階の入り口が翳りかう姿を見せキかくてゴック壬生をながれよ那我禮弓
とめどもなくに

雨は

あめよ

あめよもはや

とめどもなくながれよ見て観をはる前にすデに笑みて笑みをはりて聲にひたいに歓喜の
色さラシタるに一度はなに立ち止マリて後ろ深くはなすじに翳りタるヲ顧ミき壬生は見
きかくてくちびるにゴック奥に一度入りややありてあごに奥より人出で來タリき壬生ハ
見キ壬生よりわずかにくびに年上ならん但し自分には未ダくびすじに無き老ひの翳り濃
くテ壬生ながれよ目に年上にも觀ジて壬生は那我琉流摩麻爾見キ男の顔すがた余すなく
見てながれよ男笑むかくて一度那我琉流摩麻爾壬生から目をそらしかけてながれよ
まるで

たにんのながしたなみだのように？

そのしづく男返りミて再びそのしづく殊更に笑いかけきかくて男そのしづく家前なるバ
イクに乗りきかくてそのしづくゴック門に走りて鍵其志豆久開けなんとす壬生ゴックが
髪を匂ひ立ち那我禮與匂ひたるを感じき壬生傍らにゴックがしづく目見開きて壬生を見
るなく見開きてそのしづく錠をのミ見不器用にてゴックが目しづく見開きたるヲ見キか
くてそのしづくゴック云さく...お父さん。かく也壬生志儼久ゴックに笑みて又バイクの
上なる男に志豆久笑みて男壬生ノ目ノ前に娘にひとことフたこと云シてかくて那我琉流
摩麻爾去にき迦久いまさらに見ルに鐵門が翳にしづくひとり残りタるゴック白ノその
しづく部屋着の質素に四肢さうして肉付キ誇ルともなく又感知スルともなき儘に沙羅斯
弓壬生殊更にも淫靡にも見へき那我琉流摩麻爾ゴック傾ケタル顔にかスかにながれよ
しづき

ひまつとともに羞じらいの色さらしき壬生目をそらすともなくゴックの眼を見て観を
はるともなくかくてゴックの目いまさらに我に返りいまさらに壬生の眼差しに恥じらへ
ば黒目斜メに彷徨ひ流レたるを見て見やりてかくて頌して

あなたに話そう。

雨の音がした。

わすれさせるくらいに

まさにあなたの爲に話そう。

窓の外に。

もう

殊更に飢えたわけではなかった。

壁の向こうに。

わたしがいきっていることさえも

いまさらに女に。——女のからだに。

匂うきさえした。

わすれさせるくらいに

ゴックの眼差しが恥じらいと貞淑さを装って、そしてそれを彼女の現実にした。

雨の。

もう

たったひとつに事実。

雨に濡れた土の。

あなたのそばにいることを

わたしはかの女の眼差しの求める儘にゴックを抱いた。

知ってる？

まさに

入り口に入ってすぐに、ドアを閉めるともなく。

ささやく。

あなたのかたわらにいたことさえも

窓を閉めるともなく。

...だれに？

わすれさせるくらいに

ゴックは鐵門の錠をだけしめて。

その匂い。

もう

カーテンさえ閉めるともなく。

雨に濡れた土の。

なにもかも

わたしの唇に、抱きしめたゴックの唇を知らせた。

それ。

いきをすることさえ

髪の毛が匂った。

それは土に生息するある細菌が雨の中に繁殖する匂いなのだと。

こどうする

体に、体の触感を知らせた。

知ってた？

しんぞうのひびきのあったことさえ

汗をかいていたのを知った。

ささやく。
わすれさせるくらいに
求めている人間は求められる性急を厭わない。
だれに？
あめはにおう
かならずしも。
その臭気。
みずびたしの
さまざまな視覚と、触覚と、意識のさまざまに心を亂されながらも？
土の。
くつじょくのある
ゴックのさらされた臀部にそのまま光がさした。
生息の空間。
なすすべもないにおい
あの男に何と言ったのだろう？
繁殖の空間。
わすれさせるくらいに
わたしはいまさらにそう思った。
その中に。
もう
あの男はなんと思ったのだろう？
生息していた物の匂い。
かこのすべて
彼は思ったに違いない。自分よりはるかに年下の外国人、と。
知ってた？
いまのすべて
おそらくは自分と殆ど変わらないわたしに。
ささやく。
あしたのすべて
男は歎いたふうには見えなかった。
繁殖していたものの匂い。
きたるべきすべて
案じたふうにも。
...だれに？
ほんのすこしの
唄ったふうにも。
匂う気がした。
さっきのわずかのちんもくさえも
懊悩したふうにも。
その音響の中に。

わすれさせるくらいに
男はわらっただけだった。
雨の。
もう
娘の爲に聲さえ立てて。
雨の音響。
ひびきたつ
わたしの爲に眼差しさえくれて。
水滴の無数の殴打の。
ひびきたつあめの
まるで来年結婚する、娘とあたらしい息子を見ているかのように。
暴力的な？
そのしゅうきに
ゴックは我に返って茫然とした。
その雨の雫の無際限の中に咲く紫陽花の花にとっては。
ふれたすべての
ソファに手を附いたままに。
その新芽にとっては？
かたちはいつか
立った足の贅肉を震わせもしないで。
枝と枝の間の。
あめをうつして
わたしはそれを確認した。
葉と葉の翳りの下の。
ひそかにうるむ
自分のうちから流れ出していくのを、顯らかな触感として。
そのあたらしい葉の芽吹きにとっては？
うるおった
ゴックは茫然として我に返った。
鮮明な暴力。
まなざしのしたの
ゴックが熾り狂うとは思えなかった。
それなしでは生きてはいけないのに？
そのほゝを
彼女は受け入れるに違いなかった。
それなしでは生息できもしないのに？
ぬらしたその
さらされた背中の肌が翳りを這わした。
それなしで。
おんどのあるなみださえ

たしかにそれは美しかった。

繁殖など不可能なのに？

わすれさせるように

ゴックは頸を捻じ曲げて私を見た。

撃つ。

もう

ずりあげた T シャツが垂れて、肌にはった翳りを消した。

無数の、無際限の、かつ小さな。

あなたさえも

ゴックが身を起こして、背中を私の胸につけた。

かつつらなりかさなって今や巨大な。

かさなりあって

体温があった。

無慈悲な迄の。

いきづかう

ゴックが後ろ手にわたしを抱きしめようとして、そしてわたしはそれを赦さなかった。

音を聞いた。

あなたのあきらかな

私の腕にはがいじめにされるままに、ゴックは任せた。

雨の。

そんざいさえも

尻をかすかに上下させた。

ゴックの喉の。

わすれさせるように

確認してるように思えた。

よろこびの聲？

ぼくらはきいた

知っていたはずだった。

濁音の、獣のうなるような。

ときにはごうおん

笑っているように想えた。

みじかい音声のノイズの連続。

そらそのものが

すでに笑っているに違いなかった。

あまりにも不似合いな。

ひびわれてもはや

その頬が。

濁音の。

なすすべもなく

ねじった頸に引き攀った皴をさらして、ゴックは私を見た。

雨の音がした。

くずれおちるような

——すごいね。

コンクリートを撃つ。

ぜつぼうてきな

云った。

隣家のトタンの。

あめのごうおん

その利き腕が自分の腹部を撫でていたことは知っていた。

濁音の。

むしろもっと

私は。

ゴックのよろこびの聲？

そのせんさいな

そして彼女の爲にほゝ笑んでいた。

濁音で、獣がうなるような。

ちいさなみづの

ゴックはわたしに云った。

みじかい一音のくりかえしの。

つぶのむさいげんよ

——なんで？

音響。

もはやまったき

——嬉しい？

匂う。

きょうぼうなぼうりよくとして

——なんで、私がいいの？

ゴックの肌の。

ふりしきって

ゴックはそう云って、笑いかけた儘の眼差しをその儘に、真摯な哀れみを添えた。

ぬれた土の？

うち

わたしの爲にだけささげられた憐れみ、その

あざやかな臭気。

うちみだれ

——出来ちゃうね。

あまりに鮮明な。

うちぬけばいい

目に。

アルファルトの上でも匂う。

そのむきだしの

——ほしい？

ならば、その黒いタールの上にも繁殖していたのだろうか？

きょうたいをさらせ

かのじよの眼に。

生息命の匂い。

そのむきだしの

——私がいいね。

濡れた土の。

いのちさえない

翳りの色も匂いもなく、眼差しの気配だけが翳る。

ゴックの喉の濁音を聞いた。

いとなみのうちに

——壬生先生は、私がいいね。

匂う気がした、その雨の匂いが。

殲滅を

わたしは応えなかった。

土に繁殖する。

壊滅を

ゴックはそれに同意を感じたはずだった。

アスファルトの上にも？

全壊した荒れ野にさも

ゴックはすでにわたしを赦していた。

例えば東京の。

うち

その眼差しの中に。

サイゴンの？

うちみだれ

私を見詰めたその、そして私のしたことを赦したわけでもなく。

ダナンの。

うちむき

そもそも咎めた譯でも無く。

匂う。

もはや

ゴックはすでに私をゆるしていた。

髪の毛が？

むきぶつらのみの

ね、...と。ゴックはささやいた。耳元に、（——ね？）そして壬生は（——なに？）我に返ると、「匂い、...（——ね？）するね」ゴックが（——どうしてあなたは、）耳元に

(——ね?) 言った。「匂っていい?」壬生は(——ね?) 笑みもせずに「はじめて。」ゴックを(——なに?) 見「はじめて、(——どうして、) これ、(——どうしてあなたは、) 見た」シーツを(——蟹股で歩くの? いつも) 汚したそれを(——蟹股で歩くの? いつも) 左の薬指に撫ぜると、(——蟹股で、どこでも、) ゴックは「...臭い。」鼻に近づけて「...ちょっと」嗅ぎ、(——ね?) そして「臭くない?」笑った。かくて偈を以て頌して曰く

いっばいいるよ

あきらかに

笑いながらそう云った。ゴックは

あからさまなほどに

ひとりで、ソファの上に

それはたしかにうつくしかった

わたしのひざのうえに身を丸めながら

あるいはいつでも

どこでも、もう

そのおんなのかたち

いっばいだよ、もう

はだのしょっかんと

そう笑いながらゴックは云った。ひとりで

そのしきさいも

ゴックは私の腕の中に

たとえばかのじょのしろいろは

ことさらに甘えてしがみつきながら

あきらかに

光がさす

ひとのめの

ななめに

そのめのみいだす

皴がよる

ふうけいのなかで

皮膚の上に

そのいきづく

その贅肉の

しわのよったからだの

骨格の当然に従っただけの

かたむきさえもが、あるいは

ただひとつの直線をみせることもなく

広大な風景

すべてがやわらなんく曲がる

巨大な、どこまでも広がる風景

息遣い乍ら

もしも菌と、細菌と、ウイルスと極小のウイルスにおなじような
いっぱいなんだよ

ヒトの目とおなじような

笑いながらそう云った。ゴックはむしろ

眼球さえあれば？

自分自身の企てだったかのように

広大な風景

わたしのからだに身をあずけてほくそ笑み

果てるともなき

どこにも、もう

無際限な迄の

いっぱいいるんだよ、...ここにも？

ただひたすらに

笑いながらゴックはひとりで我に返った

広大な。そこに

ここにもいるよ

それは臙而滅びていく、そんな

ことさらに甘えてじゃれつきながら

広大な

かくに聞きゝ壬生木製の椅子に横たわりて背に尻に太ももに又肩にも木の固さ更には冷
やみたる温度感じき上になりたるゴックに撫でらるにまかすゴック時に笑ひ唇に壬生の
肌又は骨格又は筋肉等を觀じき又指さきに壬生の肌又は骨格又は筋肉等を觀じきかくて
頷して

あなたに話そう。

元気？——さいきん、さ

まさにあなたの爲に話そう。

と。突然、そして。——おれ、さ

——出て来たよ。

そうなの？ と。臙而。——いがいに、さ

そう云った。ゴックは。

なんで？——ほんばっか、よんでる

かすかに、あきらかに笑んで。

その私の返信に片岡信夫はなかなか答えを返さなかった。——なんか
その上半身をわたしの上に起こした儘に。

——誰？——なんかね

なにが？

ゴックが云った。——ひまつぶし？

わたしには喉の奥にだけそう云った。

——ともだち？——というわけでもなく

隠す氣もなく。

最近、本ばかり読んでる。——さいきん、さだれに聞かれる心遣いも無い空間に。

片岡はそう、Line に送って寄越した。——おれ、さ聲をひそめて。

なんで？——ほんばっか、よんでる
ゴックだけがそれを聞いたような気がした。

——誰？——ひまつぶし？
斜めに肌に翳りを這わせた。

ゴックがそう云って、笑った。——みたいな光が。

わたしも。彼女を見上げながら。——ひまつぶし？
光は部屋の中に、いつでも斜めに差すから。

——日本人？——というわけでもなくて
光の、そのみづからの鮮明の中に塵をこまかく点在させて。

仏教の本。——なんか、さ
そのきらめきの極端な微細を。

片岡のその返信に、わたしはゴックを見詰めながら笑った。——なんか、ね
——まだ、出て来るよ。

聲もたてないで。——さいきん、さ
ゴックがそう云った。

——日本人のともだち？——いそがしいんだけど
眼差しを茫然とさせて。

なんで？——いや
顯らかに私だけを見て。

Covid19 の影響？——ひまなんだけどね
かならずしも、わたしの何を見るときもなくに。

人、いっぱい死んだから？——やることないわけじゃない
——いっぱい、出て来るね。

——日本人だね。——かならずしも、
ゴックはそう云って、笑った。

——日本人のともだちだね。——...さ
だれの爲に？

片岡は返信を寄越さなかった。——かならずしも、
自分の爲だけに？

そもそも勝手に彼の方がメッセージをよこしたのに。——さいきん、さ
自分と自分の見ていた私の爲だけに？

いきなり。——なにをかんじるってわけでもなく
わたしの爲に。

——ともだち、いないからね。——なにをかんじたたってわけでもなく

わたしと、私が残したものの爲に？

——壬生先生、私以外に、ベトナム人。——まして

わたしの残したものと、自分と、わたしの残したものを体内に残された自分の爲に？

——ともだち、いないからね。——というわけでもないんだけどね

その時間の爲に？

ゴックが笑う。——さいきん、さ

わたしといたその。

——日本人のともだちだね。——げんき？

空間の爲に？

邪気も無く。——ひまだから

わたしといたその、空間と時間の爲に？

寧ろ素直に。——さいきん、さ

記憶の爲に？

それ以外に、讀む本ないから。——というわけでもなく

常に記憶されていき、かつ膨大な忘却を、——記憶されたとさえいない、あるいは忘却とさえ言えない...

——と。——まして

何の爲に？

忘れた頃に返されたメッセージを讀んだ。——なにをかんじたいわけでもなく

わたしの腕がのばされて、その目の前の空間に停滞するのをゴックは抗わない。

身を折り曲げたゴックのくれた口づけのあとで。——まして

指先が、やがて唇に触れる時にも。

なめた。——さいきん、さ

肉体。

ゴックは、唇を自分で離した時に。——げんき？

潤いのある肉体。

わたしの許可も無くに。——なにをもとめてるわけでもなく

殆どが水分だから。

讀む気も無いけど。——まして

肉体。わたしをだけ知った肉体。

そして離された唇に抗うように。——おれ、さ

すでに知って居た筈だった。

つまないんだけどね。——ほんばっかよんでる

顯らかに、いわゆる普通に結ばれることはないことをは。

ひとりでわたしの唇をなめた。——さいきん、さ

いかなる帰結を予測し、又は願っていたのか、わたしは知らない。

まったく、おもしろくない。——げんき？

たぶん、ゴック自身知らないから。

舌が匂う。——おれ、さ
唇をかすかにめくって、齒にふれた。

悪臭でもなければ芳香でもない。——なにがしたいってわけでもなく
指に唇の内の濡れた触感とそのあまりにも自然なやわかさと、そして自然すぎる
齒の固さがあった。

悪臭以下、芳香以前の。——まして
ぬめりけのあるもの。

かつ、鼻にひそかに、嘘をついて咬みつくような、陰湿な。——なにを
唾液の？

なんで？——さいきん、さ
おそらく、あらゆる細菌を。

ほかに読む本ないから。——なにをかんじようとしたわけでもなくて
菌を。

私を見て...と。——さいきん、さ
時にはこまやかなウイルスを、しずかに勝手に生息させる。

ゴックは云わなかった。——おれ、さ
口づける時、すさまじい交歓がある。

私だけを見て...と。——げんき？
交換される細菌のむれの。

ゴックにはそう云うきさえないのだった。——しってる？
菌の群れの。

単なる存在論？...じゃない？——おれ、さ
ウイルスの群れの。

だれかの爲に。——きのうも、おれ、さ
ゴックはそれでもかの女が私を愛していると思う。

とか。——さいきん、さ
わたしをだけを。

だれかを賛える爲に。——しってた？
だれを？

とか。——ね
解析不能なさまざまな集合体を？

そういうんじゃない。——わかる？
知っていた。

ただの存在論じゃない？——おれ、さ
わたしはすでに。

こうだから、こうだっていう。——わかる？
わたしのそれを、ゴックが指先に撫でつづけるのを。

違う？——おれ、さ
云う。

だから、まだしも読んでられる。——さいきん、さ

ささやくように、ゴックの唇が。

返す。——おれ、ね

斜めに肌に翳りが這った。

どうしたの？——しってた？

光が。

言い訳してる？——しってる？

光は部屋の中に、いつでも斜めに差すから。

お前、言い訳してるの？——おれのさいきんのどうこう

ゴックの息遣うたびに、色彩としてどうしても認識され切り得無い微妙の。

なんで？——さきんのおれの

その翳りと照りの極端な微細をさらす。

すぐさまに、片岡は返した。——ほんばっかよんでる
——すごいね。

なんで、そう思うの？——ひまではない

ゴックが云った。

言い訳してるみたいだから。——...んだけど

彼女の唇に。

わたしはそう返した。——ひまではない
——まだ、できるね。

まさか。——かならずしも

笑う。

元気？——さいきん、さ

ちいさく歓喜して、彼女はひとりで勝利する。

ベトナムはどう？——しってる？

何に？

——元気？——しってた？

顯らかに彼女は勝利していた。

ゴックは云った。——おれ、さ
——なんで？

コロナ、大丈夫？——さいきん、ね

ピッチの高い聲。

——日本のともだち、...——見えた
——まだ、できるよ。

さわる。——さまざまな風景

ピッチの上ずった聲。

——元気？——見えた

ベトナム語の時はもっと高い。

赦すような眼差しで見る。——そんな気がした

ゴックは指先の、堅さを維持させる爲にまさぐり続けていることには気づかない。

ゴックは、私を。——みたこともなかった、そんな？

——わたしがいいんだね。

そして私の唇に触っていた。——そうではなくて
ゴックは云った。

——元気？——みつづけていたもの
——まだ、できるんだね。

まるで、いかなる返答を唇が吐くことも禁じたように。——すでに
ゴックが云う。

さわる。——見えた
自分の爲に？

ゴックの指先で。——さいきん、さ
自分とわたしの爲に？

——元気みたい。——見たこともなかった風景
わたしの爲だけに？

わたしは云った。——予想だにしていなかった風景
自分の勝利の爲に？

知っていた。——まさか
自虐的な歓喜の中に？

そのときに、ふれた。——さいきん、さ
自虐性に気付きもしない歓喜のうちに？

ゴックの指先がわたしの齒に。——そんな？
ないし、もともと自虐の欠片も無い素直なだけのひとりの歓喜の爲に？

笑んだ。——まさか
何の爲に？

聲もなく。——ましてや

見て。...と。ゴックがささやいたのを壬生は聞いた。見た。上半身だけ身を起こして、
そして殊更に、あおむけた壬生にからめるように足を広げて、曝し、ささやいた。——
こんなふうになるんだよ、と。ゴックがささやいたのを壬生は聞いた。見た。綺麗な猫背
に丸まって、覗き込むようにまさに自らを覗き込み、あえて指をは触れない儘に、——
信じられない、と。ゴックが、...なかで。

なかで、...と、ゴックは、誰かが、誰か、予想もしない他人が、なぜか、と、ひどいし
くじりをしでかしたかのように

...と。ゴックは、なかで、と、
気付かないうちに、気付きもしなかったのに、と
漏れだし、と、流れ出し、と
あふれ出たもの。

と。

そしてゴックがさゝやいた聲に壬生は
——なにが？

聞いた。

——なにが、信じられないの？

見た。そしていきなり壬生を見詰めたゴックの眼差しが笑んで、そして、信じられないよ。

——なにが？

だってね。信じられないよ。こんなふうになるんだね。...信じられないね、ゴックがさ
さやいたのを壬生は聞き、その垂れ流すものの匂いを嗅ぐ。かくて弍聲の偈を以て頌し
て

わざとなのだと思った

ふれる

最初のうちは。ゴックが

くちびるに

耳元にたてる聲は

はだを

あまりにも

まるでそれが

うでの中で

じぶんのものだったかのように

殊更に

そんな擬態

獣じみた濁音を立てた

ふれる

顯らかに

しりつくしていた

穢い音色

それがたにんのものだとは

あまりにも

だからこそ

生理的に受け付けない、そんな

それにふれるのだということにも

あまりにも

ふれる

みすばらしく、みじめな

はじめてふれたように

自虐的な？ 残酷な

なんどめかのせつしよくを

あまりにも

擬態した

だれかを苛め抜いているような

ふれる

殊更に

ゆびさきで

嗜虐的な？
あなたの
あまりにも
あなたの、じぶんの
なぜ、そんな音を
くちびるで
わたしを見詰めながらたてるのかいぶかる
したで？
かすかに唇を開きながら
はだで
殊更に
ふれた
瞳孔をやわらかにひらいて
いま
そしてゴックは
あきらかにとくべつなひの
殊更に
とくべつなときのなかにいるのだと
獣の濁音を喉に立てる
擬態する
あまりにも
そのゆびは
微弱な、ききとれないほどの音響
くちびるは
うなる？
ゆびさきは？
殊更に
ふれた
鼻の先にも
いまだに飽きもしないのだと
かくに聞きゝ壬生臙而午後三時に近づくマでゴックととめどもなく戯レきかくてゴック
汗ながした留にそ乃音とめどもなく聴クそノ飛沫とめどもなく散る音居間に速ク聞こゑ
又とめどもなく同ジク邇耳ノ内に近ク麻佐爾智迦久爾至近にも生ゝシくとめどもく
はんしょくする
いきとしいけるものらの
聞こゆ壬生立ち上がりてとめどもなく衣服整えゴックに断リナク家をとめどもなく出キ
スでに雨あがりきかくてゴックが家ともどもなく鐵門が錠はずスその儘鍵とめどもなく
返さず壬生バイクに乗ルかくてとめどもなく走らせんとスるに見テ觀ルに庭にとめども
なく
わたしにはもはやかわりさえない

いきとしいけるものらの

樹木ありき高き木那里岐樹木ノ名は知ラざりき葉とめどもなく夥しく繁み茂みあひて繁
ミ枝のとめどもなく枝ノ葉の緑りノ下に葉ノ下より蔦とめどもなく下に伸び落ち伸じ
垂れてかくてそノとめどもなく蔦に無數なる花ノちひさきとめどもなく咲き花のちひさ
き咲きとめどもなく咲かせき下がりたる蔦ノ下にとめどもなき

それら

いぶくいぶきの

それぞれ緑なる玉ひとつアるは是れ種子ならんや花ノあどけなき黄色ノ色可憐にも咲き
て蔦ふれよう變形シたる奇形ノように見ゑ又あなたに異種ノ寄生シ繁茂スるかにもふれ
よう、あなたに

あなたにふれよう見へきたダそれら歪に見え悉くふれよう歪にこそ觀じて壬生おもはず
にあなたに指に布禮那无と腕ノばシき樹木ふれよう数メートルも先ノ庭の端なればふれ
よう、あなたに

その

もはやかわりさえない

届かざること自明なりテ壬生我に返りテ目を伏せきかくて頷して

あなたに話そう。

まさにあなたの爲に話そう。

まるで在り得ない夢のように。

或は幻のように。

あるいは不意の陽炎のように。

わたしは見た。その枝と枝ノを繁殖させた樹木に。

その生き物。あるいは葉と葉ノを繁殖させた樹木の枝に。

這う、その生き物を。その蔦を繁殖させる樹木に。

見ていた。私は、その蔦に花の可憐を繁殖させる樹木に。

その枝の下の翳りにさかさまにしがみついて這う蜥蜴を。

みずみずしほどに、——事実、眼差しには瑞々しく、その緑の肌はひかった。

枝と枝ノの落とした翳り、又は葉と葉ノの落とした翳りに。

自分の体が落とした翳りには触れもしないで。

地のはるか下に、さまざまなもの翳りのなかに溶かし隠し忘れさえして。

蜥蜴は這いはしなかった。

その、そう思った瞬間に、数歩だけ這った。

在り得ない夢のように。

或は幻のように。

あるいは不意の陽炎のように。

自分の這った痕跡さえ残すことなく、あざやかに。

蜥蜴はそして立ち止まった。

そのまま枝にさかさまにぶら下がっていた。

と。

そう思ったその瞬間にだけ、数歩だけそれは這った。

蜥蜴は。

わたしにあきらかに見つめられた儘に。

在り得ない夢のように。

或は幻のように。

あるいは不意の陽炎のように。

自分の這い得た可能さえ兆すことなく、赤裸々にも。

蜥蜴は私を見ているに違いなかった。

聲はなかった。

気配も。

たとえば私の爲に、——わたしを振り向かそうとする爲に、うちならされた掌の音も。

なにも無くにわたしはゴックの家の二階を見上げた。

ゴックが濡れた髪をさらしてそこに居た。

わたしは彼女が其処に居る事をすでにしってたように想った。

すでに、——いつに？ 笑んでいた。

ゴックは。

開け放たれた窓の向こうで、そこでしか私に垣間見れないかのように。

私はすでに笑んでいたのだった。

ゴックに鍵を見せた。

そして、それをポケットに入れるのを見せた。

ゴックは殊更に喚声をあげて、そして笑った。

わたしはすでに知っていたにちがいがなかった。

彼女が今聲を立てて笑うのを。

すでに見ていた気がした。

わたしを見ている蜥蜴と同じように。

ゴックがそこに立っていたことも。私をすでに見つめていたことも。

わたしが見ていた蜥蜴と同じように。

壬生はバイクのエンジンを入れた。その音を腰の下に聞いた。体に疲労感はなかった。倦怠感だけがあつた。ゴックにもう二度と逢わないと、壬生は思った。あなたはまだ、——と。壬生は思った。わたしにさえ捨てられたと、あなたはまだ知らない。壬生はそう心にだけ思った。かくて偈を以て頌して曰く

豹變する

云わなかった

いつでも世界は——たとえば世界、と

ゴックには、わたしは

まなざしがそう名付けた謂わば假りの仮定は

その時に

いつでもあざやかな豹變を

思い出していたのだとは

そこにさらして、眩み

彼女の胎内がわたしを
白ませる。おもわずに
感じて、そして
目を奪われたその眼差しをさえ
それぞれに
あざやかな白濁
微笑み合って、むしろ
あきらかな混濁
それぞれに
あなたは知っているか
お互いを赦し合った
口から無数の管に貫かれた（——目の前で）
そのあとで
心臓をさらした（——目の前で）あなたは
彼女のからだを抱きなおしながら
その（——目の前で）翳り
ソファの上に
あきらかにわたしの（——目の前で、まさに）翳る翳りは
身を投げて、その時に
心臓を（——わたしの目の前で）伸びた管に咀嚼させながら
わたしが初めて抱いた男のことを
心臓は食った。喉の肉を
わたしを始めて
魂ら（——目の前で、まさに）
その
見たこともない魂さえもが（——目の前で）翳りのうちに
彼、その
地面に顔を（——目の前で）さらしていたのだった
少年。十二歳の
大津寄稚彦を抱いたときにも
彼女には云わなかった。わたしは
豹變する
いまだに彼を愛しているとか
いつでも世界は（——いつでも）
戀しているとか
まなざしがそう名付けたものも
そうではなくて
いつでもあざやかな（——いつでも遠く）豹變を
わたしはすでに忘れていたのだった
そこにさらして（——いつでも過剰に）白ませられた

いつでも
おもわずに（——過剰に遠く）
すでに
目を奪われたその（——過剰に大きく）眼差しさえが
あの少年のことなどは
あざやかな（——過剰に盈たされた）豹變
忘れたものをこそ思いだすなら
あきらかな豹變
忘れたものを、その限りに於いてまさに思い出だすというのなら
あなたは（——わたしを咬む）知っているか
その故にのみ
自分の心臓に喉を咬みつかれた
すでに（——わたしは咬まれ）覺えてさえいなかった
まさにわたしは
すべて（——咬んだ）悉くはすでに忘れられていたのだった。

目に現れたもののすべては
かくに聞きゝユエン家に歸りテ家に入るに壬生が顔見て靨をはれば殊更に聲を上げかく
て言さく今日の新規患者が數40人超なりきと曰く是れほとんどが医療関係者なりとなん
ユエンが驚嘆又歎き又怯え又おのノき殊更にわざとにも觀ジらるが迄に壬生笑ミテユエ
ンが爲にのミ笑ミ怯えスがりすがり附きたはむれじゃれ騒ぐユエンを壬生笑ひて愉シめ
き居間ノ壁に蜥蜴つがいならん雙つ定まりたる距離かならず保ちて俊敏の數歩ずつ這ひ
這ひて留まり留まりて匍ひきそノ蜥蜴肌色ハ黄土色に近き白に見へきかくテ頌シテ

あなたに話そう。

かすめとるように。

知ってる。

まさにあなたの爲に話そう。

かすめとるように這う。

コイはその六時七分過ぎに

——何人死ぬのだろう？

蜥蜴は。

明かりをつけわすれた自分の部屋でコイは
ユエンは云った。

かすめとるように。

壁の向こうの聲を聞いた。

——あしたは何人見つかるだろう？

まさに数歩にすぎない空間を。

尿結石のコイは。

ユエンは怯えた。

あくまでかすめとるように。

ペニスを包んだチューブに尿を垂れ流し

——日本はもっと、もっとよ。
誰にも秘密にするきもなくて。
薬のおかげで
ユエンはささやく。
公然と目の前にかすめとったかのように。
尿毒症からは免れて
——もっと、もっとひどい。
蜥蜴は這った。
誰にも嫌われたコイは。
ユエンは慄いた。
いつでも。
身を起こして居間に出ようとした。
——もっと、もっとひどくなる。
鳴く。その聲。
チューブをはずせるようになるのを待つて。
ユエンの瞼の瞬くのを見た。
謂わば鈴の音そのものを潰してこすって鳴らしたのかのような。
薬の効力の切れるのを待つて。
——あとどれくらいかかるだろう？
どこから？
糖尿病と尿結石と。
ユエンの喉が唾をのんだ。
その音はどこから立ったのか？
右耳はほとんど聞こえない。
——来年まで？
鳴く。その聲。
左耳だっけ？
ユエンはそして顯らかに笑った。
どこから？
どっちだっけ？
——もっと先まで？
その体軀のどこから？
臆病なコイ。
ユエンの眼差しが輝くのを見た。
わたしは蜥蜴に気付かれないうちに、撫でた。
外にはほとんど出ずにすごす。
——あとどれくらいかかるだろう？
ユエンの頬を。
世界中の人間が死に絶えても
ユエンは唇をふるわせた。

笑んだ。彼女の爲にだけ。

かれだけは生き残ろうとするにちがいない。

——いつわたしはうつるだろう？

気付かれないように？

自分がすでに死んでいたとしても。

ユエンは口をいきなり開いた。

蜥蜴に？...蜥蜴たちに？

彼が生き残ろうとするのは明白だった。

——いつ、だれが死ぬだろう？

適正な隔たりの中に這う。

なぜ？——と。

ユエンの目は見つめた。

空間をかうすめとるように。

時にはわたしは不思議だった。

——知ってる？

まるで敵同士のように？

なぜ、そこまでして。

ささやく。ユエンが。

見分けのつかない同じ形の。

なぜ、あなただけでも生きていたいのだろうか？

——世界中、安全な場所はどこにもない。

同じ色の。

70年代に戦争に参加した。

ユエンはそう云って思わず笑った。

まさに敵同士のように。

生きるために生きた。

聲を立てて。

あるいは見ていた。

逃げる爲に走った。

——あなたが死んだら、どうすればいいの？

蜥蜴の眼は。

英雄的な戦場のなかの安全地帯をまさに英雄として目にさぐる。

ユエンはふいにそうささやいて、素直に笑った。

明らかに敵対的な空間の中に。

彼は死ぬまで死なないだろう。

唇の先に、あざやかに声を立てて。

さまざまな敵対の兆しを。

すでに死んで、しかも死なないように抗うだろう。

ユエンは笑い、わたしも笑っていた。

そしてそれ等の

命のすべてを懸けて
かくて偈を以て頌して曰く
振り向く
聲をたてないで
知っていた
なぜ？
たとえばその音響の中で
すでに路は乾いていた
知らない。
朝の
朝に濡れた
理由さえ想い附かない自然さで
朝の雨の
水浸しになった朝の道路は
まるで、すで背後に
雨の音響の中の朝の
路面はすでに
なにがあるのか知っていたようなそんな自然さでわたしは
わたしはユエンの胸に耳を当てた
知っていた
ソファの上にユエンは横たわった
たわむれとして
路面はすでに乾いていた
彼女は横たわっていた
わたしは身をまげて、彼女に
ゴックの家を出た時には
ずっと
ユエンだけに
すでに
わたしはすでに知っていた
しがみつくように
知っていた
あおむけで目をひらいたまま
しがみついたことなどなかったかのように？
すでに乾いていた
何を？
ユエン以外には
なにもかも
天井を？
聞いた

出しっぱなしのプラスチックの赤い椅子も
まるで息をしていないかのように

音響

たるんだ電線にも
わたしは彼女の鼻を撫でた
その体内の中の音響を
その無理やりの束なりにも
たしかな呼吸があった
時に聲たてて笑う私を

樹木

死んだね、と

ユエンは撫でる

その葉

わたしはひとりでそう思った（笑んだ）

その頭を

あしたもふたたび

あなたは、いま、死んだね、と（かすかに笑んだ）

そしてユエンは

濡れるにちがいない、それら

かくに聞きゝ 8月1日壬生は朝起きてユエンが寝顔そノままに置いて寝臺が蚊帳を出き
是レ土曜日なりてユエン休日なればなりきユエンが會社二週間に一度土曜日休業す是れ
常なり此の時 Covid19 のゆゑに土曜日すべて休業となりき是れ非常の措置なりきユエン
言さく会社にひとりの感染疑はシキ者ありて今隔離されてありと所以かく也そノひとの
住せる同じ通りにあやうい陽性患者出き是レ老人なり親族ことごとくあやうく隔離さる又
家前ノ通り閉鎖する是れあやうい隣り二件の距離の発生にテ症状なくもそノひと又その
親族ことごとく隔離サル如是也是れあやうく

いきをさえとめてしまいそうなほどに

あなたは

ユエン二日前に歸宅セル時言シキユエン白シて怯えて又殊更に笑ひて後壬生にあやうく
言さく我穢レりとかくてあやうくもユエン我に返りてあわててバスルームに身ヲあやう
く流したりきスマートホンにあやうくもゴックがメッセージ入りてアリタルをあやうい
見き内容をは見ざりきゴック・アインがあやういメッセージもあやうく入りき是も又あ
やうい開かず空晴れてあり祈禮バあやうくも庭にあやうい出づ樹木あやうい朝の日にあ
やうい

あなたの

そのまなざしは

さらされその色彩をこそさらしき庭の中ほどマで出たるにタオ背後より駆ケ寄りてどこ
でも駆けテ急なりテどこでもかくて壬生を通り過ぎて戸惑へるかの舉動に止まりかけて
どこでも又駆けかけ又きかくてどこにでも戸惑ヘルかのどこにも挙動に止まりかけて又
どこにでも

わたしのうでのなかにさえも

駈けかけて立ち止麻里岐壬生恠シみて且ツ美豆迦良ノ笑み笑ミてありて笑みそれまさに
嘲笑に他ならざるを觀ジ觀じをハラぬにタオ振り向きタれば壬生を見て觀をはることな
く觀テ觀つづけたる双渺ノ色慥かならざりてむしろ怪シきかくに壬生あやうくひとり觀
じきタオあやうく日差しの直射に立ち止まりたる儘にあやうくこの女はタシテあやうく
艶なりき壬生目を何ともなく伏せんとするにあやうくタオあやうく壬生にあやうく

いきさえ

いきさえできないほどに

媚びルが如くに寄りテより添ひ寄り添ヒて至近に壬生ヲ見て笑ミ艶なるを壬生見て觀テ
ひとり視きタオが唇ひらきかけて何をか言いかけて云さず庭に物音あり是レ鼠ノ驅ケル
やらん又タオが唇ふたたびヒラキかけて何をかふたたびに言ひかけテかくて云さずシテ
迦久風かスカにありて葉と葉ゝときに鳴りき是れいまさらに壬生耳に感じき又どこに
でもタオ言いかけて云さずどこにでも壬生鼻に女ノいつでも肌ノどこにでも芳香あるを
いつでも感じていつでも又タオがどこにでも唇みたびいつでもヒラきかけてどこにでも

いつでも

かぜのなかにはとははこすれて

なりひびいただろう

何をかミたびに言ひかけて終に笑ひき壬生が腕つねるが如ク邇つかみて引きズらんとす
ルかに壬生を家屋が翳りに引き連れ行きゝ壬生抗はず而れども于時捕まレる腕に痛み生
ジたれば振り払わんとするにタオおもはずに立ち止まりておもはずに殊更に壬生のみを
見ておもはずに笑ひかくて笑ひき壬生あやうく苛立ちて頬ヲあやうく叩きゝタオ息をあ
やうくつめき腕あやうく離さずかくてあやうくタオ我に返りたるトもナくに壬生をあや
うく

めまいのなかに

きをうしなってしまういそうなほど

見き又聲に笑はんとすを壬生ふたたび叩きゝ喉に媚びたるに似た聲立つを聞きゝタオ布
多多び壬生を見んとし而も腕離さざれば終に壬生拳にタオを数度殴打せりタオ地に前の
めりに倒れタオ地に倒れタオ倒れタオの地に倒レ多琉を見て觀ルに壬生そノ四肢開いて
無様なルをまさに觀とり多ルにタオ頭地になスリて髪亂るがママに亂シ亂るがママに地
になすテ亂シきかくて亂れたル髪の投げうたれたる亂レがさきに家屋の壁ありて壁際隅
なるに鼠籠ありき是レ誰が仕掛け多るか壬生ハ知らずもノ音又息シてアルものゝ心配あ
りき壬生見きかくて厥レ鼠なりき壬生鼠ノ捕まりたるを見きタオまさに是レを壬生に傳
へんとしたるにや壬生タオを返り見もせず籠もちて去りきタオ四肢広げたる儘に日を浴
びてをれば壬生返り見すれば此の時にタオの死にたるを擬態するを見たりしをかくて頌
して

あなたに話そう。

香り立つのだった。

まさにあなたの爲に話そう。

いつでも。

タオは匂う。

いつでも、朝の樹木は。

体をことさらに匂わせて、馨らせて、薫る体を好き放題に匂わせる儘に——似たような匂いだったのだろうか？

その葉は。

例えば雪菜は嗅いだのだった。

その葉と葉ゝは。

私の肌に、隠れて悪戯をしかけるように偽装して。

朝には殊更に馨り立っているように感じられた。

時には上目に私を見ながら。

すでに空は夜の色を

こんな匂いだったのだろうか？

その鮮明な暗い統一を

...いい匂いするね。

失ってもはや色彩にむせた。

例えばゴックは嗅いだのだった。

いまだ

もはや何を隠すともなく、羞じるともなく、ただ自分の爲だけにひそかに羞恥して。

むせかりもせず。

...いい匂いするね。

むせるようなさまざまな匂いの

例えばゴック・アインは嗅いだのだった。

むせかえるような存在を

私の肌を彼の唇に感じながら。

その顯らかな明らかなを

私の匂いを嗅いでそれを、自分の爲に誇るかのよう。

むせかるようにも匂わせて。

...いい匂いするね。

棲んでいた。

例えば大津寄は嗅いだのだった。

空はむしろ、ひたすに澄んで

十二歳の時にも。

青くらく

四面海辺の町で。

あかるい青のうちに

四面に海の馨りの、あの陰湿な臭気のただよう町で。

空はしづかに月をうかべた

時に山の樹木の。土の。そのさまざまの馨の。

その沈む手前の

匂いのかさなる町で。

西に。

私の肌に怯えもせずに、むしろ強引に奪うかのように。

白。

...いい匂いするね。

霞む、幻のような白。

例えばユエンは嗅いだのだった。

泡沫の幻？

毎日寝台のなかで。

まさか。

汗さえもまげた肌の馨りのなかに、そして私の肉体を羽交い絞めにし乍ら。

あまりに鮮明な白。

...いい匂いするね。

まがうこともなき

例えばハンは嗅いだのだった。

その

私にはじめて抱かれた時にも。

月はまさにそこに

抱かれる前にも。

わたしの目覚める前からすでに

素通りするときにも。

見開かれていた目のように見えた。

掠め取るように？

ただひとつの、

...いい匂いするね。

白い目

ゴック・アインはいつも更に匂った。

もうひとつは？

ゴックは昨日。

まさか東の光の玉が？

さらに落ちた雫の匂いも。

白。

だれでも同じような匂いがする。

慥かにそれも、違う白には違いなかった。

おそらくは誰でも大差のない匂い。

あざやかな逆光に

波紋をたてる無数の雫の。

目はそれを眩む白と

たらちねの。

それをそう色に観ずるしかなかった

と。

遠い目。

あの枕詞は垂ら乳ね、と。そういう意味に違いない、とその時に私は思った。

白く、向こうに見つめる目。

いまさらに。

まぼろしのような。

乳の白い雫を垂らす、——と。

現実には、顯らかにあらわれた在り得ない

籠の中に怯えた鼠の暴れるをぶら提げたままに。

まぼろしのよう。

指先にその騒ぎ立った混乱と叫びを感じながら。

冴えた白いその色

彼等は死を知るのだった。

月を

わたしと同じように。

ありあけの月を？

だれとも同じように。

私は目をそらした。

殊更に死に、まさに死にこそおびえて籠に撥ねる鼠は。

翳りがすでにさまざまに地に堕ちた。

死、自分のそれ自体には終にふれたことさえも無い儘に。

樹木の、

知っていたのだった。

樹木の葉の

その鼠の目が、例えば荒野じみた庭の草の繁みの森の深みじみた茂りに見た友なる鼠の死に。

葉と枝ゝの

例えば咬む猫の牙の上下に串刺しされた死にも。

枝と葉ゝの

路上の鼠の跳ねられた惨殺死体にも。

家屋の

死を。

そしてユエンの翳りが樹木の幹の

他人の死を。

真ん中に臀部を突き出して

わたしはユエンのスクーターに乗って家を出た。

肛門のはやした菌莖に咬んだ

部屋から出て来たタンが笑った。

その腸と、誰かの

何か云った。

未生の誰かの
——鼠か？
翳りの脳を
そう云ったに違いなかった。
剥き出しの
わたしには彼のベトナム語はわからない。
さまざまにはやした齒に
彼はベトナム語をしかしゃべらない。
齒と
スクーターの足の間に鼠が撥ねた。
齒ゝに噛みつかれ
籠の中に、殊更に。
咀嚼し
やがては静かになったのだった。
咀嚼されながら
死を悟って？
散った雫を浮かべた
蛇に脱がれた殻がすでに、鎮まるしかないように？
重力を無視した空間は
それを擬態して？
玉散る血の色を
川べりを走った。
極彩色の
殆どだれもいないと思った。
翳りの周囲に
何人かが川べりを走り、又何台かのバイクが駆けた。
その四維に
思ったよりも多かったその数が、なぜかわたしを笑ませた。
玉散る
何故？
互いに触れ合って
更地のひろがる開発予定地で——いまだ購入されただけで、すでに数年放置され
た土地の草の繁みに。
そして玉散る儘に
私は鼠を放った。
まさに玉散る
殺してしまえばよかっただろうか？
匂った。
例えば河に沈めて。
だから、わたしはいつものように嗅いだ。

殺してしまえば？

その

泥の河の、ふちの澄んだ水の中で？

あざやかに腐敗しきった肉と骨、骨と血、血と肉と管と神経の糸と又さまざま

の

汚物の泡を浮かべた透明な水の中で？

それらの臭気。

どうせすぐさま繁殖するのだった。

何千年にもわたる、それ以上の永遠の

私は家に帰って手を洗った。

時を無視した

鼠角は針金を組んだ四角い箱型だった。持ち上げた籠の中に鼠がキ音の音をさまざまに立てた。理由がある譯でも無く壬生はその籠の中を見ようとはしなかった。スクーターを庭に出してその足元に籠を置きかけたときに、壬生の鼻に鼠の臭気が匂う気がした。朝の気配は明らかにただ清冽だった。鼠籠の中は穢れた。朝はまさに瑞々しさをさらし霞んだ。鼠の周囲はその垂れた糞尿で噎せ返った。壬生は鼠が走っていたはずのその庭の草陰も清冽な草葉の色を見た。それはそれぞれに、さまざまの色を以て、いずれにせよ緑りだった。かくて偈を以て頌して曰く

糞尿が匂った

き音、そう聞こえた

懐しい

指の先で

その、き音、その、そのそれぞれの連続、こやかな、あざやかで、さまざまな

なぜ？

鼠が、鼠と鼠の恐怖が

急激なき音の

なぜ懐しむのだろう？

漏らした糞尿が匂った

かすかに濁音のきをひそませたき音

なぜ？

籠のそこで

たてつづけにひびく

その匂いを

鼠が、鼠と鼠の恐怖が、死への恐怖が

その喉から？

臭気を

鼠の漏らした糞と尿が匂った

叫ぶ？

ちいさな

鐵網の籠の鐵の錆びの上で

泣く？

ちいさく停滞する匂い

鼠が、鼠と鼠の恐怖が、自分の死へだけの鼠の恐怖が

歎く？

その臭気を

漏らした糞尿が匂った

乞う？

いっぱいちいさく籠った臭気を

籠の網に

非難する？

匂った

鼠がひとりひそかに漏らした

訴える？

なぜ？

糞尿が匂った。いま

かれらのことばをわたしは知らない

その懐しい匂い

草は匂い立つ

聞き逃したままの耳に

なぜそのちいさく籠った

かくに聞きゝかくて壬生鼠始末シ始末シをはりて歸りレ・ティ・カンが家に詣ヅ時に六時半を過ぎたる頃なれば家の表に人影なシ内に入らんとスに一階レ・ティ・カンが部屋よりレ・ヴァン・クアン壁に手ツき手ツきてようやくに出づ壬生が目にもすでに殊更にやツれて見えき壬生何も云さずクアン壬生を見てミをはるとも笑むともナしかくて笑むともなく厭ふともなし迦久亘厭ふともなく媚びるともなししかくて媚びるともなく嘖るともなし迦久邇迦久亘嘖るともなく何を思うともあらはさずにとダ双渺に見て壬生を覗き壬生彼を見續けきかくて壬生美都豆祁氏クアン其ノ儘に壁伝いに奥に入らんとス手洗いに立たるならん壬生気付きてき附きたれば手伝はんとスをレ・ヴァン・クアン無言に唇かすかにのみ動かシ左手にノミ是れを制シき制シて彼レ厭ひて制するか彼レ遠慮して制するか壬生に気付かさゞりき壬生かくて立ち止まりて迦久亘背後について進まんとすレ・ティ・カンが部屋のまへにいたり内を返りミるにクアンが寝台にレ・ハン座りきレ・ハンかくてスマートホン見て弄るに気配に壬生を知り知りてレ・ハン顧み見てレ・ハン飛登里笑ひき迦久亘そノ笑み素直に過ぎてそノ笑みむしろ痴呆ジみてさへ見ゑてかくてそノ笑み素直なりき壬生目をソらしきカンは未だねむり傍らなる寝台に背を向けをりきかくて壬生見ルにすでにクアン奥の手洗ゐに入りたるやらんレ・ヴァン・クアンが姿勢デになかりき又レ・ハン見て壬生ハンに水を求むレ・ハン立ち上がりてすれすれに壬生が傍らぬけ奥の翳りに引き込み亦駈けより來たるレ・ハンに壬生ペットボトルの水の料金支払はんとするにレ・ハン首振りテレ・ハン拒絶せり是レかノ女にすでに壬生夫なりてあるゆゑならん壬生すでにこれに気付きてゝかくて歸らんとスをハン壬生に随ひて表に出

でき壬生背後にレ・ハンが気配まさに息づいてシたるを感じき又その奥にも未ダ生ける
生きたものノ気配あるヲ感じきそれ振り返り見るともなくに壬生レ・ハンをのミ振り返り見
て観るまでもなくてかノ女を抱き腕に抱き唇を吸ひ唇を奪ひきレ・ハン驚き身かたまら
ス須臾に唇はなれてのち眼差しにレ・ハンようやく歓喜してひとりなりき壬生後振り返り見
ず立ち去りきかくて頷して

あなたに話そう。

凄惨なまでに

獣じみた匂い

まさにあなたの爲に話そう。

凄惨にただ愚弄するかのよう

かすかに

死に懸けた男にはあきらかに死に親しんだ匂いがした。

暴力的な

かすかに獣じみて、そして

匂い？

暴力的にただ翳るかのよう

結局はあざやかに獣じみた匂い

あるいは気配が。

その少女の肉体はさらした

レ・ハンの

気配？

それ自身を瑞々しさを素直に

ゴック・アインは嗅いだだろうか？

あるいはその体内より滲みだしたに似た、そんな匂いが。

仍て不遜なほどに

レ・ダン・リーに

匂い？

馨りたるほどに

その肌に

あるいは色。

葉の上にあつまりすぎた雫の

さらに幼い

例えば、心の目がみるような？

ふるえてこぼれるほどの

獣じみた匂いを

そんな、自分勝手に曖昧でいつでも常に正当性のない、且つは顕らかな。

レ・ヴァン・ハンの肢体が腕の中で息遣いた

もうすぐだよ

色？

赤裸々にも

時をしらせる
兆し。或は顯らかすぎる兆しが。
みづからの命の強靱をさらし
もうすぐだよ
彼がすでに死んだ未だに発生していなかった未来の、まさに未来に過ぎた時間の
どこかから、匂い出した兆し。
むせかえるような
時の盡きるのをしらせる
彼がすでに死んだ兆候。その色。
その生殖の息吹をさらし
その匂い
匂うようあからさまな色。あざやかな。
唇に触感があった
あからさまな薬物の
鮮やかすぎた匂いの気配。色のある気配の、その。
生きた唇の
体細胞に滲み出た匂い
死。
まさに生きた唇の
レ・ヴァン・クアンの
未だ死なないレ・ヴァン・クアンの痩せた体にそれは食み出していた。
私は見ていた
匂う
彼の死。
部屋から出てきたクアンの頭の上の
その匂い
細い、——へし折れそうなの？
天上にへばり着いた
獣の肉の汗の匂いのこちら側の
彼の、彼だけの死。
レ・ヴァン・ハンの鬚りを
餘にも乳臭い匂い
或は、針金のように容易にへし折れないその自在自由な？
その垂れさがった腸が向き出した齒の喰い千切ったハンの腹の肉を
あきらかな乳白色の
彼の、新型コロナ舞う季節の中の、一切それにかかわらなかった死。
その玉散る血の粒の雫の浮遊
いまだに乳の雫のひとつをも
やせた体が息遣った。
息遣く

むねのうちは知らないくせに？
針金のように。
まさに少女の唇は
雫に垂れた乳の匂い
やせた体が必死に歩いた。
わたしの唇に
無数の、無数をなして
まるで他人の体を動かすかのように。
頬は
もはや豪雨の
無理やりに。
私の鼻の先の皮膚に
乳の雫の
針金のように。
赤裸々すぎて
乳白色の
家屋の奥の朝のひかりに辛うじてふれた翳りの中に。
歎かわしいほどに
レ・ハンの匂い
死。
息遣く
ゴック・アインも匂っただろうか？
ひとりで。
匂う。まさに
その匂いを
未だ死なないレ・ヴァン・クアンの痩せた体にそれは食み出していた。
少女のいのちのいのちなすいのちの
レ・ダン・リーの肌の更に幼い

壬生はハン河に添って通りを走り、周囲にすでに更地しかなくなったのを見た。足元に鼠はしきりに鳴いた。網を咬んだ。蹴った。家から幾許も無く、故に町の中心から幾許も無く、都市は開発予定の広大な更地を広げ、草と生き物を生づかせる。壬生は河の汀にまで降り、泥の河の匂いを嗅いだ。流れ着いたゴミが、——スナック菓子の袋、又は正体の判らないプラスチックの断片、それらの周囲に泡が穢れて浮く。いくらなんでも、と。この風景の、この水の中で？

壬生はそう思った。無残に想い、そして壬生は鼠籠をつけた。水没する前、鼠はキ音を激しく立てた。迸るほどに。籠を浸した指先に、籠はただ暴力的に撥ねた。かくて偲を以て頷して曰く

なぜだろう
まさにその
いつでも素直に

忘れるはずもなかった
まさに、まさにその
素直に彼は
その臭気
どうしてだろう？
彼は笑った
あのあわれむべき
まさにその
笑った顔は
美貌の痴呆の美貌の肌が曝した臭気
まさに、まさにその
顔はまるで
撒き散らした匂い
なぜだろう？
まるでひとりでだけ
忘れるはずもなかった
どうしてだろう？
ひとりでだけ笑っていたかのように
その臭気
なぜ忘れて仕舞っていたのだろうか？
笑っていたかのように彼は
あのあわれむべき
思いだすまでもない
彼は笑って
鼠の糞と尿の匂い
鮮明に覚えていたその匂いを
笑って私を
糞と鼠と鼠の尿と、尿と糞に錆びた鉄網の錆びの匂い
まさにその
私を見ていた
糞尿と糞尿の錆びの鉄錆びの匂いと鼠の体臭
まさに、まさにその
見ていたその時に
その混淆した匂い
その匂いを
その時に彼の前に
忘れるはずもなかった
思いだすまでもない
彼の前にさらされた
その臭気

鮮明に覚えていたその匂いを
さらされた私の
あのあわれむべき
まさにその
私の肌はただ
あの大津寄稚彦の肌の匂い
思いだしていた
ただ彼に
美貌の少年の痴呆のその美貌の肌の少年の体が曝した臭気
あきらかに
彼に対してだけの
彼の乳白色の色は
わたしはおもいだして
対してだけの発情は
私のそれと同じに匂った
だから我を忘れた
発情は小さい儘に
稚彦はそれに気づいて笑った
どうしてだろう？
ちいさいままに籠って
ひとりで隠しもせずに
まさに、まさにその
籠って息遣い

かくに聞きゝかくて壬生ユエンが家に歸りき歸りて庭にスクーターを駐めたるにユエン戸口に走り出テ半ば開きたる横開きのシャッターに縋りきアルミ合金こすれて騒ぎ鳴りき倒れ掛かりたる儘ユエン身動きする度に合金震え鳴りふるえたる音立てさまざまに立ちて無造作に鳴りき壬生ユエンを見ユエンを覗ルにかノ女ただ素直にほゝ笑ミきかくてなにともなくまさに是レ壬生を恠シますユエン笑みて笑みこぼシき壬生敢えて何をも謂さず又何をも問はず又言すべき詞の相応しかるべきを知らず又問ふべき詞の相応しいかるべきを知らずかくて壬生うちに入りて日ノ翳りノ翳りたるをくグリきすでに壬生ユエンにほゝ笑ミき壬生ユエンを通り過ぎてソファに座り座りかゝりて想い留む是れ鼠籠に素手にふれたるを思ひ身に身ノ穢れを觀じたるがゆゑなりキかくて壬生踵ス返して浴室に入らんとするにユエンかくて未だシャッターにもたれたる儘に立ちて壬生を見るなりユエン白して表情敢えてか作さぬ儘に言さく何処に行くや...どこへいくの?...i âu ?

そのさゝやくこゑを

壬生浴室を指シたるに...穢いから。...なんで?...鼠。

...鼠?...鼠。

鼠。

ユエンようやくに笑みてかくて白して言さく汝我を忘れり...わすれてるわ。...You forgot me.

その

殊更に眼差しに糾弾シ咎め科メて非難ス壬生

その

傍らに寄りて兩手上げて謂さく...穢いから。待てよ...なんで?...鼠。

...鼠?...鼠。

鼠。

ユエン首を振りて壬生にしがみつき抱きつきてかくて唇を吸うを壬生一度抗ひかけて又
すぐさまに随ひき壬生の背後に諍いの

そのささやくこゑを

聲たつ音に恠しみたるコイ部屋を出て顔だけ出してかくてコイ壬生らを見きユエン唇食
れる儘に目開きたる儘に唇食りかくて迦琉ガゆゑにコイを見きコイすで見えすぐさま
に観てすでに知れたらばいまさらに目に驚嘆シ須臾ノちすでに目に羞恥シ須臾ノちす
でに目に憤りみじかき首太きをふるわせふるわせシ目剥き威嚇するかにメ剥きタリて迦久
てコイ慌てゝ所在ナキ眼差シに墮シき迦久てコイ殊更に振り返りて部屋にふたたび返り
入ルをユエン見て観をはりて唇に貪り貪ル唇に貪りてかくてユエン眼差しに何の表情の
兆さスともなかりき迦ゝル後兩手上げたる儘の壬生の T シャツの胸をつかみて笑み顎を
付き出シて見て又笑ミ

その

又笑ひき壬生又笑ひ又笑みて従ひて

そのささやくこゑを

寢室にもどりきかくて頌して

あなたに話そう。

思っていたに違ない

くいつぶす

まさにあなたの爲に話そう。

ユエンは

くいつぶし

兩手を挙げた儘の交配について。

まさに確信として

すすする

ユエンが蚊帳をはぐる。

そとに拡がったその世界

すすり

その淡い、散るようなこまかな白の色が揺らいだ。

壁の向こう

すすりあげる

ベッドに横たわったわたしが兩手をあげた儘だったのを、ユエンは笑った。

防御壁の向こうに

はきそうなくらい

——そのままにして。

際限のないほどに
すすりあげ
と。
無惨にも
すすりあげあげ
彼女の命令に随う。
拡がった世界
しゃぶりつく
——そのままにしておいて。
無数の細菌の
しゃぶりついて
あるいは、その穢さにおまさらに気付いたユエンは。
この世界の異世界の生き生きした他人の異界
すすりあげてなお
知ってる？
抜け目のない
しゃぶりつき
と。
無数の菌の
さらにかむ
ベストは鼠が映すのよ。
この世界の異世界の生き生きした他人の異界
かんでなめる
新型コロナの波立つパンデミックの時でも。
抜け目のない
やさしく
ベストは鼠が映すのよ。
無数のウイルスの
うそのようにやさしくかんで
水の面が空の色を、雲の形を移す様に。
この世界の異世界の生き生きした他人の異界
なめる
知ってる？
抜け目なく
なだめるように
ベストは鼠が映すのよ。
ユエンは見出しておののく
なめる
私は彼女の、いまやおびた眼差しの明らかな怯えの命じた命令に随う。
その自在の目に

いやすように
両手を挙げた儘に、彼女が私を裸に剥くのに随う。
自在で自由な目に
なめる
彼女の腕がショートパンツをずりさげる時にも。
ユエンの自由な目は自在に見取った
ほほえましくらい
朝の光が淡い逆光を投げた。
それらの息吹き
ほほえましすぎて
逆光とさえ言えない逆光。
そこから帰還したおとこの
そしてはずかしくなってしまうくらいに
ユエンの背の上のそれ。
はだにこびりつくそれ
なめる
壁の通風孔の並びが。
なめる
やさしく
戸は閉め切らないままだった。
しゃぶりつくようにも
うらざり
コイはいつか見るだろうか？
こびりつかれた肌
かすめとるように
いつか、コイ見ただろうか？
なめとるように？
すすりあげる
ユエンの眼差しはもはや笑んでさえいなかった。
むさぼるようにも
なめて
私は見た。
その肌に匂う
かみつ
表情をなくした眼差しの瞳孔はもはや開かない。
男の体臭に發情さえしながら？
かみつにかけて
諦めたように目に見ていた。
むしゃぶりつくようにも
すすりあげる

その見えるものを。

矛盾が目の前に捨て置かれた

なめた

自分で脱いで、股をひらいて私をまたぐ。

穢い男

そのかたちのままで

知ってる？

穢れた肌

しゃぶりあげる

ペストは鼠が移すのよ。

防御壁の向こうにさざめく

すすり

どんなウイルスのパンデミックの時でも。

さわぎたつウイルスの

ふたたび

ペストは鼠が移すのよ。

命の沸騰の自在自由に

すすりあげる

見つめ合った黒目がお互いのかたちを白く翳らせるように。

素手にさらされたその肌を

くいつく

知ってる？

むしゃぶりつく

まるでくいつき

ペストは鼠が移すのよ。

さわらないで

いわば

手の限りを尽くして目覚めさせた後に、ユエンは体内にかたちを知った。

その手、その

いわば破壊するかのようにも

壬生はユエンのなすがままに随いながら、不自然にもたげた儘の両腕の、その指先に穢れの静かに拡がって、空気に触れ、やわらかく拡散し落ちてゆく幻を、うたゝ寝するでもない褪めた目に見てみ、ユエンはさゝやき、自分の爲にささやき、蛇が、

と。

蛇が殻をぬぐように、

あなたは素肌をさらしてしまう、

と。

いつでも、

と、いつでも

...今も。

時に、その蛇を、——はいゝろの蛇、うるおった肌の、そして日のひかりの差す路上を、そのものゝみづからの落とした翳りをくぐってさえ這い匍う蛇を、壬生は、その穢てない肌を思った。そのうるむ素肌を。穢れにふれて穢れず、むしろみずからそのものが穢れでさえありた、それらの強靱、例えば蜥蜴の。又は乾いた甲殻虫の。又は蟻の。又は毛ば立つ蜂の。又は毛虫の。又はぬめる蝸牛の。又は光る蠅の。又はしたたるような蛆の。又は気配のない猫の。又は疾走する鼠の。かくて偈を以て頌して曰く

ふれてはいけない

見なければならぬ

聞いた

手を

あなたは

耳に

その手をはふれてはいけない

あなたは見なければならぬ

雨の音

穢いから

あなたの

音

穢れた手

こころのあどけなさを

聞いた

手の穢れに穢れた手は

いまなおも

耳は

手にふれた

見なければならぬ

耳を澄ませた譯でも無くて

つかみとるように

あなたは

雨のおと

あやすように

あなたは見なければならぬ

降りそうだった雨が

むさぼるように

じゅんなかんかく

今漸くに

いたぶるように

まるでむじゃきで

漸く今

空中に浮かぶ

じょうだんにもならない
ふれたのだった
穢れた手
むじゃきなかんかく
土に
手の穢れに穢れた手は
いまなおも
石に
たてられはいけない
なおも
トタンに
聲を
見なければならぬ
葉に
その聲を立ててはいけない
あなたは
枝に
開かれているから。ドアは目の前に
あなたは見なければならぬ
花
時に喉が
びっくるすどじゅう
蔓に
かすかにでも聲をたてそうになっても
びっくりするほど
鳥に
わめくように
おどろくほどたんじゅん
蜥蜴に
なじるように
びっくりするほど
ミミズに
くるしむように
見なければならぬ
蛇に
いたがるように
あなたは
肌に
ののしるように
あなたは見なければならぬ

人の
ひらかれた
なんにん死んだ？
たとえば二の腕の
唇が兆す
死んだ？...なんにん
肌に
無音の聲を。その音響を
なんにん死ぬの？
聞く

かくに聞きゝ壬生かくてまどろミ微睡むうちにも翳りに未生ノ胎児ノ翳るを見キそれ通風孔のつらなりの悉くに垂れことごとくにしたゝるその異形さらしてあざやかにしたゝるそれレ通風孔ノ投げ入れたる光をは妨げずむしろしたゝる逆光ハ目は眩めキ壬生したゝるその見知らヌ胎児ノ翳りに戦慄し又したゝる心倦怠シ且つしたりやすらげル儘なりてゆゑにみづからのしたゝる心をみづからにしたたり恠シミき此の時したゝるかたわらにしたゝるその

いのちのしづくの

ユエン横たわりてスマートフォン弄り時に聲を立てゝしたゝる笑ひキ知り合ひのだれかしらにしたゝるメッセージ送り又送られて語り合ひたるやらんかくにしたゝる壬生觀じて捨テ置き未生ノしたゝる胎児が翳りしたゝる見てしたゝる視遣る儘にしたゝるまどろみしたゝり微睡みてしたゝるその

いのちのしづくの

ひろがるままに

枕許に投げられたるスマートフォンにひろがるままに受信の音聞キたりキ見るにひろがるままに是レ片岡なりきゆゑに壬生ひろがるままに通話しき時にユエンいつか暇もテあまし弄びシてひろがる壬生が躰指にもテあそびいじりし又腕からめてもテあそびじゃれあソびしき壬生感じきそのひろがる触感又その体温又そのひろがるままに息遣ひの物音のひろがる微細又その躰のうごきの物音ノひろがり微細又その髪のがれひろがるおちたるノ物音のわずかノ微細等かくてひろがるままに

ひろがってゆく

ひろがるはもんの

ふと壬生思ひき翳りになみ翳る未生ノなみ胎児の翳りこれはもんの臍而なみ生まれたるみづからはもんのなみ子のそれならんとかくて頌して

あなたに話そう。

聲がたった

まさにあなたの爲に話そう。

耳元で、聲がたったのをわたしは

片岡に Line で電話をかけた。

ユエンの

何故？

笑ったのではなくて
メッセージが入っていたから。
笑う寸前の、...ただ赦し、
話がある、と。
不意撃ちのように赦した聲が
いま、時間、ある？
笑い聲にふれる手前の、...私は
話がある、と。
赦す。聞いた
私に話すべきことはなかった。
耳に
さがすまでもなく。
ユエンが聲を
さがそうという氣さえなく。
片岡の聲の先に
彼のメッセージを氣にした譯でもなかった。
違う方向で
思わせぶりな、そして、思わせぶりなそれに敢えて付き合っただけやる必然も感じな
かった。
ユエンが
何故？
違う場所で、...私は赦した。その
情性として？
聲を。そしてあなたの愚劣を
私は彼を呼び出した。
笑いかけの、その、誰の？
云った。
倦怠？ あるいは誰の愚劣を？
——どうしたの？
終わったばかりの？
——なにが？
擬態された
わたしは笑った。
かならずしも
——お前、俺と話したいんでしょ？
事実としては終わらなかった終わりの
——なんで判った？
その
片岡は聲を立てて笑い、私はすでに笑っていた。
からみつく、からみつ

声をあげずに、鼻に亂れた息遣いでだけ。

腕が、からみついて飽く迄も

——話すべき事なんてないんだ。

聲を立てた

——あるでしょ。

笑ったように

——何が？

倦怠？ むしろ赤裸々なまでに

——毎日…暇なの？ 毎日、…暇なの？ 此のところ毎日、…暇なの？ 電話くれるね。どうしたの？…暇なの？

腕を搦めて

——聞きたいの？

胸に、ユエンは

——何を？

笑った

——聞きたいなら教しえる。

笑いにふれる

——何を？

寸前

——罪の話。罪と罰の。罪と

何を以てして？

——何を話したい？

墮する

——罪ならざる罪の罰と、罰の

笑った

——自分勝手に、

笑いに墮する

——罰ならざる罰をもたらす罪の

墮す。まさに

——何を告白しなきゃって、

直前の？ まさに何を以てして

——その罪ならざる罪の、

知る。温度を

——くだらない欲求に追われてるの？

聞いた

——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき聲で。

聲

知ってるでしょ？ 俺に子供、いるの。

ただ片岡の

——いたっけ？

笑うにもちかいユエンの

——知ってたでしょ。息子と、息子と、娘。

墮す

——そうだっけ？

墮し、ふれる

——知ってるよ。十歳と、八歳と、それから五歳。

その寸前の

目を閉じたわけでなかった。私は。そして見た。その夢？

あまりにも場違いに想ったのだった

——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

わたしは

俺、實はさ。感染してたの。

ユエンのその

慥かに見開いたままの眼差しのうちに舞った。さまざまな色彩。

媚びた体温が

——感染？

腕の

——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

搦める

まさかペストじゃないよ。まさか。まさかチフスじゃないよ。まさか。まさ
か梅毒じゃないよ。まさか。

聞いた

まさか新型コロナ。

慥かに

紫の。白の。白に近い紫の。紫に近い白の。

耳に

——そうなの？...いつ？

搦めた

——知らない。

あまりにも場違いな

白に近い紫に近い白の。紫の近い白に近い白の。

ふれるほどのちかくに、さしだされた指の

——知らないってさ、入院しなかったの？ いまどこ？ 病院？ 隔離されてる？

聞いていた片岡の聲は

——野放し。

あまりにも、そして限度を超えてさえ

紫がかった白のかすかな白みに近い白にちかずく紫の白み。

媚びた温度、それが
——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

胸にかんじられたそれが
ちょっと前、検査受けたの。Covid19 の。陰性だった。普通に。...完全に普
通。問題ない。

ユエンの
白かすむに似た気配のある且つ飽く迄紫にすぎない白みのうちの紅の息吹き。
太ももを絡ませて
——検査？ あれ、なんか、日本だと受けるの難しいんじゃないかって？
差す
——強制的に。
斜めにひかりが
明るい白のうちに暗示された紫の秘めた白みのなかの唐突な黄味の兆し。
その光り
——なんで？
髪は黒い。なぜそれほどの光沢が？
——娘が入院したから。
わたしの髪も
かすむ紫があくまでも紫なるままにいつか白としか言いようのない光沢に墮す瞬
間の最後の紫。

ユエンのそれも
——娘？
あまりにも場違いに想ったのだった
——五歳の。
片岡が？
脈打つような紫の兆しが白一色のなかに兆しが気がした名残の中の紅の暗示。
ユエンは
——入院してるの？
その聲は
——死んだ。
片岡の？
色彩。光沢が？
ささやくように
——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

聲をひそめるともなく
娘、発熱したんだよ。ほんの微熱。ほんの...まさかね。あぶないとは思っ
たけど。
話し

それら無数の色彩がまさに極小のつぶになって連なり合った。

立てた

——まさね。まだ子供だから。で、咳もでなかった。いや、出てたけど。

聲を

時々ね。そもそも、あの子気管弱かったから。ハウス・ダストで。すぐせき込む。

ユエンは

かさなり、かさなる

耳のすぐそこに

——ある夜飯喰ってるとき、まったく喰わないわけ。全然。ただ、成長期って時々喰わなくなるじゃない？

あまりにも場違いに想ったのだった

俺もそうだったんじゃない？ 忘れたけど。むかし、俺もそうだったんじゃない？ むかし。

片岡のその聲は

それら無数の色彩がまさに極小のつぶになってかさなり合った。

倦怠？ 赤裸々なまでに

——何も喰わないでそのまま座ってぼうっしててるわけ。おかしいじゃん？…さすがにおかしいっておもうじゃん。

赤裸々なまでにあきらかな

まさかね。額触ったの奥さんが。

もうすぐ死ぬだろう

つらなり、つらなる

レ・ヴァン・クアンは

——郁美さん？

もうすぐ

——克美だよ。触ったら、熱いって。

感じられた体温には明らかに
色彩。

愚弄するような？

——さわったら、この子熱ある。パパどうしようって。

光にふれる

——コロナ？

もうすぐクアンは

色の粒の微細が玉散る。

降るひかりにふれたかのように擬態した

——病院探してさ。コロナ対応できるところ。それがまた遠くてさ。遠くないけど。いつも行かないエリアだからさ。

差し出されていたわけでもない、その

わかんないじゃん？ 同じ東京でも知らない土地って膨大なのな。

指は
飛沫のように？
ユエンの？
——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。
わたしにふれようとしたユエンの
朝、ね。朝。俺が連れて行ったわけ。タクシー使うなって云われたけどね。保
健所に。...どうやって？
細い
泡沫のように？
細く、むしろちいさい
——云わなかったけどね。タクシーの奴には。まさかコロナ確定でもないし
ね。...どうなんだろう。
ゴックは私を思いだしたに違いなかった
あれ、本当にあぶないのかな？ そのあぶなさの基準なんなのかな？
まさにこの時に
儼い散ったしぶきのように。
そんな気がした
——病院行ったら、即隔離。即入院。
ふれたように擬態した
——症状ひどいの？
指は
玉散る。
私の？
——朝には収まりかけてた。そう思った。たぶん医者もそう思ってたと思う。彼
等、看護婦...看護師？
ゴックがなにを思ったかは知らない
彼等も対応、余裕あったからね。
かたどる指
それら、何を暗示したのかも判らない色彩の粒の無数が
何も
——でも、死んだの？
私を思いだして
——死んだ。
私だけを
かさなり、つらなり、
ふれるかたちをかたどる指
——なんで？
憩う時間を擬態する
——その夜、入院初日な。いきなり症状悪化した。

その

それら、何を暗示したのか、それ自身にも知られていなかった色彩の粒の無数が

親密な時の中に憩う憩いを

——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

わたしは思わず耳をすませた

まさかね。入院の準備とか追われるじゃない。はるか宮島から俺の両親呼べ
ないじゃない。

重なった音響

つらなり、かさなり、

いつから？

——克美の出身秋田だぜ？ 秋田なんか... 各県移動も厳しいでしょ。もうなんか。
分断されて。...

息遣う

関所あるわけでもなく、壁があるわけでもなく、見えない困難な境界が見
えた。

不思議な気がした

飛沫のように？

いつからユエンはわたしの唇を

——お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

その指先に

あせったね。ただ。ばたばたできないし。俺らも感染疑いあるからね。俺そ
のまま病院に残って。克美に準備させて。

笑った

泡沫のように？

他人の唇が

——救急車出してもらって。夕方克美とふたりの息子、そろって病院来てさ。

ユエンの？

でも、あんなやさしい隔離でいいの？ って。思わずおもったけど。なんか、
すぐ逃げちゃえそう。

時には春に

儼い散ったしぶきのように。

そうなの？

——びっくりしたな。あんなにすぐに。

なぜ？

その夜だかね。一気に悪くなったみたいで。悪化のはなし、聞きはしたけど、
謂い方、やさしいからね。

色彩が

色の粒の微細が玉散る。

聲をきこうとした。わたしは

——だれも彼も氣、使ってね。むしろやさしく云うからね。むしろ、もう死ぬかもよって云えばいいのに。

わたしはそれでも

——それは出来ないでしょ。さすがに。

その時にいったてさえも

色彩。

なぜ？

——お前にだけは話そう。さゝやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき聲で。

その紫に近い白の

娘は朝死んだ。…朝？ 朝が来る前。…朝？ 三時すぎ。…朝？ あれ、それでも朝っていうべきなのかな？

白に近い紫のかすむに近い生滅の寸前

看取することもできない。隔離されて。娘は隔離。俺も隔離。誰も彼も隔離。

流れるような

死体の始末は勝手にしてくれる。勝手に、安全を維持するために？ さっさと死体は焼き棄てて骨にする。

流れ去るような

あれ、灰はどうするんだろうな？

むしろ、流れ

灰もやっぱり有害物質扱いなの？…ちがうか。

なぜ？

骨はおれたちに渡すんだもん。

ユエンは昨日肉を食わなかった

克美、陽性だったよ。…そんなに症状重くない。たぶん死なない。入院してるけど。

その翳りは

茂人、…上の子。あいつ陰性。…奇蹟だな。

アスファルトの上で

治道、…下の子。あいつ陽性。…死にはしないと思う。…かな？…かもな。あいつ、入院…隔離されてる。

流れ、流れはじめて

克美も、たぶん死なない。むしろ娘死んでから咳ひどくなった。熱もある。

むしろ

夜になるとね、熱、あがるの。咳もひどくなる。…でもまだ、責任感あるからね。

ゴックはわたしを思うだろう

ほら、責任あるじゃん。死ねないぜ。ふたり残ってる。俺もだけど。

翳る夕方の日差しにも

おれもなんだけど、心にまだ張りが残ってる。折れてない。あとふたりへの責任あるから。

その

同じ心がもうへし折れてる。あんな...弓香。娘。あんなおさない子が...なんで？

光が投げた窓越しの影の不可解な形態にも

家にずっといたのにな。基本、だれとも接触してなかったはずなのにな。

思うだろう

俺の、俺たちの？...克美の、...俺たちの？ 心、完全にへし折れて壊れた。で、生き生きと生きてる。

知らず知らずの内も私は

生き残る。死ねない。死なない。絶対に。ふたりの爲に。彼らがひとり立ちするまでには。

片岡に共感を

歎いてたよ。

共感を抱き始めるに違いなかった

秋田の両親なんか...もう、...歎いてたよ。

いつでも

恨んでたよ。

ゴック・アインは彼女を壊した

宮島の両親なんか...もう、...恨んでたよ。

レ・ダン・リーを

いいな、あいつら。心へし折れて平気だから。心折れても大丈夫だから。

まるで他人

むしろあいつらが死ねばよかった。

まるで他人の、無残な

本人たちもそう云ってたよ。

流れ

むしろわたしたちが死ねばよかった。

流れ出て

俺は心に云った。慥かに、あなたたちこそ死ねばよかった。

流れ、流れ、流れ終わろうとするその

唇にはなにも云わなかった。

そそのかすような

克美の両親にも言った。心の中でだけ。

誘惑するかのような

慥かに、あなたたちこそ死ねばよかった。

聲を

唇にはなにも云わなかった。

聲をそしてひそめるような

俺の両親にも言った。心の中でだけ。

思い出す

慥かに、あなたたちこそ死ねばよかった。

なぜ、わたしはあなたを抱いたのだろう？

俺の唇は沈黙していた。

ゴック・アイン、あなたを、と

あきらかだった。代わりに死ぬべきは、それがもしも可能だったら、彼等しか居なかった。

彼を

残酷だな。

彼をいたぶったのは私だった

彼等こそ死ねばよかった。

大津寄を、あの

無残だな。

はかりかねるいくつもの騒音

まさに彼等こそ、...ね。

ささやきごえの

——なに？

その、微細な

——これ、何なんだ？

ささやき聲の

私は何も答えなかった。

かさなる轟音に

——今、俺は何を見てるんだ？

だれが耳を聳したのだろう？

そして、どんな風景をみてるんだ？

うつくしいもの。うそのようにも

一体、何が起こって（...起きた）るんだ？（...んだ？）

はたして、だれが？

おれは何を体験したんだ？

穢れたもの、まるで

それが二週間前。

だれと？

——そんなに前だったの？

咬みついて仕舞え、と

——そんなに前。

わたしは思った。その時、ユエンに

——謂えよ。俺に。

うつくしいもの、うそのようにも

——お前に云ってどうなるの？

その肌に

片岡は唇の先に笑い聲を立てた。

舌の先にも

——悪気があっていうんじゃない。勘違いしないで。聞いて。

凶暴な牙が

お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき
聲で。

凶暴な牙が軋ては

で、考えた。俺は、...おかしよなって。

したたりおちるように

俺、検査陰性。

したたらせ、自分勝手にしたたりおちるように

でも、おかしくない？

波紋のようなもの

弓香、どこで感染したんだよ。

同時にひろがる波紋のような

弓香、そんなにであるかなかったぜ。俺たちのいうこと、ちゃんとよく聞
いて。

時を問わずにわたしたちは聲をひそめて

あいつ、弓香、結構素直な子だったからね。って。...おかしくない？

いつでもひとりだった

どこで？...わかる？

見て

抗体検査受けた。俺。...結果、うじゃうじゃ居た。

ユエン、あなたの無残な

——抗体？

うばわれたものなどなにもなかった

——そ。おそらく、俺、感染してたのな。結構、だましだまし仕事、であるいて
るじゃん。

無惨な

気を付けてるけどね。それ、もはやマナーだからさ。気を付けてなくても気を
付けてるふうしないとき。

命の泉

人前でおならするかってレベルの当然マナー。

どんなときも

人にも慥かにいっぱい...いつもよりすくなくとも、それなりに、電車も乗る
しな。卑怯になるよね。

悲しいまでも、そして悲しすぎるまでも

大人になると。こずるくなる。これくらいオッケーでしょ的な。

わたしは鏡の中に

匂わず音もしないおならならオッケーじゃない的処世術の日常。

鏡の中にその

...わかる？ お前にだけは話そう。ささやき聲で。むしろ、聞き取れないほどのささやき聲で。

翳る形態。玉散る

たぶんね、無症状感染者。...知ってる？ よく言うよね、あれ。

玉散る

たぶん、あれ。たぶん、娘殺したの、俺だと思う。

慥かに私は、むしろ片岡に

——そうとは言いきれない。

共感を？

——まさに。そうじゃないとも言い切れない。...な。

処罰された形態

これ、何なんだろう？ 今、俺は何を見てるんだ？

あるいは、それ。すべてのかたちは

そして、どんな風景をみてるんだ？

いつ？

一体、何が起こってるんだ？

いつ、この豚のような

何が起こったんだ？

糞まみれの家畜のような

おれは何を体験したんだ？

とめどもなく

克美はまだ帰ってこない。面会もできない。当たり前。次男も...長男と一緒に。

とめどもなくに

いま、部屋であそんでるよ。何やってるのかは知らない。...な。

知っていた

——なに？

わたしたちは

——どう思う？

結局は

——なにが？

自分たちの

——どうよ。

孕み込んでしまった

——なに？

自分たちの無垢を。その

——だからさ、...どう？

赤裸々を

——何だよ。

とめどもなく

——俺、どうするべきだと思う？

とめどもなくに

——責任はたせよ。自分の。

わたしはだれかの咎をさえ掠め取った

——慥かに。俺もそう思う。

墮す

——だったら、

肌は、そしてまさに

——弱音はなくなってか？...どうやって？ 責任果たすって、どうやって？

沈黙にも

ね？...今、お前、俺がおかしくなりかけてるって思ったろ？

墮す

いまお前まさに、俺が頭おかしくなりかけてるって思ったろ？

悲しいまでに

まさか。

愚かしいまでに

俺、完全に普通。俺の頭の中、完全にクリアーだぜ。

心が

びっくりするくらい。...ね？

むしろ心がひきさかれて仕舞いそうに

...今、お前、俺が自殺でもしてかすって思ったろ？

そのままに

いまお前まさに、俺が自分で死のうとしてるって思ったろ？

気付かないほどの速度で

飛び降りて？...屋上から。

知るだろう、いつかは

飛び込んで？...ホームから。

いつかは、その

切り裂いて？...手首を。

流れ、流れ出す

噛み切って？...齒に舌を。

墮す

首吊るか？...代々木八幡ででも？

解き放たれたいくつもの

まさか。

解き放たれなかったいくつもの

俺、死なないぜ。

笑う

絶対に俺、死なないぜ。
笑う寸前の、その手前に
びっくりするよ。確信してる。俺は生きる。
すでにして
自分で死んだりはしない。
——そう...
——そう。
——そうか。
——...そう。
そうなんだよね。
——そう。
——そ。
実際、...
そう。
事実、さ。
そう...
そうなんだよ。
云って、片岡はかすかに笑った。
ユエンがなじる
唇の先で。
詞も無く、詰る気も無くて、その
その音が聞こえたような気がした。
気付かれないほどの自然な
私は思わず言った。
ふれたかの女の
——それで？
自分の耳を疑った。
——話したいのは、それ？
自分が云うべき事、...ではなく
——それだけ？
云いたいことは
——終り？
こんなことではなかった、と。
——そ。
片岡が云った。
耳元に、その音聲を聞いた。
——そ。
片岡がそう云った。
——そっか。
わたしがそう答えた。

——そ。

片岡がそう云った。

——そうな。

わたしがそう答えた。

——じゃ、切るわ。

洪水のように

片岡がそう云った。

まさに洪水のように

その聲は極端にやさしかった。

もはやとめどめもなく

わたしは片岡に励まされた気がした。

心よ

片岡は通話を切った。

心、ただその

かくて偈を以て頌して曰く

片岡は云った

わすれられない

聲をひそめるでもなく

わすれられなんだよ

あくまでも

わすれようとしても

あまりに素直に

わすれようというきもなく

昨日の天気を思いだす様に

わすれられない

あるいは

なにを？

犬の死を語ろうとしたかのように

なにもみていないの？

たとえば二十年前に

そのしを

彼が葬った犬を

なにもみていないのに？

海の近くに穴を

なにを、おれはわすれられないでいるの？

かくに聞きゝマどろミてまどろムまゝ壬生頭ノ上に笑ひ聲たチて散り笑ひ騒ぎ立ちて高
散り千りゝ立ちたる須臾の響きを聞きゝ聞きて聞き驚きてそノ聲聞き覺へあレば厥れヒ
エンがものに想へれば壬生横たわる儘に頸そらし顎つき出シて見て観るに果たしてレ・
ヴァン・ヒエンひとり寢室が戸口に立ちて聲あげて笑ひたりテ無邪気なりきそノ目に見
たる壬生らの裸身に羞じルともなくにヒエン笑ミじゃれるようにも笑ミてかくて壬生ユ

エンをゆすりたるにユエンゆすり起こされてメを覺シきかくて壬生ユエンのいつかうたゝ寝シをりたりシに氣付きゝユエン耻じテ羞じらひ又驕り匂はせ又戯れ笑ひ又おどけた様ミせて臆而立ち服纏はんとすにヒエン殊更に聲ひソめてユエンに語り語りはらぬにユエン殊更に驚きたる聲裏返らせて喉に立てキ壬生それらのことごとわざと戯れたる演技に淫し合ふかノ様にも觀じて横たはるまゝひとり見きいつかひそめたル聲のまゝに女らふたりノ聲色たゞ姦しくなりゆき迦斯麻志岐を壬生察するところありテ身を起こして衣服纏ひきユエン此の時まさに壬生を返り見テかくてまさに壬生に告げて云さくレ・ヴァン・クアンいまゝさに死なんとすとかくて頌して

あなたに話そう。

あきらかに

まさにあなたの爲に話そう。

すくなくともあきらかに私には

かならずしも驚きも無い儘に、私は靜かに驚く。

わたしには不可解な事実が

振り返ったユエンの告げたその

例えばヒエンの、じゃれつくような

事実に。その、ただその事実に、悲しむでもなく。まして哀れむでなく。

戯れ、目の、たわむれを食ふような目の色の

あるいは歎くでもなく。まして諦めるでもなく。

その儘に目の

むしろただ私を赦したような、そんな眼差し下の唇の。その（——蠅の）

むしろ案じ、殊更にも案じて、すでにあからさまな歎きを

それらの（——蠅のさわぎ、）聲。

恨みを？ 知るかのような目の、その

聲の響きに、かならずしも（蠅の、——さわぎたつ蠅のような）驚きも無い儘に、私は（——その）靜かに驚く。

目の色の時をわかない共存？

慥かにレ・ヴァン・クアンはもうすぐ（——さわぎたつ）死ぬに違いなかった。

あやうくすれちがう交替、それら

彼はもうすぐ（——さわぐ蠅の）死ぬのだから。

さわぐ色、嘲り、同時にいつくしむような

だから（——騒ぎ立った蠅の）レ・ヴァン・クアンはもうすぐ死ぬに違いなかった。

そんな笑いの、笑いの終わらないうちにすでに

彼が自分で立ち上がったのを知っていた。

明らかだった目の

思いだすとも言えない、かすめ取るような速度で私はすでに彼を思った。

一途な深い、ただふかい歎きと

その痩せた身体のかすかな左へのかたむきを。

太っちょのヒエンは私の背をたたいた

彼は自分で歩いたのだった。

慰めるように

それが最後に足の裏が地を踏んだ時間になるのだろうか？

勇気づけようとしたかのように

わたしはそう思いながら、かならずしも驚きも無い儘に、私は静かに驚く。

励ますように

レ・ハンは歎くだろうか？

他人の死に

涙とともに？

どう考えても他人でしかない

レ・ダン・リーは歎くだろうか？

異国の地の異なる人種の

まるで歎きを知るべき心が自分にあるかのように？

異なる他人の

ダン・ティ・タムは騒ぐだろう。

その他人の死に

殊更に。

レ・ヴァン・ヒエンが聲を立てて笑った

まさに時を知って、時を知る儘殊更に彼女は泣き叫ぶに違いないと。

背後に、私が背を向けた隙を

わたしはひとりでそう思った。

隙をつくように

そばのだれに告げるともなく。

ユエンの爲に

秘密にした譯でもなくて。

おそらくはユエンの爲だけに

そのヒエンの時に立てた笑い聲に、或いはそれを故意にひそめた聲にも、壬生は感じた。まるでなにかを企み、そして企みのあることを隠さない儘に、何を企むのかは隠しとおした、そんな曖昧な気配。壬生はヒエンが時に彼にだけ何かの想いを暗示させて、そのくせ思われた何もありはしなかったに違いない眼差しが壬生に一瞬だけ注がれてそして前触れもなくそらされてゆくのを。ユエンが殊更に歎きと、悲嘆と、さらには嘲笑をさええないまぜにした聲をたてたのを、——かわいそうに。

と、かわいそうに、

かわいそうなあなたは。

と、ヒエンは

かわいそうに、

と、ヒエンは心に、いつまでも

いまであなたたちは、ふたり

ふたりだけで、かわいそうに

と、

かわいそうなあなたたちは、と、ヒエンが

かわいそうに、と、雲が
そして雲は人知れず影につつむ
壬生は傍らに、他人のように聞いた。壬生はかの女等にすれ違って汗を流しに行き、か
くて偲を以て頷して曰く

飛沫のように

水が撥ねた

あるいは

肌の上を

或は鮮明に玉散った

すべるように

しぶきの飛沫のように

流れるように

飛沫のように

素直に落ちるように

あるいは

ノズルから流れ出した水は

或は瞬く間もなく玉散った

音を立てながら

しぶきの飛沫のように

聞いた

飛沫のように

わたしはそれら、水浸しの音響をではなくて

あるいは

口と鼻に立つ

或はすでに玉散っていた

わたしの、わたしだけが立てていた

しぶきの飛沫のわずかな記憶のように

呼吸の音を

かくに聞きゝ壬生レ・ヴァン・カンが家を詣でき是れユエン及びヒエンと俱なりユエン
壬生がバイクの後ろに乗り乗って殊更にシがみつゝヒエンみづからの乗りたる自転車
を以て後に随ひて随ひすゝミてかノ女ひとり遅レき町人通りなクテ静かなりて閑静なり
て人の息で生きる気配だになくて飲食店舗等物販店舗等悉くシャッター下ろシたる之レ
常なりて壬生すでに見馴れき壬生レ・ヴァン・カンが家の前に着之時家の前にすでに近
親の人集まりて悉くに掃除等する是レこのあたりの死せんとする者まさに死なんとし死
者にならんとす之時の風習なりて壬生何度か見テ観たることあれども改メてその風習奇
異に觀ジて眼にあたらしき人と人ら怒号さえ口と口ゝにたてゝ家の前ノ前なる前又家の
内の内たる内六七人が近親者罵り相ヒ罵倒し合ふに似て盛んにシてあらうぎて片づけ追
はれたりてたダ雑然たりき壬生與ユエン俱なりてレ・ヴァン・カン及びクアンが部屋の
翳りを潜りて入之時爰に迄も人と人ゝ掃除に追われたりき人集ひ集まりて十人あまたば
かりならんかクテレ・ヴァン・クアンが部屋の翳りを潜り潜りて入之時死にかけたるレ・

ヴァン・クアンが傍らにその老父レ・ティ・カンみづからノ寝台に腰かけテ老ひさらばえたる巨体の皺翳りのうちに彌濃くし皺よらせ枯れ干上がれるかにも見ゆかくてレ・ティ・カンまさに死なんとす息子見テ観つめ茫然たりて見て観ツめ壬生とユエン見返して何をも云さずかくて死なんとす息子見て観つめ黙しテ見て観ツめき又レ・ヴァン・クアンが部屋ノ翳りを潜り潜りテ翳りに死にかけたるレ・ヴァン・クアンが傍らにその後妻いまこそダン・ティ・タムさがるようにもクアンが頭ノ近くにいまこそ添ひ床に座りて歎きいまこそ泣き口に叫き喉にいまこそ叫き鼻に叫きヲればいまこそたゞ殊更にいまこそ沈痛なりキすデにいまこそ

ときは

いまこそときは

あなたのうえに

おおいかぶさるようにして

レ・ヴァン・クアン死にたりけれやうにも錯覺させきクアンいまだ生きて目ひらきて時にクアンみづからまばたき、又クアンが部屋ノ翳りを潜り潜りて死にかけたるレ・ヴァン・クアンが傍らにダン・ティ・タムが胎ナル子レ・ダン・リー遠く父ノ寝そべりたる右りが足元に立ちて何ヲも云わずテ父ノあおむけたる姿見て見をりて壬生ラに気付きて顔あげてレ・ダン・リー壬生を見いまこそ且つはユエンをレ・ダン・リーは見且つはいまこそレ・ダン・リー壬生をふたたびに見いまこそ壬生にのみほ、笑ミき壬生いまこそそのほ、笑むに少女ノいまこそ壬生とノ共謀したるあることあるを暗示させたるにも観じていまこそいぶかしきいまこそ何の共謀ノ有るかはいまこそ知らざりきいまこそ

ときは

いまこそときは

あなたのうえに

おおいかぶさるようにして

又レ・ヴァン・クアンが部屋ノ翳りを潜り潜りテ死にかけたるクアンが傍らにその先妻が娘レ・ハンありてレ・ハン壬生に気付き又ユエンに気付きかくてレ・ハンまなざしに壬生に気付きて壬生ヲは見ず又いまこそユエンに気付きていまこそユエンを見ざりきかくていまこそレ・ハン瘦せテいまこそ衰ゑすデにシていまこそ如何にシてもいまこそ

ときは

いまこそときは

あなたのうえに

ふいうちをかけたようにして

死にテ死ヌる以外にはすべもなク見ヘたる父の左りが足元に立ちて壬生その背後なる傍らにいまこそ添ひタればレ・ハンが軀のミいまこそ不埒な迄にも色づきていまこそ肌馨りいまこそ薫らせて肌いまこそ匂ひ縛りたる髪の香だにいまこそ匂ひ立ちていまこそ薫りいまこそ匂ひキかくて頌して

あなたに話そう。

鮮明に

まさにあなたの爲に話そう。

思っても見なかったほどの鮮明さで

見ていた。

あるんだよ

ダン・ティ・タムがまるでひとりだけ、ひとりだけそこに居てひとりだけ歎きを
しるかのようにも、ひとりだけ歎くのを。

まさに

私は。

まさにそこにあるんだよ、と

そしてレ・ハンは見なかった。

死、が

彼女が戀した男の肌の匂いに観づきながら？

まさに死ぬ、という死が

まるで彼がそこにいないように擬態して？

そう鮮明に

レ・ハンは眼差しの映す死に懸けた父親のすがたに、或いは自分の罪をなど觀じ
たとこなど在っただろうか？

思っても見なかったほどの鮮明さで

彼女のせいとだけは言えないまでも。

耳元にささやかれるような

だれもがそう思って居た筈だった。

思わずわたしは思っていた

親族の誰もが。

わたしが死んだらどうするのだろう？

娘が父親を病い殺したのだと。

例えばユエンは？

レ・ダン・リーはひとりだけ、まるで縁のない他人のようにそこにいた。

あるいはレ・リーは

わたしの時にまなざしの隅に見止められたその姿は、あきらかに誰よりも深く歎
いているように見えた。

あるいはゴック・アインは？

だれよりも素直に。

どんなふうに葬るのだろうか？

死にゆこうとする男の死にゆこうとする命を。

それが場違いであることは

時にレ・ダン・リーがわたしを偷み見て私にほゝ笑む　をねらっていたことは知っ
ていた。

人の

レ・ヴァン・カンはずっといまや老いをさらしてそこに居た。

他人のあくまで固有の死に際して

ユエンは祖父にひとこみこと語り掛けた後で部屋を出て行った。

それが場違いであるということは

壁の向こうに笑い声が聞こえた。

自分の死など

かの女ら、女たちの、かの女たちは忙しかった。

その妄想じみた自分の

間に間にもたつユエンのそれをもふくめて。

例えば鳥葬？

彼女たちはかの女たちの仕事に追われた。

古いゾロアスター教の流儀のように

深く死の容赦もない接近を容赦もなく歎き、かつあられもなく笑い罵り歓声をあげて。

野ざらしに鳥たちに喰いちらしてもらえたら

かの女たちは死の到来を用意しに追われた。

或は風葬？

壁の向こうに笑い声が聞こえた。

遠いモンゴルの

彼ら、男たちの、かの男たちは忙しかった。

かつて馬に駆けた男たち

間に間にもたつタンのそれをもふくめて。

女たちの流儀のように

彼らは彼らの仕事に追われた。

風と日差しと、時には雨の中に

深く死の容赦もない接近を容赦もなく歎き、かつあられもなく笑い罵り歓声をあげて。

風化してしまえたら

かの男たちは死の到来を用意しに追われた。

それが場違いであるということは知っていた

わたしは気付いた。

自分の死など

そして一瞬、軽く、ほんの空気がふれたようなかるさでおののきを感じた。

あまりにも無関係な

わたしの指先がレ・ハンの頭をなぜていた。

クアンはひとりで死んでゆく

レ・ダン・リーがそれを見ていた事には気付いていた。

他人の死など

それはかの女がふたたび、何度目かに私を偷み見た一瞬だったから。

それが場違いであるということは知っていた

レ・ダン・リーはてらいもなく、又詬じるでもなく、又科めるでもなく私を見、観てわたしを咎めているに違いないと。

わたしの死など

私は想った。

それが場違いであるということは知っていた
レ・ダン・リーは言葉も無くわたしを今、戒めていたと。
女たちの
私は慥かに思っていた。
肌の匂いも、女たちが
何故？
わたしの傍らで匂ったに違いない
わたしは疑う。
私の肌の匂いも
遅れてあわてた気配を以て、ふりかえり見たレ・ハンの目がまさに私に戀してあ
きらかにもほゝ笑んでいたから。
煽情的なまでに、いま
そらされた私の目がレ・ダン・リーの嘲弄するかのような笑みを見た。
死に無関係なさまざまが
...わかります。
さまざまなそれ固有の匂いを放ち
レ・ダン・リーの嘲弄する目がそうさゝやいていた。
例えば床に放置された段ボールは
...そうですね。
壁にはられたカレンダーの
レ・ダン・リーの嘲弄する目がそうさゝやいていた。
三年前のカレンダーの匂い
...たしかに、わかります。
ここの警察署が配って回ったに違いない
レ・ダン・リーの嘲弄する目がそうさゝやいていた。
匂い
少女達は匂う。
あまりにも無関係な
向こうの悲嘆のタムの歎きすすり泣き何をかを非難し非議を訴える聲の、こちら。
関係の中の孤絶の中に
匂う。
ひとりでクアンは今日、死ぬに違いない
死に懸けた男のすでに死ぬしか可能性の赦されない肉体の匂わせていたかもしれ
ない臭気？
そう思った
そのこちらに少女達は軀を匂わせた。
私はそう思い、壁の向こうに
それを望んだ譯でない儘にも。
レ・ヴァン・クアンの、——カンの部屋の中は薄暗かった。ひとつだけある窓にすぐな
らんで立った隣家の壁のせいで。光など完全に遮断して、昼間でも明けはじめの時間の

くらさでしかないそれは、まだ早朝に今がいまだに明けはじめる寸前の一瞬の時間帯であるかのようにも人の目に擬態した。それは悪い事ではなかった。ここでは。この、彼等にとっては。部屋はすでに冷えていた。人影を無数にざわめかせながら。外のすでに熱をはらみはじめた温度がうそのように。そして曇った日、驟雨の降るに違いない日の湿気さえなくて、からからに大気さえ干からびたようにも乾き、無残な迄に肌馴れない他人事の冷気をみなぎらす。悪い事ではなかった。壬生はそれを知っていた。ここは熱帯だった。日差しをさけた暗い、そして熱気を遮断した寒々しさはここではまさに恩寵じみた好条件だった。この、彼等にとっては。レ・ハンがそう自然にこの部屋になじんでいることは、せめてあめが

と、

レ・ハンはささやく、喉の奥に

せめて雨が

雨が降りしきってあなたをせめて潤しさえすれば。

死にかけた

渴いたひとりのあなたを。

壬生はすでに知っていた。レ・ダン・リーがそう自然にこの部屋になじんでいることは、ダン・ティ・タムがそう自然にこの部屋になじんでいることは、壬生はすでに知っていた。レ・ティ・カンが、レ・ヴァン・クアンがそう自然にこの部屋になじんでいることは、壬生はすでに知っていた。壬生はもはや知っていた。レ・ヴァン・クアンはまさに、死ぬには最適で、生きて行くにも最適の居心地のいい部屋で死んで行くのだった。かくて偈を以て頌して曰く

いつでもダン・ティ・タムは同じような泣き方をした

四年前にはじめてリーに逢った時

何か月前、入院したレ・ダン・クアンの病室で

リーはレ・ティ・カンの家でクアンの膝に抱かれていた

誤って彼女に顔を合わせた時も

軟膏をぬられ、じゃれ合うようにクアンにぬられていた

ユエンは殊更に目をそらした

肌に赤癩の疾患があったから。その病名は

憎しみと軽蔑を以て、タムからだけ

私はしらない。驟雨

いつでもダン・ティ・タムは同じような泣き方をした

家の前にバイクに止まった女が居た。ちょうど

タムはそこにいないレ・ハンの背徳をなじった

わたしの目の前で。待ち合わせしていた

彼女さえいなければ、こうならなかったに違いないと

ベトナム人の友人を待っていたから。飲んだくれの

本当かどうか知らない。それは

チャン・ティ・ホア。女はその六月

タムを憎み軽蔑するユエンがわたしに訳して聞かせた言葉にすぎない

おそらくは子供の夏休みの六月に、父親に預けた
あの時も
娘を引き取りに来たのだった。その
いつでもダン・ティ・タムは同じような泣き方をした
女は、——ダン・ティ・タムは
一か月前に
見ず知らずのタムは私を無視し、大声で
まだ生き生きしていたすでに在宅治療のクアンを見舞って
奥の日影のクアンを呼んだ。その時には
彼がすでに死んだ人であるかのように
あどけなくも笑って、父親が
クアンがわらって殊更に、死んだ人を歎くタムの深い歎きを
立ち上がる前にレ・ダン・リーは自ら駆け寄った。おそらくは
慰め、諷めるように慰め、励ますように叱咤した
母親の名前を
あの時も
呼びながら？
いつでもダン・ティ・タムは同じような泣き方をした
私は気付いた。その時に
ほんの数日...一週間以上？
引き裂かれて在るに違いないと
前に
彼女たちは深い憎しみの中に
新型コロナの再流行の前に
家族、とよばれる彼等の単位は
前の新型コロナの流行の名残りで
遅れてバイクに近づいたクアンは私を紹介し
不織綿のマスクで顔を半分かくしてさえも
そして
その時も
その時彼女は
顔半分だけでダン・ティ・タムは同じような泣き方をした
わたしにだけ極端に親密な眼差しをくれたから
やつれはて
ヒエンも、ユエンも
すでにレ・ヴァン・クアンは死に懸けていた
レ・ハンもだれもがその目に
寥れはて
彼女に軽蔑の眼差しを浮かべていたことは、その時には
体中に癌化した自分の細胞を分裂させ

気付かない儘だった
繁殖させ
レ・ダン・リーは殊更にも
夜川禮波天
そこが自分の家であるかのようにふるまった
すでに流動食以外喉にとおらない
母親の至近の所でだけ
呼吸器をつけた体にレ・ハンは注射を打つ
スクーターの前に身をすべらし込みながら
羸禮波天
まるでクアンの膝だけが
互いに寄り添わないレ・ハンのかたわら
自分に赦された唯一の場所であるかのように
すこし背後のすこしだけ左りななめで
息をひそめていたリーは
ダン・ティ・タムは同じような泣き方をした
まさに

かくに聞き、此ノ日壬生レ・ヴァン・クアンが死にたるを耳に聞きタリシは午前十時なり
き此ノ時壬生レ・ティ・カンが家ノ前の隅なるにひとり誰かノ止めたるバイクに座り
て待てり外の外ナル外気わづかに冷やみて潤ひき是レ空曇りテくもり空なるゆゑならん
前ナル大通りに時にバイク等貨物車両等バス等自動車等まばらに通リキ閑静と觀ズベキ
や雜然と感ズベキズ壬生いぶかりきかくてなというでもなク壬生あざ笑ふに、て笑ミ
かけて笑ミをはりもせず壬生外國人なレば誰も掃除等の死の刻迎えんが爲の準備等手伝
わせズ又壬生に手伝フ氣もなかりキ壬生ひとり心に陰慘ヲのミ感じき所以は知らず壬生
みづからにもゆゑん知られざるまゝ見るもノ悉く又聞くもノ悉くたダ慘状をのみさらし
てありけるにも感じキ人と人のこゑひびき、人と人の息ヅかひ、びき、人の人の氣配亂
れかくて人の歓声じみたる聲立ち騒ぎ立ちて喚声じみたる聲同じくに立ち騒ぎ立ちて又
時同じくに罵声の如き立ち騒ぎ立ちて壬生振り返り見ルともなくに察しきかくて須臾も
なくて屋内ひときわにしずまりキかくてまたかすかにも仄かにも物音さまざまに立ち
はじめきて泣き聲又泣きてすすりテ泣く聲又すすりテすすりあげテ泣きて泣き騒ぎ泣ク聲
壬生の耳にはきこえざりき壬生彼等かノ女等家屋に沈痛に黙してあるやらんと思ひて想
ひヲりきややありてユエン壬生が背後にその氣配投げて言葉かけず壬生振り返らず
ユエン唇に壬生の見せたる背にレ・ヴァン・クアン遂に死にテ死にをはりたるを告げ
壬生思はずに驚きて振り返ルに壬生の目ユエンが目涙ながレおちて那我禮ながれ盡
きるともなくに甚だシきを見て觀をはりたる間もなくにすでにみづからの双渺もすでに
シて涙に視界ゆがミゆがめゆがミテ湯我女琉こと甚だシき異形のミさらしてありけるに氣
付き、かくて頷して

あなたに話そう。

いつ死ぬかも知らない人間は

まさにあなたの爲に話そう。

いつでも人を待ちぼうけさせる
背後に、無残な程の横溢を見る気がした。
自分でも
振り返られない背後の、音響に。
自分がいつ死ぬか判らない彼は
その聲の、男たちの立てた聲の
或は
その罵声のような、悲嘆するかの、怒声のような、非難するかの、時に嘲弄し又は愚弄するかの
死にふれるまさにその瞬間に
それら聲。
死にふれた
その聲と聲が群れて羣らなり叢らなす聲の繁茂のはなれた場所で。
触感をまさにあざやかにも自覚すべき意識は
バイクの、誰かの知らないバイクの上で。
すでに消滅さえして
背後に、無残な程の横溢を見る気がした。
彼は自分の死の時をさえ見ない
振り返られない背後の、音響に。
彼さえ
その聲の、女たちの立てた聲の
その時をは見なかった
その罵声のような、悲嘆するかの、怒声のような、非難するかの、時に嘲弄し又は愚弄するかの
私は待った
それら聲。
待ち望むわけではなく
その聲と聲が群れて羣らなり叢らなす聲の繁茂のはなれた場所で。
待った
日差しの中で。
待つということに存在する
いつ雨が降り出すのだろうと私は想った。
その時の來たる時を待ち望む
曇り空の下で。
あきらかな渴望の翳りを
いつ降出すのだろう、と。
その色を
私は思った。
明らかに
ふたたび降り出しそうな雨の気配を充満させた空は。

わたしは知った。まるで
もうすぐに、と。

わたしはひとりだけ、うらぎりのものように
すでに雨は降って已んだ。草はいまだに濡れてゐた。

クアンの死を待った
路面は既に乾いていた。

ひとりで、だれもおなじように
ところどこに水をためた儘に。

ひとりで、それぞれに違う時間の中に
ざわめきが一瞬立ったあとの沈黙に、

私たちはクアンが死ぬのを待った
誰れもがまるでそれが礼儀であったかのように、

わたしは見ていた

ただ従順に随うように落ちた沈黙のあとに、背後に気配がした時に私はレ・ハン
が来たのだと思った。

最期の時を迎えようとするクアンとは無関係に
自分の父親の死を私にだけ語る爲に。

町にさまざまにその
知っていた。

すがたを赤裸々にさらした無数の
とおくの物音の他人事の群がりの中から足音が聞こえたことは。

翳りの肉体の群れを
サンダルをコンクリートに引きずるような。

死者、ないし死に行こうとする者への敬意も
蟹股するように歩くような。

むしろそれへの意識さえも無く
あのいつもの、だれもがさらす無様な歩き方で。

意識など兆しさえない肉体は様々に
まるで、足を意図的に障害させた愛玩動物に過ぎないかのような歩き方で。

腐った匂いと血の玉を
まるで、纏足にでも拘束されていたかのような。そして猫背の儘のけぞって

玉散らせた。見上げた傍らの
振り返ったそこにユエンを見た時、わたしは彼女と同じようにほゝ笑んだ。

樹木にも、その向こう
お互いを静かに赦し合うかのように。

葉盡きた上の上空にも
わたしたちは、ただ優しかった。

さらに路面の
その眼差しさえもが。
その濡れ、あるいは乾いたアスファルトの

壬生は記憶している。一人で家の前に時間をつぶしていた壬生は、背後にひときわ大きな沈黙が広がって、——陥穽。急になにかに落ち込むように、そして臆而しずかに聲が立って、そのさまざまな聲のささやきごえの集合が轟音にも、そしてそれぞれの自分勝手にさらして沈黙した時に、その時まさにレ・ヴァン・クアンは今この時にこそ死んだのだと思った。静かだった。通りの向こうのパン屋の女亭主が軒先に出て上を見た。まさに降り出しそうな雨を確認していたに違いなかった。——まだ、と。壬生は思った。その時に、まだ降らない、...

雨など。

と。そう思ったことを壬生は記憶していた。ユエンが彼にクアンの死を告げた時に、改めて心にすでに悲しみが咬んでいたことに気付く。悲しみ、と。ひとことのうちにそうやり過ごすしかない、暗い、色彩の有る、色めいた、甘い、絶望的な、未来のない、やわらかな、親しい、感情の塊り。ユエンが自分の顔を拭う手つきを見せて居たのを、——壬生の爲に？——ユエン自身の、あるいはほかでもない逝けるクアンの爲に？ 壬生はそれを見なかった。さらに彼女を通り越して振り向いたそこ、カンの家の中にユエンを誘った、眼差しの片隅で。家屋の翳りを潜り改めて室内の温度と湿気に肌をあわせる。そして壬生はひとにすれ違って、つぎの人にすれちがい、その知った顔の老婆がユエンになにか指示を出したのを聞いた。あるいはいまさらにユエンを慰めたのかも知れなかった。そしてユエンは壬生に置き去りにした。ユエンは壬生に、怨ましげな眼差しに心を残すとしてなかった。ユエンが自分にかのタムの不埒を小聲になじり始めたのを老婆は彼女に事の始末をたくした眼差しの内に、笑んで聞き、聞いて行け

往け

逝け、迎えられた魂よ。

その

見出した光りの、まさにいまだあかき方へ！

...と。

そしてユエンを赦した。ユエンはだれよりも可愛らしかった。そして理知的だった。他の宇宙から来たんだと、死んだ夫はユエンを殊更に愛でゝ云った。かくて偈を以て頌して曰く

不意に巻き上がったようにこそ思った

レ・リーは逃げてしまったに違いない

その轟音、歓声と聲、聲と喚声の騒ぎ立った家屋の中の空気に

そう思った

その音響に

姿を

その容赦の無い厚みの雑然に

父の死の時にも

人々は静まり返ることさえなくて、口々に歎き、歎いて笑い

まさにその時に限って

笑って悔しみ、悔しんで呪い、呪ってレ・ハンを愛で

あるいは知らないうちに

愛でて非難し、非難した軽蔑の中に男も女も年長者はその豊かに肥大した臀部を眺めた

すがたを隠してしまった
まるで自分の爲に子供をうんでくれるかのいうに
レ・ダン・リーに
他人事の眼差しの儘に
ゴック・アインに辱められた少女
カンの、いまやカンとクアンのあるいはカンとクアンとレ・ハンの
ゴック・アインに辱められたことの
時にダン・ティ・タムの
周囲の認知に
彼と彼等とかの女等と彼女の部屋の中に
ふたたび、そしてしられるたびになんども
そして、亡きクアンが病んでいた時の儘に横たわっている寝台に縋って
改めて嘗て辱められ
そして絶対に死体には指先をさえふれないように
やがてまた辱められつづける少女
あやうく上手に避け通しながら、——穢れもののように？
だれも気にしていなかった
ダン・ティ・タムは泣き叫んだ
泣き叫ぶタムさえも
その背後の、自分のベッドに座ったカンの
泣き叫びまさに、いまこの時が
あさくだけ涙をにじませた眼差しの間にレ・ハンは立ってゐた
ただ自分の爲にだけ世界にあたえられたかのようにも
誰もわたしに気付かなかった
泣き叫ぶタムさえも
わたしが入ってきた事には、敢えてのようにだれも気付かずに
彼女が何処に行ったのか
レ・ダン・リーはどこにいたのだろう？
レ・ダン・リーは気に止められてさえいなかった
その時に、私の眼差しが見出さなかったその少女は
人々のさまざまな
醜い、あきらかに穢らしい十二歳の少女はいっぱしの
いろいろな眼差しの交差のなかにも
もの心ついた十二歳とも思えない
タムは泣き叫んだ
見苦しい赤い少女は
いまさらのように彼女は
わたしは気付いた

はじめて涙し
すでにレ・ハンは気付いていたのだった
はじめて叫ぶかのようにも
かの女をだけ見つめていたわたしの眼差しに
彼女はひとりで泣き叫んだ
焦がれて？
事実、慥かに
まさか
間違いなく彼女は
彼女を愛したつもりはなかった
タムはあざやかに、もはや
自覚など。事実、愛してなど居なかった
あざやかすぎるほどに悲しんでいた
レ・ハンも重苦しげに、ひとりで私をゆるしたような眼差しを呉れた
タムはあざやかに
わたしは彼女を見ていた
あざやかすぎるほどにも歎いていた
突然に、レ・ハンもまるで別人のようにも
あざやかに
時と場所を異ならせたようにも？
あざやかすぎるほどにも彼女に
いきなり微笑んだ彼女は、素直過ぎて痴呆じみた笑みの素直を
いま、此の時には
素直の儘にわたしにくれた——あなたは
彼女にもう未来など無かった
と
誰もが知っていた
あなたは今日にも、父親の死にも泣かないに違いない
彼女を殊更に見つめはし無い儘に
わたしはそう思った
彼女以外に、彼女の
あなたは悲しみさえもしない
親族はどこにもゐなかった
レ・ハンも爲に、彼女と同じようにわたしは微笑もうとした
彼女とその娘以外に
同じに、微笑んだはずだった
彼女にその親族は居なかった
わたしは外に出た
すくなくとも
部屋の外の一階の居間は

死んだ夫の死んだ体の傍ら
悉くの電気器具さえ取りはらわれて
カンとレ・ハンの家の中には
空間はただ広く、あつまった人々のあつまりに狭くした
レ・ダン・リーは逃げ出したに違いなかった
知っていた
わたしはそう思っていた
いくつもの顔がそれぞれの顔を曝した
たとえば虐められて？
知っていた
たとえばここでも辱められて
いくつもの顔がそれぞれの顔の骨格に合わせて表情を作る
あるいはレ・リーにさえ
聞いた
死ぬゆくクアンに
聲の群れ
タムにさえ辱められて
ユエンが長老格の老人のかたわらに恭しく座って話し込んでいた
なぶりものにされて
彼女は当分そのままそうするだろう
忘れた事はない
年長者にだけは愛させるユエン
彼を殺して仕舞った時の事は
媚びを知るから
事故だったのだろうか
同年配と年下に厭われるユエン
あるいは確信犯的な？
驕りを知るから
計画的で、且つ衝動的な？
レ・ハンはいつも遠巻きに親しむ
大津寄を殺した時に
ずる賢いレ・ハンは
わたしは茫然とした
老いた女の声がした
想いもしなかった時の中に
叫ぶような聲だった
思いもしなった場所の中に
短じかい、一瞬だけの聲だった
まさにひとりで取り残された、と
怒号とも誓願とも励ましともないその聲の不可解に振り返ったわたしは

思いだした
見た。その老婆
振り返ったそこに
いつかユエンに聲をかけた菜食料理屋の老婆は
レ・ハンを見た時
出て来たレ・ハンの背をさすっていた
彼女がむせび泣いた
今、まさにレ・ハンは直立し、背筋を流したままに
その振るえる唇を
さらした蟹股の上であられもなく号泣した
瞼を
叫ぶように
見たその時に
喚くように
私はそんな風にな気はしなかった
涙は溢れてながれ
そう思った
しゃくりあげるだけの
その時に、わたしはむしろ息を潜めて
泣き聲を喉に知らせない儘に

まるで初めて見る世界の中にゐたかのように
かくに聞きゝかくて人と人ゝに歎キの時ありテ人と人ゝに歡談ノ時ありて人と人ゝに喧
噪ノ時ありき歎キまさに奪われたる命を歎き歡談シまさに人と人ゝ逝くひと在ル人さま
マざまノ雜ゝノ爲に歡談シ喧噪まさにかノ人ノ弔ひの儀式等準備シ手配せんが爲に騒ぎ
立ちけるなりき壬生見テ観るに最早　にみづからのあるべき必然なクかたり又壬生見テ
観るに最早かたりあい　にみづからハかたり不用なりき故にかたりあい壬生片隅にひと
り時ヲ過ごしかたり頃合ゑと觀ジタルが儘にかたちあいヒエンと語り相ひたるユエンに
かたり

ざわめくかべを

とかげははいのぼり

だれも

近寄りていまダ離れたるにユエン壬生が気配にひとり氣ヅきて壬生ヲ見れば壬生壁の
方即ちユエンが家ノ方指にさして微かに笑ミきユエン察さズかくてかたり壬生が勝手に
ユエン悟りテ覺りタルとかたりあい觀ジたりて外に出デんとするをかたり見てユエンい
まさらにも彼のかたりあい歸らんとスるをかたり察せりユエン是を赦スともかたりあい
抗うともなクにかたり

ざわめくかべを

とかげははいのぼり

かすかにななめにおとしたかげを

だれも

すて置きゝかくてユエン最早壬生ヲ見ざル眼差しがうちに遠く壬生のバイク音する音聞
キゝかくてヒエンの話シだれも聞きてありけるにユエンだれもヒエンが嘆きと笑ひだれ
も自在に交互させたる顔の向こうにだれもタムのいまダだれも泣き叫びたる儘に足を引
きずりてそれだれもひとりも寧ろ足に負傷したるにも見えたりてだれもひとりさも又ヒ
エンが嘆きと笑ひ自在にだれも交互させたる顔のだれひとりさえも

みようとはしなかった

まなざしの

くうげきのなかに

向こうにタムのいまダ泣き叫びたる儘にうつむきそレ寧ろ首なみし肩が骨格損じたるか
にも見えたりてヒエンが嘆きと笑ひ自在に交互せたる顔の向こうにいまダ泣き叫びた
る儘なるタムの後に随ひてこの女を警戒するかにも見明らかに警戒シて覩て随ふ数歩離
れのレ・ハンを見きレ・ハンの双渺明らかにタムを非難シ糾弾シ蔑みテありてユエン
目にその少女を見てたダその少女が爲にのミ少女をひとりで憐レみてひとりで限りな
かりけり時にひとりで壬生部屋にありき是レひとりでひとりなりき家にひとりでありき
是れひとりならず爪弾きのひとりでコイ残りテ家にスイカひとりですすりしゃぶるきひ
とりで又タオ残りてひとりで

ななめになげた

かげをふんだ

庭に何事か叫び喚きて叫キ罨ル壬生こゑすでにいたたまれずこゑ何ノ故にともなくにこ
ゑ心たダこゑは心に追われきこゑは又壬生こゑは

まさに

さけばれたこゑは

くちびるをはなれてむこうに

むこうになった

心たダ心みづからに傷められたる痛ミのミ無數に知りき又壬生心たダ心さへ氣ヅかぬ無
數に咬ミ後に傷つき苦しミて苦しみに無數に傷つきたるにも感じてひとり焦燥す所以み
づからもシらざりキかくて頷して

あなたに話そう。

——どうしたの？

まさにあなたの爲に話そう。

——どうもしない

なぜだろう？

——どうしたの？（...誰？）

心がすでに疲れ果てた気がした。

——先生じゃない。（...知って）

なぜだろう？

——壬生先生、（...知ってるよ。壬生）

何が起こった譯でも、あるいは、自分がかかわりうべき何事の起きたという

——どうしたの？（めずらしいね...）

又はかかわりあった何事の起きたという

——（壬生）どうしたの？（壬生先生じゃない？）
そんな事実さえ無い儘に。
——今日、行けなくなって（...どうしたの？）
わたしはひとりで人々の聲と、人の聲と聲と
——今日、（...話したいの？）来るの？
聲、人々の聲のこちらで。
——昨日（わたしと...）言ったでしょ？
四面その音響にかこまれて。
——誰が？（先生、わたしと）
わたしはひとりで息遣っていた。
——ゴックさんが（わたしと話したいの？）
なにもかもが、——神経さえもが消耗して行く気がした。
——わたしが？（誰？）
なぜ？
——いつ？（誰が？）
何もかもが、——感覚器そのものさえもが消耗して行く気がした。
——昨日。（...知ってるよ）
なにかも手遅れのように、事実手遅れになっていた気がした。
——昨日は、（わたし、...）逢ったよ（わたしたち...）
タンとその親族が談笑する傍らを離れて
——ね？ ここで、（知ってるよ、わたしたち）
タンが殊更に自分の葬礼儀式をひけらかして傲るたったひとり歓声を離れ
——約束したじゃない。（どうしたの？...）昨日
なぜ電話など掛けたのだろう？
——わたしが？（ゆっくり...）
ゴックに。
——そう、（もっとゆっくり、）明日、...
わたしの家族のことなど知りもしないゴックに。
——月曜日だよ。（ゆっくり話してよ）
もしくは、知りたくもない筈のゴックに。
——そうだっけ？（音が...）
つまりのユエンの家族の事などは。
——壬生先生が（聞こえないって）言ったんだよ
もしくは、誰よりも知りたがっていた筈の食欲のゴックに。
——そう？（音が、）
他ならぬユエンの身の上に関する事は。
——だって、今日は（元気？）奥さんいるよ（もっと）
聲の、媚びた聲の、赤裸々な媚びの、媚びた聲に
——そうな（げんきだった？）
わたしは遠く耳を澄ます様に

——休みだから、奥さん（ゆっくり）いるよ
耳元に聞いた。

——奥さん、（ゆっくり）悲しがるよ（ゆっくりはなして）
聞き取れないわけでもない至近の音響を

——今日のゴックさんみたいに？
聞き取れないかもしれない聲にこそ擬態させて。

——わたしはいつでも幸せだよ（…そうだよ）
私は聞いていた。

——俺の聲、（わたしね、いつでも）聞けたしね
まわりの誰も、聞いたとしても解せない聲。

——なに？（わたし、元気だよ）
異国の言語、ゴックの聲を。

——俺と、（俺のせい？）話せたしね
ゴックは明らかに歓喜していた。

——私と（壬生先生のおかげだね）話したいの？
当たり前のように、その日も會社は休みだった。

——そうだね（ゆっくり）
もう一か月封鎖は継続すると政府は発表した。

——なんで？（どうしたの？）
だから、もう一か月休みだった。

——なんでって、さ（話して）
おそらく来月も休みの筈だった。

——私と話したら、（話してよ）先生も（ゆっくり話してよ。ゆっくり、）幸せだからね
ゴックは近づけすぎた唇に、はかれた息をノイズに載せた。

——そうだね（元気なのかな？）
耳元にたつ音響にわたしは、その息を頭の中にこすりつけられたように感じた。

——わたしも（…今日は）幸せだね。でね、（雨だったよね）
眼差しに人々の顔を見た。

——みんなも（いつ？）幸せで、
その体躯も

——だからね、（いま？）
同じく翳りの腐った肉と骨の

——みんな（嘘）幸せがいいね（嘘だよ）
骨と血の

——いま（雨降ってないよ）何してるの？
血と肉の

——ね。（元気だった）
それらの變形を見ていた。

——なに？（なんで？）

私はあきらかに時間を持て余した。

——ね。...ね、（なに？）——ねえ。

顧みたその一瞬を、ユエンは見逃さなかった。

——ね。（まさか）

電話に話しながらの私の帰宅をユエンは赦した。

——いいよ。（朝だよ）なに？（今日の）

どうせ弟が居た。

——先生、（雨降ってたね）なにしてるの？

もし歸るならば。

——俺？

どうせレ・ハンが、又はだれかしらがいた。

——今日わたしに、（先生は？）逢いたいよね？

もし歸りたいと思ったならば。

——会えないよね？（先生は元気なの？）

おそらく彼女は今日はここでずっとすごす筈だった。

——どうして？（わたしがいるからね）

なぜなら、レ・ヴァン・クアンがやっと死んだから。

——今、（わたしがいれば）何してるの？

新型コロナに世界中がかかりきりのその八月も初めに、なんのかかわりもない病気で男は、ひとりでやっと死んだから。

——今？

見た。壬生は、歸った庭に、庭に出て歸った時に壬生はそのままに庭に出てそしてその時に壬生は庭にタオの大腿が広がり、拡がりきってゆるく胡坐をかいたのを見た。庭の真ん中で彼女はひとり鼻をすゝりながらいまだ濡める土に手を付き、のけぞるように胸をはり、腹の肥満を突き出して、そして午後一時の中天の雲の切れ目のわずかゝらの直射の日差しを浴びた儘に二の腕を、その皮膚を、又は剥き出しの太ももから下を、その皮膚を白く、タオはてりきらめかせていた。肌の白濁はもはや彼女から生きてある色さえ奪った。壬生にはそう見えた。タオは生きてさえいなかった。タオは白いパーティドレスを着ていた。だから肌の殆どは剥き出された。慥かに匂うほどに女らしい女の、女のからだの女から女らしい女のからだだった。あるいは、壬生さえいまだ抱いたことのないような女じみた女だったに違いなかった。年の比はすでに三十を大きく超えて、もはや四十にさえ近い筈で、ふきこぼれるように（——ひかりは）

と

たぎりたつように（——ひかりは）

と、まばたきさえせず

ほとばしり（——そそいだひかりはすでに）

と、まばたきさえわすれて

たばしって（つちのなかで）

と、タオは

ふきだし、ふきとび、ふきみだれたかのように（——ふかいねむりに）

と、ひとりで

わたしをてらした、...と、(——ふかすぎたねむりにかなしみをさえ)

と、

わたしをだけを...と、(——かなしみさえわすれ)

...朽ちる。と。壬生はひとりでそう思った。だれにもふれられずに。それどころか軽蔑され。忌避されて。もっとも美しい造形のひとつ、あるいは造化の奇跡的なかたちでさえあったものが、だれにも捨て置かれただ生き延びさせられただけして...と。壬生は思った。日差しの中でその肌も衰えはすでに容赦の無い光が隠した。夕方はまさに輝かしかった。膨らみかけて見え、ふくらみをそのまゝさらす無防備な腹にだけ、そこにだけ、老いさらばえかけた肉体の老いが老いとしてひたすらにへばりついたかのように、そしてかくて偲を以て頌して曰く

雨の中で

あなたは知らなければならない

やがてふる雨の中でも

せめてわたしの爲だけに

花はその色彩をわすれるだろう

わたしだけの爲だけにでも

そしてもうすでに

あなたは私の残酷のすべてを

だれかにわすれられてしまったように

わたしはまさに侮辱だった

あしたにも

あなたの骨髓の匂いさえもが侮辱された

それをだれかがわすれたことさえ

わたしはまさに殴打の拳として

わすれさってしまったように

あなな指を降り背中を折った

かわきはじめた土が匂う

噛み千切った

朝、もう雨はふったのだから

あなたの軟骨のすべてと

雨の中で

心のあわい

やがてふる雨の中でも

せめてあしたに期待した心のあわい

花はその色彩をわすれるだろう

毀した。まさに

そしてもうすでに

私はまさに容赦もなくに泥水の

かくに聞きゝかくて壬生焦り焦燥するといふでもなくて飽和シ飽和するいうでもなく

テ焦燥シ飽和シする儘にタオを捨てゝすて置きタオをその雲の切れて拡がりたる間に墜ちて落ち拡がりたる光のうちに放置シかくてすれ違へル居間にコイを捨てゝすて置きコイを喰ひあうしたるテーブルの上の果汁ノ飛沫ノちりたる水滴ノ匂い立つなかに放置シすゐてきはそノ咀嚼シすスリあげたる音のうちにもすゐてきは放置シ外に出てバイクにすゐてきは乗りたりき壬生すゐてきは

やがて

わづからにふるゑながらに

みづからの焦燥ノ飽和したる飽和ノ焦燥ヲ心の片方にたゞ鮮明にも感じ觀じてすゐてきはあざ笑ふ聲ヲ聞きゝかくて迦久也又すゐてきは壬生雨あがりテすでに時経りたる周囲ノすゐてきは乾きかけたる又壬生すゐてきは雨まさにいつか降らんとしていまだすゐてきは時雨ふらさずすゐてきは堪えたりけるすゐてきは湿りけの潤いにすゐてきは

やがて

ひそかにふるゑながらに

肌に阿沙夜迦那留濡れた気配に曝されてバイクの上に後ろに棄テられて捨てられ去り去りて行き行きテうち棄テられる音又音ゝまた風かくにすゐてきは風とのみ觀じながらにすゐてきは風もナきにすゐてきはたゞ自らがハシリタルが故にのミすゐてきは停滞の大氣を風なしむすゐてきは速度に煽ラれすゐてきは走りきすゐてきは

やがて

途中クアン・ナムとダナンを分けたるあたりに壬生みづからのゴック・アインが許ヲこそ詣でんとしたるに氣付きすゐてきは是に納得シすゐてきは之を良シとしすゐてきは壬生は見きすゐてきは

やがて

わたしの（——あなたの）

ほゝをさへも

町外れに旧態依然たる田舎町ひろゲたりテ封鎖されタればすでに人影もなきを壬生は見キ町隔離されたるといひながらに大通りのクアン・ナムとダナンが境界ナルに殊更に検問等あることなかりけるを壬生は見キ見て見上ぐるまでもなくて眼差シの先に自然見えたる空白濁に白の色彩さまざまなるをさらシかくてところどころに曝ス切れ目に光りノ筋墜ちて落つを壬生はかくて驪而クアン・ナムが酪農地帯に入りて時に放シ飼はれたる牛ノ一頭又は牛らノむれ横目に乃至彼等の視野に謂う片側のまさに正面に正面立ちて壬生を見たりけるを見て壬生ハ又農村地帯に土ノ道に周囲ナル田園の遠く拡がりたるに物音せざりけるヲ見て森林地帯に入りテいまさらに林なス樹と木又樹ゝと木ゝそノ葉と葉と枝又葉と葉ゝと枝ゝと枝ソの色又色ノそ乃曾禮曾禮乃繁茂又かたち又かたちそ乃曾禮曾禮乃繁茂又色のかたちのかさなりかさなりあひたる又かさなりかさなりあはざりき切れ目に光りは洩れてひかりは降り飛迦利波漏れて飛迦利落ちたり光乃光りそのそれぞれの色これら壬生は見テ見るともなクに見テ觀ミ過ぎゝテ壬生かくて林なす樹木の翳り乃したに翳り又そノ周圍にだけ空ノ白濁を切り開きたるゴック・アインが家ノ庭に行きて辿り着きてクラクションならすともなくに勝手に家屋開け放たれたる開き戸の開きたる儘に入りき家屋の翳りに入りて壬生の目一瞬のミ暗ミ眩ム須臾のあとに壬生そこなる居間ノ広大にゴック・アインそのひとノある気配ダにもなきヲ見て觀をはりもせず焦燥

スるかにも彼れ顧ミたる左手が壁に殊更に翳りたるに開け放たれたる儘なる寢室がドアを久偶利岐明ルさに壬生が目まさにイマサラにも暗ミ眩ミをハリもせヌに二面窓なるらき光ノ洪水なす刹那がうち中央に捨て置かれたる寢台が上に臥シて捨て置かれてうたゝ寢シをれるゴック・アインが宇都布世乃背中の日乃曇り乃やハラかきに照りたる白らム色を見テひとり歓喜せりかくて頷シて

あなたに話そう。

偷み見るように

まさにあなたの爲に話そう。

だから、わたしは

逢わなければならないのは、あの穢い裏切り者のゴック・アインに違いないと思った。

わたしはひとりで眠る彼を

わたしはひとりで、それを（想い付きを？）まさに確信として確信し

彼を見ていた。その

あの略奪者のゴック・アイン。

眠った意識の中で

かならずしもレ・ダン・リーを求めて

多分意識の尽きた肉体の中で

真摯に求めて焦がれた譯でも無くに

あるいは自分がいまだにまさに一人で

彼女を連れ込んでここに股を広げさせた。あの

ひとりで自分で眠っているのだと

一年前に、その少女が未だ

思い込んでいる筈のゴック・アインの

あの弑逆者のゴック・アイン。

その肉体を

多くの女たちに焦がれながらその思いのもろもろを

上半身を抱け曝した

ぶじょくするともなくにやさしい微笑の内にだけ捨て置き

ショートパンツだけの彼は

無間の絶望と悲嘆と思いたてもしない執着のうちに

あくまでも誘惑的なままに

いつでも、無数の女の女たちの、指さえふれられなかった女たちの

女性的にも見える、そのくせ

あの軽蔑のゴック・アイン。

あきらかに男の物でしかない男の

見る物のすべてを実は軽蔑しているに違いないと

肉体の骨格と

關わる人の目の目と目の目ゝと目ゝと目の目ゝの目ゝのそれぞれの目に

しなやかな筋肉の息遣いをさらした

彼をおこさないように近づいた。

わたしの目にだけ

おそらく、わたしは彼を襲おうとして。

彼に見蕩れた眼差しの中にだけ

彼をめ覚めさせめ醒めさせないように。

レ・ダン・リーはその時に

まちがいなく掠め取るように

夢を見ているようにも思ったに違いない

かれを掠め取り、彼の気付きもしないうちに

レ・ダン・リーはその時に

彼を、そして彼の横に足を忍ばせて、臆而嗅ぐのだった

残忍なかれに壊す爲だけに壊されながら

匂い。

彼の腕の中で

臭気。

レ・ダン・リーはその時に

あるいは彼を警戒するように傍らに息を忍ばせて、臆而嗅ぐのだった

彼にあくまでやさしく衣類を、その

悪臭。

おさない柄物の衣類を（…美しいドレスを）はぎ取って（…夢のドレスを着せるように）

獣の。

あくまでも幼い、いまだに幼い

雨の、——豪雨に濡れた獣の柔毛のような匂いを、その

彼女の

うつくしくなめらかな白い、（又は単に白くしかない、或いは

レ・ダン・リーはその時に

色彩の欠損にすぎなくも思えた白人のそれとはあきらかに差異する色のある、）その色彩。

正に夢を見ていると思ったに違いなかった

肌の色の美しさの上にさえ

レ・ダン・リーがタムにどんな風に打ち明けたのか

色の周囲にさえ

あるいは驕って？

色の傍ら

あるいは心の歓喜に昂る儘に？

色の下

ダン・ティ・タムに告白したのかは知らない

色ふすてられた翳りのすみにさえも匂うそれ。

レ・ヴァン・クアンは何も教えてくれなかった

悪臭。

憤った娘の父親は

獣の。

レ・ハンと、そしてわたしにも裏切られた

雨の、——豪雨に濡れた獣の柔毛のような匂いを、その匂いをわたしは嗅いで鼻はその奥にひとりで歓喜した。

死んだ男は

彼の背中にわたしの、身をかがませた唇がふれたときに、(すでに) 知った。

初めて逢った時、ゴック・アインはこの家の居間で

私は(すでに彼は) 彼がいままさに(すでに)

アポイントもなく乗り込んだクアンの

目を覚ましたに違いない、その(かれはもう)

拳の殴打を赦した。むしろ

肌の産毛をふるわせた(め覚めていたのだった。ひとりで) 息吹きを。

やさしい慈愛のまなざしにクアンを

覚醒の、(寝たふりなどした) しずかな(そんな気もなく) あきらかな気配を。
(彼は)

その昂りすぎた怒りをむしろ

唇を奪うよりも早く、壬生は寧ろ彼の爲にだけ殊更に擬態した自分の昂った焦燥の昂りに、いつか飲み込まれてその顔の色をさえ奪われながら壬生は猛り狂ってゴック・アインを仰向かせた。雨の今まさにふり始めようとする寸前の、飽く迄雨上がりの空は投げて光を、光は歎くしかないほどにやさしく、嘘のようにやさしく、愚弄しいたぶるようにもやさしく、愚弄しいたぶって気にもかけない儘にやさしく、知りもしない、いまだ出会いもしなかった他人のようにやさしく、光はそしてやさしくゴック・アインの肌に触れた。壬生の目の前で。美しく臭いゴック・アインに肌に、彼の爲だけに貪欲を擬態し、その擬態に顔をさえ奪われて壬生は唇に彼の鳩尾を吸った。唇に彼の汗ばんだ肌の味を観じた。そして抗うまでもなくそれを愛した。汗にさえ彼の悪臭は匂った。その姿を思いだせばすぐに鼻は想いだす。雨に濡れた野生の獣の穢れた柔毛の匂い。ゴック・アインは彼の、めり込んだ一方的な愛撫を赦した。唇の先に舌に、壬生が彼のかたちを確認するともなく慥かめるのを、ゴック・アインは赦した。家畜のように、と。ゴック・アインはひとりで思った。だれでも、家畜のように愛する。自由な獣、野放しの獣も、家畜のように、そして家畜のように愛される、自由な鳥、野放しの鳥も、猪も孔雀も、雀も犀も、鰐も鹿も、鳩も猿も、家畜のように、そして家畜のように鮭も鷹も、白鷺も牛も、豚も雲雀も、家畜のように、そして家畜のようにみさゝぎもうづらも鳩も鶴もぬえも蝙蝠も人も、人と人も、人こそ生きて家畜のように、まさに家畜のように屈服し、屈服したことに気付くもしないで、屈服することなく屈服を敢えて擬態して、家畜のように、まるで家畜のように、と。壬生は目を閉じることさえもなく至近にゴック・アインの肌、肌のその色、色のその産毛、うぶ毛のその触感、触感のその色、それら感じるものの総てを愛した。目に。目と唇に。唇と視覚に。視覚と鼻に。鼻と味覚に。味覚と舌に。やわらかい、そして齒にさえも。かくて偲を以て頌して曰く

——死んだんだ
激怒していた
誰が？（ゴック・アインはそう言って笑った）
彼は、その日のレ・ヴァン・クアンは
悪びれるふうでもなく、無邪気なままにその、無邪気なゴック・アインは
初めて彼が見せた忿怒に
——誰が？
私は心の中でだけ失笑した
私は笑う。聲を
まるで彼の真摯な激怒は
むしろ愛すべき彼の爲にだけ聲を立てて
彼の骨の骨髓の細胞まで浸し切った怒りと憎悪は
——レ・ダン・リーの...
あきらかに作り物じみてむしろ
誰？ それ。（ゴック・アインはそう言って笑った）
ただただ陳腐に想えた
素直に恠しんで、無邪気なまでに素直に、素直なゴック・アインは
眼差しは彼を、そして
——誰？ それ（知り会い？）
彼の娘を案じた
——その人、...（知りあい？...俺たちの、
その日彼が連れて居なかった娘を
——知り会い？）...誰だっけ？
レ・ハンは自分のかたちどるべき顔のかたちを知らなかった
私の指が彼の唇を這う
ただ私の傍らで目を翳らせた
その理不尽な美しさをせめて咎めようとした様に
まるで他人事のように
そのうつくしさとやわらかさと、そしてかすかな
あるいは、たしかに他人でしかない他人の身の不始末に
それでいてあきらかな暴力紛いの強靱さを感じ慈しみながら
犯罪じみた、... 事実犯罪の
——レ・ダン・リーの父親...
その男、ゴック・アインの与えた醜聞に
——誰？ それ
激怒したレ・ヴァン・クアンは罵った
——レ・ヴァン・クアンが今日、死んだ
ゴック・アインを寝室の
——だから、その人...
彼の知らない美しい男から引きはがして

——けさ、たった今...ちがうな
そのなよついた男は嘲笑した美しい男を指さした
——俺は、その人たちを
レ・ヴァン・クアンになぐられた頬を捨て置いて
——三時間？ 四時間前？...に
罵り辞めないクアンの聲から逃げ廻りながら
——知らないよね？
ゴック・アインはベッドの上で胡坐をかいて
——あなたが壊した女
ほこるともなくその全裸さらした
誰が？（ゴック・アインはそして）
わたしの爲に（わたしだけの爲に）
私は（ひとりで不審がる）笑う。聲を（まさに素直に）
なよついた男に（かれの爲だけに）
むしろ（なんの嘘も）愛すべき彼の爲にだけ（欠片さえも嘘など）聲を立てて
レ・ヴァン・クアンの爲に（彼だけの...）
——一年前に、...覚えてない？
匂うような肌に、まさに匂う悪臭に
——いつ？
彼が振り返ったクアンを居間に導くのをわたしは見た
——俺と、その時はじめて会った、
わたしたちは
——俺は、初めてあなたに逢った
わたしとクアンと、彼が抱いていた男は
——どしゃぶりの雨の
微笑んだ彼の赤裸々なうつくしさを見た
——雨が上がった一瞬に、来たんだよ
クアンも
——嘘？ どしゃぶりで
改めて憎み
——來るとき、來る時は
彼を憎しみながら
——外、もう、うるさいくらい...
話す気はなかった
——あの時、外は降って無かった。だから
すくなくともゴック・アインには
——雨の音で、聞こえないんだ、みんな
まかせた、クアンが
——濡れなかった。俺も
彼を一度殴るのに

——彼だけ、興奮したてたね。だから
その側頭部を
——レ・ヴァン・クアンも、あの時
微笑に、哀れむような色を匂わせ
——聞こえないんだ。だれも
まかせた、クアンが
——クアンのバイクの後ろで
その左の二の腕を殴るのに
——あなたの聲も、その時に
微笑に、哀れむような色を濃くして
——歸りは土砂降りだった。だから
まかせた、クアンが
——耳を済ませたけど、...
右足に彼の鹿のような腿を蹴り上げる儘に
——クアンは濡れた。俺の後ろで
微笑に、哀れむような色に染め上げ
——もう、ぜんぜん。ぜんぜん何も...
ゴック・アインが罵り続けたクアンに
——必死に俺にしがみついて。あなたが、クアンの
そして降伏するかのように両手を挙げて見せた時
——あなたは俺を愛したね？
振り下ろされた両腕はクアンを飲み込んだ
——指をへし折ったから
殴る、むしろ
目を閉じた
やわらかいところを
彼の方に
腹を、背中、或いは側頭部
ゴック・アインの顔の方に顔を向けた儘に
蹴った
さすがに彼の腹部に乗りかかりながら
自分が傷つかないように賢しく
目を閉じた
彼が最も傷つきやすいところ
指に感じた
鼻、口と顔面
その手触りを
羽交い絞めしにた首を臂に撃つ
唇の
壊れきらないように

鼻の
決して
意外なそのおうとつの不意の急激を
彼の肉体が深刻な
顎を
本当の損傷を追わない程度に
傲慢なまでのその固さを
ずる賢い
不遜な形態を
聡明な獣じみて
かすかな髯のはえかけの、ほんのわずかな
あくまでも臆病に
同性の息吹きを
自分の肉体には
ささやく
骨格には
死んだの？
決して傷など負わないように
彼の唇が、そして
眼差しに白熱の色があった
死んだの？
酔いしれたような
あの人...(死んだよ)...そう
事実彼は我を忘れていたに違いなかった
いつ?...今朝...云ったじゃない(聞いたよ)
賢しなままに
聞いたけど...(朝?)今朝、...今日の
失神したクアンを更に傷めようとした彼に
朝。...俺を、——殴ったね、彼は(あなたを、...)彼は
私は云った、思わずに
死んだよ...そう...
死ぬぞ
なんで?(——コロナ?)まさか(はやりの、)
日本語で、彼が(振り上げられたかれの足が)
コロナ? 癌で...そう...
仰向けのクアンの顔面を踵に狙っていたから
あなたが、小指を折った...失神した彼の...
お前、殺すぞ...
死んだの?...あの子は?
その時ゴック・アインは我に返った

あの子？（...だれだっけ）穢い子...

云った、...彼は

あの子、...俺の事、好きだったよ、——知ってる

あれ？

だって、誰だって、...あの子...

日本人？

可哀想だね...死んだの？...いつ？

彼の、馴れた綺麗な日本語で

かくに聞きゝ壬生かくてゴック・アインが傍らに寝台に背預けて坐しきゴック・アイン
かくて壬生の傍ら寝台に横たわりたる儘身もたげて彼の髪を撫でき壬生背後にゴック・
アインが体臭嗅ぎ鼻に悪臭未ダ馴れず馴染まズ又壬生背後にゴック・アインが裸身息ヅ
きたるを感じてかくてみづからの目を閉じき壬生仍て気配にのみゴック・アインが在る
肉軀の息吹き又そ乃心ノ息吹く息吹き觀じて感じきかくて頌して

あなたに話そう。

——どう思う？

まさにあなたの爲に話そう。

——どうって？

私は云った。

——あなたは どう思う？

誰に？

——何を？

ゴック・アインに。

——今度のコロナ、何人死ぬかな？

彼しかそこに居なかったから。

——ベトナムの？

ゴック・アインの爲に？

——この

かならずしも彼にまさに告げたかった譯ではなくて。

——前より、三月と四月より

だから私は想うのだった。

——多いみたい。...

自分が実は嘘をついているようにも。

——前は死ななかつたね

彼をなぐさみものにし、むしろ

——ほかの国、いっぱい死んだけど...

彼をないがしろにし、むしろ

——なんでだろ？

彼のまさに彼が彼である事実をなきものにし、或いは

——今度は、ひとり、...もう、ひとり死んだんじゃない？

彼をまさにそこにいなかったかのようにして、むしろ

——なんでだろ？
彼を目隠しゝたまゝにし、例えば
——なんで、だれも死ななかつたんだろ？
顔を焼き彼の彼であつた意味をはぎ取り
——悪い薬、いつも一杯飲んでるから...
生き生きしたままに、例えば
——暑いから
目隠しし、後ろ手にしばりあげて、そして最早
——なんだっけ、体質？
誰でもなくなった彼を
——今度は死にそう
まさに彼がゴック・アインその人だったと知りながら
——そうなの？
彼が誰であつたのかもわすれたところ擬態して、そして
——たぶん...
だから最早名前さえ奪われたゴック・アインを侮辱の内に
——あなたは？
独善的な愚弄と
——だれ？
理不尽な凌辱と
——死ぬの？
聲の、そのやさしい色の儘に
——あなたも、死ぬの？
無慈悲な迄の嘲弄と
——日本、いっぱい、増えたね...
聲の、その慰めるような気配のうちに
——信じられない。
肌にひざしが、それでもふれていたのは知っていた。
——日本、アジアで...
聞いた。
——中国とか、ベトナムとか、...
時に背後に彼の鼻に
——ここらへんで、
聞き取れ無い程の微弱の
——中華圏？
隠そうとした譯でも無い
——カンボジア、...ラオス、
息遣いの音が
——どこらへん？
私は想う。まさに

——一番死んだね、... 日本。
わたしは事実として彼に嘘を
——いちばん、...
あり得もしない嘘を語る、と
——なんで？
ただ
——あなたは？
素直に言葉を漏らす須臾のわずかな一瞬の
——俺？
一音にすらならない音声の
——あなたは、死にの？
揺らぎさえも
——今回のコロナで、あなたは。
そうささやいて、たくらむように笑ったゴック・アインを
——不思議なんだ。
わたしは振り返った。いまだに
——自分は...
かたくななまでに目を閉じたままに。嗅いだ。
——自分だけは生き残ってる
彼の肌の悪臭を。
——そして間違いじゃない
忘れることさえできない、その
——今、そう思うということは、
鼻をつくひどい匂い。笑うしかない
——事実、すくなくとも自分だけは生き残ってるということだから
笑うさえできない
——不思議なんだ
冷たく嘲笑されたような匂い、例えば
——でも、その確信は
彼を愛する心の真実を
——結局は根拠もない狂気... まさに
血も涙もなく、罵倒する誠意さえもなく
——俺たちはくるってるんだよ
一瞥の内に軽蔑され捨て置かれたような
——そう思わない？... だって
彼の
——あなたも自分は死なないと思ってる
獣のような？
——すくなくとも
獣の柔毛のような？

——心のどこかでは顯らかに
降りしきる雨をあびた後の

——...じゃない？

ゴック・アインのさゝやいた儘に任せた。彼の聲の言う儘に、「...脱いで。」立ち上がった壬生は衣服を「...ね、恥ずかしがらないで」脱ぎ、脱ぎ捨て、...見ないで。と「...自分に嘘をついて」そうさゝやき「必死に、」笑いかけたゴック・アインの「...必死に、恥ずかしがってる、その心に」聲の命じた儘に、...俺を。「...心にあくまでも嘘をついたまゝで」見ないで...俺を。と「...見せて」その聲に壬生は「...嘘をついて」かたくなゝまでに目を閉じたまゝに「...まるではじめて」足元に棄て置かれた布地は「...はじめて自分が俺に」撥ねただろうか？「...ね？」音もなく「...俺にはじめて見せるように」足元に、たとえば「...そんなふうに、恥じらいながら」床を這う蜥蜴の聴覚にだけ「...羞じらいながら服を脱いで」聞き取られた音響を「...そして見せて」壬生の耳にも「...俺にだけ見せて」ゴック・アインの耳にも「...恥ずかしがらないで」決して聞き取らせはし無い儘に「...そんなふうに嘘を」肌をさらした。壬生は「嘘を自分に着き通して」ゴック・アインの眼差しの「...恥ずかしい？」おそらくは自分をだけ見ていると「...もっと見せて」そうに違いないと仮構された「...嘘をついて」眼差しの温度の前で「...自分が恥ずかしくないと」笑う。壬生のその「...見せて」笑んだ聲もない表情を「...もっとよく」彼は「...俺にだけ見せて」ゴック・アインは「...嘘だらけのあなたの裸を」見ていたに違いないとかくて偲を以て頷して曰く

指を折ったのはあなただよ

わたしたちは誰でも知る

ゴック・アインがささやく

誰かの前に

失神した彼の

誰もいない自分の前にだけ

...と

素肌をさらした時でも

もう意識のない彼の

わたしたちは知る

...と

素肌を誰かに曝した時には

彼がすでに失神したことを

光には手触りが

...と、ゴック・アインがささやく

肌にふれるそれ

あなたはちゃんと確認して

光には手触りが在ることを

...と

影にすら

彼にすでに意識がないことを

影にさえも手触りが
...と
みずからの臉に
あなたは抜け目なく確認して
目隠しをした肌の
...と、ゴック・アインがささやいて
冴えた知覚の
俺を見上げてかすかに
孤絶のうちには
...と
秘密だった
ほんのちょっとだけ
彼と私が逢ってる事実は
...と
誰も赦さなかったに違いなかった
唇の端にほほ笑みながら
凌辱者ゴック・アインと
...と、ゴック・アインがささやく
凌辱の強姦者ゴック・アインと
覗き込むようにして彼の
親密に睦み合うことは
...と
秘密だった。たぶん
左の小指を反対側に
知れば誰もが罵るから
...と
秘密だった。間違いなく
へし折ったのはあなただよ
知れば誰もが怒り狂い
...と、ゴック・アインがささやき
そしてゴック・アインごと
まるで俺を諫めるように
わたしを軽蔑するに違いなかった
...と
秘密にした気はなかった
その獣のような振る舞いを
まして
...と
まして嘘など
まるで俺を軽蔑したように

わたしは誰にも言わなかった
...と、ゴック・アインがそうささやいた後で
言う必要もなかった
その赤裸々な熱狂を
誰もわたしに問わなかったから
...と

ゴック・アインの口蓋の質感について
誰もがもう、興奮から醒めた
その肛門の構造について
...と、そして
その心の
静けさの中に、ただそれだけ
ゴック・アインの辛辣なほどの
...と、ゴック・アインがささやく
やさしさについて
おさまらない儘だった雨の轟音のうちに
或はまるで偽善者のように
...と、或いは

まさにわたしは嘘つきの偽善者のように

かくに聞きゝかくて壬生感じき目を閉じたる暗がりノ光ノ朧ノ朱ノ明滅にゴック・アインのからだの上半身だけみづからに近づけらるゝを又感じき目を閉じたる暗がりノ光の朧ノ朱ノ明滅にゴック・アインの至近ノ鼻に笑へるにも観じられたる息の亂れたるのかすかにふるゝを又感じき目を閉じたる暗がりの光ノ朧ノ朱の明滅にゴック・アインが眼差しのまさに壬生みづからの脛を至近に睫毛に至るまデも見て観つめをりけるを又感じき目を閉じたる暗がりの光の朧ノ朱のノ滅に臆而于時壬生みづからの唇にまさにゴック・アインが唇のノふれて唇に迦サ那琉唇の触感メ覺て冴ゑて玉散ルほどに洩へて覺メ醒メる登母那ク爾壬生まさにそのふるゝ唇の肌触りに埋没するみづからを又壬生まさにそのふるゝ肌の立てたるかの悪臭の赤裸ゝに埋没する美豆迦良乎かくて頌シて

あなたに話そう。
まさにあなたの爲に話そう。
ゴック・アインはささやいた。
——知ってる？
だからささやきかえす。私は
——言って。
ゴック・アインの爲に。だから
——教えて。
おそらく彼は微笑んで、だから
——あなたは、なにを今、話したいの？
ゴック・アインはささやいた。
——知ってる？

おれたちは今、みんなまるで嘘のような世界に生きてる
知ってる？

新型コロナで最初の波が来た時には
みんなの命をまもる爲に閉じこめるのが正義だった
あくまでも理性的な、それがまさに正義だった。

今は誰もが外に出ることをよしとする。
理性的な誰もが外に出て、経済を復興させることを...

まだ、はるかに多くの患者を出しながら
理性的な誰もがコロナを過剰に恐れない事を...

まだ、時にはむかしより多くの患者を出しながら
誰も気づかない

三月四月が理性だったなら、今の六月七月は全部狂気だ
六月七月が理性だったなら、嘗ての三月四月は全部狂気だった
誰もその滑稽さに気付かない

知ってる？

ほんとうに世界は、僕たちを含めたみんなは、実は理性の欠片も無い狂った人
だったんだよ

ほんとうに世界は、僕たちを含めたみんなは、実は知性の欠片も無い狂気の人
だったんだよ

疾患として狂気では無くて
症状として狂気では無くて
まさにただ狂ったひたすらな狂気の人たちだったんだよ

俺は言う、あなたに
あなたにささやく

聞かないで
俺の言うことを聞かないで
俺の言葉はすべて狂った言葉だから

俺は言う、あなたに
あなたにそっと耳打ちする

聞きとらないで
誰の言うことも聞きとらないで

いつかのあなた自身の独白さえも
その言葉はすべて狂った言葉だから

わたしは思わずに笑う。

知っていた。

それが寧ろゴック・アインを嘲弄したに似た響きを持った不意の事実の存在には。
ささやく。

ゴック・アインに添うように。

その聲に似せたように囁き、

——爲すべきふたつのものがあってそれが共存不能な時

人はだれもがどっちつかずに墮すか、交互に、まるでバランスを取ったように
擬態して

出鱈目なこじつけを当然の内にさらす。ただ、
そんな出鱈目に明け暮れただけなんだよ、だから
ぜんぶ何もかも茶番なんだよ。だから、その、それら悲劇的な死さえも
出鱈目な喜劇の更に幕間の道化劇にすぎなかったんだよ、だから
いまだにおよんで僕らは見なかった。一瞬の悲劇さえ。その
もっともな深刻な一瞬にさえ、僕らはいちども
幕間の道化劇をしか見なかった。

ゴック・アインは慰めるようにささやく。

軽蔑をいつものように、彼に想われさえしなかった軽蔑をあざやかにさらして
彼は私に、——わたしの爲に？

自分の爲に？

あるいはほかの誰かの爲に？

誰の爲にでもなくて

私にだけそっとささやいたかのように彼はささやき、
——そうやっていつも、そうやって

僕らは隠した。僕らの狂気を。そうやって

僕らは思い思いに見えていた、明らかな狂気のあからさまな赤裸々を、そうやっ

て

かくした。そうやって

彼は聞いた。そして私が

或は彼の爲だけにささやいた聲を、だからささやき

——僕は知っていた。すでに

ぼくらの嘆かわしい程の驚くべき平板さを

信じられないほどの簡単さ

莫迦馬鹿しいほどの明解さ

ぼくらのわらうしかない渾沌のわらうしかない容易さを

ぼくらに一度も謎はなかった

ぼくらはすでに失っていた。いかなる不確かさも

不確かな故の神秘性も

僕らは聞き取れる言葉をしか語らない

驚くべきものなどなにもない

すべては知り尽くされた

すべては生きられ盡し

ぼくらはもう何も生み出さないだろう

ぼくらはすでに滅びていた

だからいつか、遂に投げ捨てるように滅ぼすだろう

せめてぼくらを貴ぶ爲に

ふれる。頬に、

その、私の頬にふれたゴック・アインの息遣いが私をいつか恍惚とさせる。
いつものように。
くすぐるように。
その悪臭のうちに。
云った。
だから、——と。
かならずしもそんな理由さえも無くて。
ただ唇だけが静かに、誰にも気づかれないように音を吐いた、
そんな風に
——こんなアイデアがある
——どんな？
ゴック・アインはいつでも、誰をも、そしてそんな自分をさえも
自分をさえも巻き添えにして
むしろ軽蔑しきったような色を散らす
彼がものを話すときには
たとえ、彼がその人を心から敬愛するときにも
どんな？...と
その一言の、彼の唇のわずか先に踊った
空気のささいな揺らぎにも
——こんなアイデアがある
——話したいの？
ゴック・アインはいつでも、誰をも、そしてそんな自分をさえも
自分をさえも巻き添えにして
顯らかに嘲弄しきったような匂いを撒く
彼が誰かに話すときには
自分に話しかけた心の内にも？
たとえ、彼がその人への焦がれた戀に
あざやかに裏れた自分を見たときにも
話したいの？...と
その一言の、彼の唇のわずか先に踊った
空気のささいな揺らぎにも
——こんなアイデア、俺、...
——話せばいい
——家、でるかも
——あなたは、あなたが
——家、あの家
——まさにあなたが話したい儘に
——その家捨てて、それから
——まるで独裁者のように
——たとえばあなたの家に

——誰にとっても理不尽な
——ひとりで転がり込んで
——彼にとってだけ飽く迄論理的で
——そしてふたりで
——そして倫理的な
——あなたと暮らすかも
——随うだれも居なかった孤独な
——どう？
——ひとりだけの独裁者のように
——むしろ、誰も見たことのない風景を見ようよ
——あなたの望む儘に
——俺たちだけで、そのくせ
——好き放題に
——或いは誰かが
——誰かが？
——そう、誰かが
——好き勝手に
——そして誰もがすでに
——話すがいい。あなたの
——すでに見た風景の中で
——望み、話したがった儘に
——その恐ろしい程の
——賢者のように
——怖くなるほどの
——まるで賢者のように
——誰も見たないことのない風景の
——自分こそは見た、と
——赤裸々な色彩に
——まさにことごとくの眼差しの
——目舞いさえする俺たちふたりを擬態して
——実はすでに誰も見ていた
——行き場所のない
——そんな風景のことごとくを
——道の果てだと擬態しよう
——まさに自分だけは見たと
——まさに、ここ
——思いあがった賢者のように
——ここがまさに
——問いかけて
——すでにすべての

——どこにも返る言葉を得ない
——道がすでに果てた
——岩窟の暗がりに
——果ての涯でだと
——ひとりで発狂した
——そんな風に擬態した
——孤独な賢者のように
——風景の真実に目を
——むしろ、その
——目を見開いて
——賢者がみずから抉り取った
——世界中は俺たちを棄てた
——眼球の空洞のように
——なぜなら俺たちが、まさに
——賢者がみずから切り落とした
——俺たちが捨てて仕舞ったから
——性器の萎えるはずの場所の今の不在のように
——さようなら
——あるいは賢者が身を投げた岩窟の崖に
——さようなら世界、と
——その
——俺たちだけで
——取り残された崖の磐に
——俺たちふたりで擬態しよう
——すでにない、あるべきだったものゝ不在のように

ゴック・アインはそしてさゝやいた。いまだ目をひらかない儘に壬生を眼の前に、曇りの日のたゞやわからかにしかならない日差しの横殴りの中に立たせて、そして、（目を、）あなたは自分でするんだよ。そう（目を閉じたまゝで、）さゝやき、彼は、自分で。…と、例えば俺に愛された、あくまでも自分を（——じぶんだけを、）思いながら。あえて、（——かんがえないで）俺のからだなど、俺のことなど、そもそも（あなたのにくたいいがいいは、）俺がこの世界の中にあなたを愛して、そして（——かんがえないで）あなたに愛されて存在してまさに、今まさに（——じぶんだけを、）あなたをだけ（——…ね？）見つめて生きていることをなど（——もう、それいがいいは）忘れて、と「…できないよ。」壬生は云った。すでにゴック・アインの言葉のやさしい色に微笑みさえしながら自分で、彼の目の前に彼の言ったとおりに従いながら。飽く迄も、（——聞いて。）心の内にまでも。そして壬生は聞いた。それ（——なにが聞こえる？）その時に、ゴック・アインがさゝやいた言葉。彼が（なにが）壬生を彼の眼の前だけに、曇りの日の潤いのうちにも乾き（なにを聞いた？）渇きの内にも潤った遠い水浸しの気配をだけさらしたその日差しの（嘘をつかないで）横殴りの中に放置して、そして、あなたは軽蔑しなければならない。そうさゝき、彼は（ぼくを感じないで）自分を。まさにあなたは穢い家畜以下の存

在に過ぎないから。まさに（——ぼくを感じないで）他の誰もおなじように。あなたが軽蔑し、愚弄する、その（——ぼくに気づかないで）目に映ったすべてのことごとくと同じく、まさにあなたは（——ぼくはふれた）下等な家畜以下の家畜だから。あなたは（——ゆびさきで）軽蔑し、あざやかに（——ゆびさきだけで）軽蔑し、自分のことごとくを（——を感じないで）軽蔑しなければならない。感じる？（ぼくを感じないで）見えた？（——ぼくを、）その目を閉じたまゝの眼差しの中に、あざやかに（——ふれた）見える？ あなたは（——ぼくのゆびさきは）穢い。その鼻こそは。わたしの（そのみぞおちに）体の匂いを貪る家畜の鼻は。あまりにも穢く、そして（——みぞおちのくぼみに）吐き気さえしない。見える？（——ふれた）あなたは穢い。その唇こそは。わたしの（息をしないで）肌をしゃぶりつくそうとしている、飢えた（——ね、）家畜の唇は。あまりにも穢く、吐き気さえしない。見える？ あなたは（——もう、）穢い。その（もうこきゅうさえしなくていいよ。）齒こそは。わたしを咬みつこうとしているみだらな（——を感じないで）家畜の齒は。あまりにも（ぼくを）穢く、吐き気さえしない。見える？（ぼくだけを）あなたは穢い。その（——ぼくだけはを感じないで）舌こそは。わたしに餓えた、飢える事しか知らない貪婪の（——ふれた）家畜の舌は。あまりにも（——そのいきづいた）穢く、吐き気さえしない。見える？（——ふっきんのすじに、）あなたは穢い。その（——ふれる）肌こそは。わたしを思ってたゝらせた汗も、その（——かすかで、あきらかな）匂いも、それら（…彎曲。）家畜の息吹きは。あまりにも穢く、吐き気さえしない。見える？ あなたは（——ふれた）穢い。その鼻こそは。わたしを求めたその（——くぼむ。）骨格の、愚かしい化け物じみた（いきなりのくぼみ。）奇怪な異形の不細工ぶりを（感じる？）あなたは（——ね？）知らないのか？ その家畜の（その、あからさまな）骨格は。あまりにも（おへそのかんぼつ。）穢く、吐き気さえしない。見える？ あなたは穢い。その（しってる？）筋肉も脂肪も。わたしのそれらをすゝり上げたいんだろう？ 餓えるしかない家畜の貪婪は。死んで（ぼくを感じないで）腐敗してさえ穢く、生きて（ぼくを、）生き生きとしてまさにあまりにも（——ぼくを感じないで）穢く、吐き気さえしない。見える？ あなたは（——しってた？）穢い。その生殖器こそは。わたしを本能のまゝに（——宇都克斯伊）貪りそこにお前だけの魂の（——しってた？）高貴を（——ね、）擬態する。知ってるか？ あなたのその（——麻沙爾宇都久シ伊）かたちは、そしてそもそもの繁殖の（——感じた？）仕組みのことごとく自体が（——しってた？）家畜以下の莫迦げた愚昧以外の無いものでもない。あまりにも（——わかった？）穢く、吐き気さえしない。見える？（——ばれた？）あなたは（——阿那タ波）穢い。その（——宇都ク志伊。麻沙爾）神経こそは。わたしを感じる爲だけに鋭敏になった冴えて張りつめた家畜の神経は。いつでも（——麻沙爾阿那多ハ宇都久斯い）お前自身をだけ感じて（——しってる？）お前に噓せ返った。お前が愛したあるいは（——しってた？）ふれ或いは感じたすべてのものの爲に命を以て（——僕等波）償え。償い得る価値もない命で、（——僕良波麻サ爾）百千億の百千億乗の百千億倍までも。そして（——麻サ爾宇都久志久那ケ禮バ那良那い）その、あなたの脳そのものさえも、あまりにも（——しってた？）穢く、吐き気さえしない。見えた？ あなたは穢い。その目こそは。あまりにも（——僕ら者狂暴故）穢く、吐き気さえしない。だから（——故是）まさに、と。壬生は（——嫩シ久姚シ久美シ久麗シ久那計禮波）聞いた。ゴック・アインが、そしてひと際甲

高く笑ってそしてその聲に邪気はなくそしてあどけないほどに何の影さえなかったのを
壬生はひとり聞きそしてかくて偈を以て頌して曰く

ぼくは、見てあげる

...家畜

息さえひそめないで

...穢い家畜

それでもぼくは見てあげる

...糞まみれの穢い家畜、——と

ゴックアインはそう云った

俺の目の前で四つん這いになって

ささやくように

ひっくり返って

つぶやくように

目閉じた儘無理やりひっくり返って

ぼくは、いま、見てあげてるよ、と

そして仰向けに四つん這いになれ

かすかに、わすてしまいそうなほどに、彼はひとりであざらわうように

...家畜

かすかに、きおくさえできないくらいに、彼はひとりでいつくしむように

...俺の家畜

ぼくは、ずっと、見てあげてるよ、と

...俺を愛する爲だけ生まれた穢い家畜

なげくように

背骨ののけぞった

わたしの爲だけに歎き

背筋を伸ばし切った

ぼくは、...ね？ 見てあげてるよ、と

痙攣の四つん這いの仰向けの家畜は

なげくように

そのまま右足だけ上にあげて

じぶんの爲だけに歎き

腹につくほどに

ぼくは、しってる？ 見てあげてるよ、と

その汗まみれの震える腹につくまでに

なげくように

まっすぐに曲げないで挙げて

わたしとわたしには他人に過ぎなかったじぶんの爲だけに歎き

そして隠しようのないものすべてを曝しながら

ぼくは、いまでも見てあげてるよ、と

...家畜

なげくように
...穢い家畜
他人の、すべての爲だけに歎き
今君はのけぞったままで
ぼくは、ひとりで見てあげてるよ、と
その儘首だけ胸に着けなければならない
なげくように
崩れないように
じぶんの見た他人のすべての爲だけに歎き
崩れたら俺はあなたを捨てる
ぼくは、まばたきさえしないで、けなげなほどに見てあげてるよ、と
あなたが罵倒されたいなら讃えよう
なげくように
あなたが賛美を求めるなら屈辱を
他人の知るじぶん、それら眼差しの見た彼のすべての爲だけに歎き
どちらでもよければあなたを完全に忘れよう
ぼくは、見てあげてるよ、見ている事さえわすれて、と
口だけを開けろ
なげくように
出来るだけななめに
すべての、彼が感じ彼が見たすべての爲だけに歎き
できる以上に斜めに、そして
ぼくは、そして見つづけてあげてるよ、と
突き出した舌で自分の鼻を舐め続ければいい
なげくように
...家畜
すべての、彼が感じ彼が見たすべての爲だけに歎き
...永遠に穢い
ぼくは、身動きさえしない儘に見てあげてるよ、と
...うまれる前から
なげくように
...うまれる可能性のあった前から
すべての、彼が感じ彼が見る聴てのすべての爲だけに歎き
...すでに穢かった家畜
ぼくは、...聞こえる？ 僕の、——聞かないで、僕は、見てあげてるよ、と
あなたは左腕を上げて
なげくように
そして背中にまっすぐにのばさなければならない
すべての、彼が感じ彼が見なかったすべての爲だけに歎き
そのもはや全身で痙攣する筋肉の

ぼくは、あなたは知ってる、僕はまさに、ぼくは見てあげてるよ、と

絶望的な悲鳴じみた発熱だけを感じて

なげくように

尻の先にまでまっすぐのばし

すべての、彼が感じ彼が見ていたすべての爲だけに歎き

なににも触れない儘で

ぼくは、と

あなたは突き刺した自分の指に感じればいい

なげくように

まさにその内側の温度を

すべての、彼が感じ彼が見ているすべての爲だけに歎き

わたしのそれをだけ妄想しながら

あなたは？

垂れおちる涎を必死にすすり上げながら

かくに聞キゝかくて壬生目を開け開きたる眼差シにみづからのすでに覺めてあることに
気付キゝ壬生床の上に横たわりてうつぶせにその全裸を曝シ壬生いまや気付キゝ肌にま
さに床にふれたる肌の肌ゝそのさまざまに床の堅み又壬生気付キゝその冷みたる温度あ
りきかくて壬生の目に目の前に脱ぎ捨てられたるみづからの着衣さまざまにかさなり
て捨てられまたかさなるようにゴック・アインが衣服脱ぎすてらして散乱しをりき壬生
恠しみてその觀じたる恠しみをまさに恠しむ即ち何ぞ我れ恠しむるやと迦久也故に壬生
身を起こさんとして四肢に伸びたる筋の痛ミの拡がるに息を止めかくて彼うづくまる
マゝに痛みを觀ジ感じて壬生觀ジをはるともなくに気付きて即ち壬生ゴック・アインが
姿見あたらざりきことに壬生ハ気付キゝ壬生立ち上がりテ寢室にゴック・アインを探シ
き寢台にシート搔かしたルかに寢みだれたる氣配名残らたるのミなりてかの人あらざ
りき又窓そとに外彌雨降らさんとしてその翳り濃くシたダ暗く昏く　がりて冥き壬生ひ
とり思ひて是まさに雨降らなんと心に想ひて壬生寢室出づるに居間にもゴック・アイン
がすがた氣配さえなくてそれ三面窓の明るきに最早明るさ兆シさえもせずすでに日の
暮れて過ぎたるかにも感じらるがまでに外彌雨降らさんとしてその翳り濃くし于時ただ
暗く昏く　がりて冥き思いあぐねたる壬生思わずに目を伏せふたゝビ目を舉げテ目に窓
の外ノ暗き森林の翳りのミ見キ故に壬生思わずにふたたび目を伏せミたび目を挙げて目
に窓の外ノ暗き森林の翳りのみ見て觀る中に于時ゴック・アインの裸形の庭の隅に一人
立ちて上をのミ見上げて首のミ見上げ舉ゲテ身じろぎもせぬを見きかくて壬生ひそかに
ひとり心に歎喜シ笑ミてかくて頷シて

あなたに話そう。

覺えていた、わたしは

まさにあなたの爲に話そう。

その雨

明け開かれた儘のドアから出ようとするときには、すでに聞いた。

その降りしきった豪雨のなかでも

すでに、わたしの耳は湿気が地の表面の平板に、隠されたどこからかからか一氣

に盛り上がって、わたしをも

——いたい？

わたしをも含めたすべてを丸ごと飲み込んでしまった、と。

と、わたしの肉体をまさに苦しめ

そう思った須臾も無い刹那に、わたしの耳は聞いていた。すでに

まさに肉体をだけ苦しめ

空間の総てが轟音に満たされたのを、まるで、まさに

傷め、なぶり、いためつけて

空の行きどまりの表面から崩壊した破綻の音の集合の塊りのようにして

わたしには手もふれずに

下からも

わたしを痛みの無数の

上からも

無際限のうちに

墮ちてわたしをも含めたすべてを丸ごと飲み込んでしまった、と。

失神させたときに

そう思った雨の轟音を。大粒の叩きつける雨粒のあまりにちいさな巨大の巨大すぎる集合の無際限は最早

覺えていた

外に出た瞬間の私の素肌をずぶ濡れにしてしまう前にはまさに私を

その雨

海に遠く離れた田園地帯の先の森林地帯の真ん中で溺れさせ

豪雨の中にあってさえ

窒息の内にも溺死させようともくろむに思えて、たしかにそれは、

肉体を捻じ曲げたわたしは

風も無くまっすぐに落ちてくる豪雨は明らかに暴力の無慈悲な奔流に他ならず、
ゆゑに

指先の感じた温度の穢さを心から

わたしは聲をさえ立てられ無い儘に、ゆゑに

事実として他人のそれとして厭い

わたしは息をさえ水浸しになりながらろうじて吸い込み、ゆゑに

軽蔑し、まさに

わたしは振るえる唇と唇の中に震えた齒と齒ゝに咬みつかれた舌に痛みを、そして舌を震わせながら吐き、息を、ゆゑに

吐き気さえする汚穢として

わたしは明けられないないし明けきれない臉をかすかにだけ開き、あえて何かのかたちの残像だけは見たと擬態し、ゆゑに

ささやく、彼は

わたしは四方に手をのばして何かにせめてさわろうとし、ゆゑに

みみもとで、ききとれないほどの

わたしは四維に手をのばして何かのかたちをせめて確認しようとし、ゆゑに
微弱な、やさしい

わたしはよろめきながら、つまづきながら、あきらかに、鮮明に肉体が肉体の危機に瀕したことを知った、ゆゑに

——こわれて

わたしはころびかけながら、身を雨の中にひとりで折りまげながら、無様に、まさに無惨にも無様に、ゆゑに

——じぶんで。誰の手もかりずに

わたしは知った、たしかに私と私の肉体は、——精神は？ まさに危機を咬んでいた。そのゆゑに

——自分で。あなただけで自分の体を

わたしは知った、おそらく此の儘私は死んで仕舞うのに違いないと、そんな在り得ない妄想を事実を感じて、ゆゑに

——そして心まで

わたしは知った、この期に及んでなお私は確信してはいなかった。自分がいま、まさに死んで仕舞うと等は、ゆゑに

——壊れて。そして

わたしは知った、危機に瀕した肉体は、その機能は、だからまさに生きて居たのだった、ゆゑに

——見せて。僕にだけ、あなたが

わたしはゆびさきが誰かの肌に触れた時に、それを知ったわたしは

——自分でだけ壊れるのを

思った、するどく

知っていた。すでに

するどく叫ぶような一瞬として、ゆびさきが誰かのずぶ濡れの肌に触れた時に、それを知ったわたしは

肉体は、肉体に苦痛のある肉体の存在を。知っていた、

思った、するどく

肉体は、肉体に咬みついた苦痛に咬み、噛みつき

するどく叫ぶような一瞬として、ゆびさきが誰かの肌に散り玉散り散る飛沫に触れた時に、それを知ったわたしは

咀嚼し合う貪婪の苦痛の肉体に感じられた肉体の苦痛を、知っていた

思った、するどく

ささやくのを、彼が、耳もとで

するどく叫ぶような一瞬として、ゆびさきが誰かのやわらかな肌のつめたい硬直に触れた時に、それを知ったわたしは

やさしくついた嘘のようなあどけなさで、そっと

思った、するどく

——死んで。むしろ

するどく叫ぶような一瞬として、ゆびさきが誰かの肌の縦の洪水の中の筋肉の震

えに触れた時に、それを知ったわたしは

——生きた儘そこで、いま

思った、するどく

——いちばん屈辱的にひとりで

するどく叫ぶような一瞬として、それはまさにゴック・アインだと思った時には
すでに

——だれよりも悲惨に、自分で

わたしは抱いていた。彼に抱きしめられながら、私は彼を

——死んで。生きながら、そこで

抱き、羽交い絞めするようなその腕の中に抱きしめられた私はうでに

——我慢しないでいいよ。その

抱き、羽交い絞めにして肉体を

——耐えられずに溢れようとするものを

その骨格ごと打ちのめそうとした私は、かれの、その猛る高揚の、体温さえない
雨の

——引き攀げ、ただ痙攣する肉体に

雨の中の冷酷な殴打の中に、吸われて、貪るように、彼はすでに、殴り付けるよ
うに私は彼の唇を

——漏れだそうとするものさえも

奪い、何もかもが、まさに雨に

——失禁の匂いの中で

轟音に

——こわれて。ひとりで

縦の洪水に

——じぶんで、あなたは

濁流の色彩ない色のない瀑布の中に

——いま、こわれて

感じたそれら、まさに

——咬み切っちゃえ、その

私たちの生きた肉体の抱きしめ合った貪婪を、そして

——食み出した内臓じみた舌さえも

すでに醒めた、冴えた意識の目覚め続けて事実の内に

——飲み込んじゃえ

私は私の、ゴック・アインをも含めた愚劣さをはすでに知っていた。

——噛み千切って、そしてひとりで

所詮終日降り続く雨ではなかった。いわば通り雨、乃至叢がる周囲の茂った樹木にとっ
ては一秒にも盈たない悪戯じみた大気の変動はすぐに盡きた。泥だらけの足を壬生は泥
だらけの地の泥水に洗った。笑い、聲を立てて笑ったゴック・アインに、その素肌をさ
らした肉体の、ぬれて玉散る肌に戯れながら壬生は入り口近くのホースで水を浴びせた。
ゴック・アインに、そしてみずから飛沫を、水流をあび、頭から水浸しになりながら見上

げるともなく垣間見た一瞬の上空に、ゴック・アインは知った。空は、——その曇る雲のぶ厚い上空の白濁は、いまだに切れ目に墜とした光さえも見ない、と。慥かに、と、見ない、白濁はその身のかたわらにすり抜ける光の直線を、と、見ない、白濁の遠い、とてつもなく遠い背後にじかに横溢したその光の氾濫をは、と、見ない、そのうつむいた地上への眼差しの中には、と、壬生はまさに、濡れて匂いった土の臭気のなかに巻き込まれてそしてなおも濡れて匂うゴック・アインの肌の悪臭を嗅いだ。かくて偈を以て頌して曰く

たぶん、と
もっと匂わせて
わたしは、彼に
あなたの匂いを
たぶん、ここに、と
その悪臭を
彼に、居間で私の体をタオルに拭う
おそろしいほど無様な
ここに、俺、来よ、と
その悪臭を
彼に、まるで打ち明けるように
罪もない鼻さえもが自分の存在に
来るよ、明日、ここに...と
恥じらいむしろ
ささやく
自分をこそ哀れむほどの
——謂ってたね
鼻が自分で自分を噛み千切って
上目遣いの彼が
咀嚼してなきものに
——さっきも
滅ぼして仕舞おうとしたほどに
ひとりでわたしに
明らかに臭い
——来るの？
あなたの悪臭を
そうささやくのをわたしは
まさに、私に
——ここへ、...逃げて？
わたしの鼻孔に縛り付けて
聞いた
そして張り付けて
——なにかから逃げて来るの？

流し込んでしまえばいい
なにも、と
無慈悲なまでに
からだを拭う、彼の
入りきらないほどに
逃げるべき、なにも、と
あなたの悪臭で満たし
愛撫のような手つきに
噎せ返る
なにもなかった、もう、と
悪臭のなかで鼻に
ただ蠱惑的な、秘密めかした目つきに
自分の有ること自体を屈辱として
たぶん、と
自覚させてしまえばいい
いつでも何かを擬態せずにはられない、彼の
穢い匂い
俺にはもとから、逃げ出すべき、と
肉の腐ったより穢いあなた自身の悪臭に
表情のない黒目の色に
あなたはすでに
なにも、と
凌辱されていたのだった
そのものを翳らせた白濁に
その時もすでに

かくに聞きゝかくて雨すでにあがりキかくていまだ土濡れり壬生一時ユエンが家に歸りて歸ルに誰も不在なりきコイだにもヲらざりきタオは除クゆゑに壬生壁ノいくつかの向かふに空より落ちてタオの怒聲ひゞきたるを聞きゝゆゑに壬生時をかざりてレ・ティ・カンが家を詣づカンが家にすでに葬送の式殿すでにシて爲されヲはりテ人ゝすでに集ヒ又集ヒシてかくて話シ又話シて語り又語りアひ等シて雜然たりキ親族すでに薄く粗く宇須ら麤き白衣着ノ身着の儘タル上にそれ曾禮爾包ミ裹みシて白麻の鉢巻など巻き纏ひなどシて死せるレ・ヴァン・クアンすでに柩が内にをさまりヲはりキかくて時ありて壬生變はらずひとり異人の相のミさらシて何觀ずるともなくにさまざまにも觀ジ感じて孤立するともなく孤立し脇キに立ちて談話スともなくに愛想シ笑ミて笑ミタずみたるにコイやうやくに実家に詣でき彼まさに此ノ家の主人ノ如くに振ル舞ひタれば誰も偕鼻白むともなくに鼻白ミ爪弾くともなくに爪弾キ相手するともなくに相手シヲりきかくて僧侶ふたり詣でゝ壬生の眼には異に思ヘシほどに威誇りありて威張りみ張りスを人と人ゝ異とするもなくに隨ヒ從ひて敬ひ尊じきかくて日すでに暮れなんとシて雲いまだ厚けれバ沈ム日の紅彩ダにもさらさずて空間靜かに白濁ノ　みのミ濃くシきかくてレ・ハン喪主なレばひとり殊更に僧侶が背後に又は傍らに又は前に又は斜めにも隨ひ從ひ添ひたるに

ダン・ティ・タムひとり居残りて同國人又同郷人又同教人のなかにありてかノ女ひとり殊更に殊更なる異人なりき周囲に添ふ人なシ身のまわり數歩分にまとはル人なくして柩の傍らにのみ立ちてかの女目に目ゝに周圍を見ゝして壬生鼠の目を思ひき鼠の目つぶらにシて何をもかたらず如是に同又タムみづからの目人の目にかさなるに唐突に復タ泣き叫びて殊更に歎きゝかくて人と人ゝ忌問シ慰問ス人と人ゝ線香が束テに手にもちて外より詣で來たる度ゝに太鼓と銅鑼なラサレき是れ此ノ地の習俗なりテ太鼓銅鑼各二二後各一なりき太鼓ノさゝくれナき撥タンがとりて驕れりようにものけぞり叩きゝ又銅鑼が撥近親の五十男恭しく目伏せたるまゝにうつむきて打ちキ地の風習葬禮乃時家前にテント張りてテーブル並べ眞水の水瓶及び西瓜が種炒りたる粗ウ菓子ならべたるが常なればこゝも亦それに従ひきゆゑにコイ太鼓等並びタル横なるテーブルがひとつが端に坐してひとり西瓜種が殻齒に破り破りし實食ミ食みシをりき時に壬生コイの喰み散らし散らしすを見て瞰るうちに壬生思はずに想ひきレ・ダン・リー何処に行けるやと是れそこなる何處にもかノ少女の姿ノなかりけるゆゑなりかくて僧侶一と度び目に誦經せんとしマイク等人ゝ用意したるに倣る僧侶之れに物言ひシそノ僂咎め又もの言しゝをりけるに嘲笑するに似た人と人ゝノ聲惡意だになき儘聲ゝつらなりテ端より端に拡がりかくて終にはひびき渡り盈ちさへすルを壬生氣付きて思はずにかへり見ルにまさに表に色白きドレス着たりて乱雑に肩の肌胸元の肌背の肌腕足の肌それぞれに曝シたるタオ目を剥き剥きて視て見ゝして回りを凝視シかくてタオ葬祭に詣で來たりきかくてかくなりテ頌して曰く

あなたに話そう。

ダン・ティ・タムは企てる

まさにあなたの爲に話そう。

ひとりで、すでに

その叫び声は聞こえなかった。

ダン・ティ・タムは企て終わった

或は懐かしい耳熟れたタオの怒声は。

周囲に彼女は

だれのみみにも

一人で聞いた

その喚き聲は聞こえなかった。

他人と他人らと

或は私にはすでに懐かしいタオの罵声は。

他人らと他人の聲と

だれの耳にも、なぜならタオの口は開きかけて、

聲ゝと聲の、それら

そのままに何の聲をも發せず、——そこが

無際限にも、彼女にだけひとり思われた

彼女にとって見慣れない場所だと知っていたからだろうか？

それら果てもないつらなりが

不自然な唇の痙攣をだけさらしたままに

それら自分をだけ迂回する
わたしたちは見ていたのだった。
それら涯でもない連鎖のむれが
夫々の口に
遠く至近にざわめく中に、傲り
赤裸々にもその異形を嘲けたそれぞれの聲を散らしながら。
昂るダン・ティ・タムはすでに
わたしたちは見ていたのだった。
企んで居た筈だった。たとえばこの
それぞれの目に
周囲を囲んだ蠻族の群れを
赤裸々にもその異形の剥いた目の玉がその異形にとって
まさに屠殺してまわるすべを
彼女を容赦も無く藻取り囲んだ
まさに処刑し弑するそのすべを
彼女の見知らない容赦もない他人共の
あきらかに、泣きわめく
恥をさえ知らないまなざしに射貫かれた自分を
四面の顔に怯えた眼差しの濡れた内に
囲む人と人ゝのかたちを見て知り
ひとり忿怒するダン・ティ・タムはひとり
囲む人と人ゝのかたちを見て知った囲む人と人ゝのかたちに知り
四維の聲に慄いた眼差しの濡れた内に
その目の色に知り
ひとり激怒した殲滅の女は
その鼻のかたちに知り知りするほどに
かれらをみんな殺すだろう
タオの目は向こうを見、見て
かれらをみんな屠るだろう
タオの目はそちらを見、見て
殺し、殺し終り
タオの目は向こうを見、見て
屠り、屠り訖り
タオの目は之れを見、見て
彼女はさらに辱めるだろう
タオの目は向こうを見、見て
殲滅のタムは
タオの目はかれらを見、見て
蠻族のタムは
そしてタオの目は素直に怯えておびえた色をかくさず

下等の劣等民のタムは
タオの頬は夢のようなあわい虹彩を匂はす
彼女のめぐらす眼差しの内に
美しい女のかたち、その
彼女の知る下等の蟹族の
タオの唇の端と頬の端はひたすらに嘲弄をさらした屈曲に揺れた。
下劣の蟹族の
聴てタオが家の前の中央にたどり着いたときには、
糞まみれの夷族どもの
振り返った僧侶の当然に驕り切った目と目、そして又眼鏡の向こうの目と目の中
に
その殲滅の血み泥を見ただろう
あざやかに自分をだけ嘲けた色の、表情のない無機の眼球をタオは見た。そして

ダン・ティ・タムはひとりで企む
見、見て
四面の顔に怯えながら
右を見、見て
ダン・ティ・タムはひとりで企む
左を見、見て
四維の聲に慄きながら
斜めを見、見て
ダン・ティ・タムはひとりで企む
背後をは見ず
残すものなき殲滅を
傍らを見、見て
ダン・ティ・タムはひとりで企む
上を見、見て
容赦さえなき殲滅を
背後など存在しなかったかのように
わたしは彼女に知るべきだった
すでにタオにわすれられていた背後以外の四維を見、見たときにタオは
事実として
すでに見ていたに違いない。タオは、その時には
まさにわたしは知るべきだった。彼女の
すでに知っていたに違いない。タオは、いきなり右に流れるように横向きに
弑殺者タムのところに咬んだ
足のない蟹のよこすべりのように横に
四面の聲の中の悲しみを
不意に身をうつすとコイの目の前で

ただ逝ける
コイが目を挙げる前の一瞬にタオの唇は逆らせようとした。その
レ・ヴァン・クアンの思い出にだけささげられた
怒声を。逆らせようとした。その
その温度の有る悲しみを
罵声を。逆らせようとした。その
すでに知られるべきだった
ひとりだけの濁音の怒号を。須臾
その一人の娘の不在さえ
タオの目がコイを捉えようとした瞬間に身が折れた。
あるいはわすれたダン・ティ・タムはひとりで哀しむ
そんなふうにさえ見えた。いきなり上半身だけ
すでに気付くべきだった。おそらくは
九の字に曲げたその体の唐突は。
そのときはすでにどこかに隠れ
吐瀉すべき内容物のない生き物の液体がタオの口から噴き出して
ひとりで赤い異形の仮面をつけ始めた少女の
そしてコンクリートに撥ねた。タオひとりだけの
その今の不在を
至近の足元に。
わたしはしるべきだった。ダン・ティ・タムの悲しみを
悲鳴さえも上がらなかった。誰もが
死んだ直後に
茫然としてそれを見て居た時に、自分がだれかさえ忘れたわたしたちは見た。突
然に
レ・ハンに、ヒエンに
引き裂かれたように駆け寄ったユエンが股からタオのドレスを引き上げた時
ユエンにさえも、罵ると共に
慥かにそこには下腹部のふくらみかけたふくらみがあった。それは
請求したクアンの遺産の要求を
すでに違う意味を持って居た。老いさらばえかけた
その涙に震える唇こそが、まさに
無邪気な女の肥満しかけのふくらみではなくて。
吐き捨てたのだという事実と共に
わたしたちの、そしてわたしの目は
わたしは
目、そして目ゝ、目ゝと目は
しるべきだったろう、そして
見た。そこに明らかにすでに息遣う、未だ息せざるものの翳りを。その時には
レ・ハンは

すでにユエンの目は見ていたのだった。かたわらに
ユエンも、レ・ティ・カンも
ようやく目を揚げユエンを見
知るべきだったろう。そして
見てタオを見、見て目をそらし、ふたたびユエンを見
ダン・ティ・タムはひとりで見ていた
見て目をそらし、そらしてタオを見ようとしたそのコイの
いきなりに巻き上がったその喧騒を
いかにも顯らかに罪もない無邪気の眼を、そしてその時にユエンの唇は言葉をす
でに知りかけていた。事実
僧侶と目が一瞬に流し始めた滂沱の涙の
彼女の唇は開きかけたから。忘れ、もはや自分が何を云おうとしたのか
その余韻さえすでに忘れて
忘れるその一瞬前、口火を切りそこねた唇のくずれて塞がりかける寸前には、そ
してその時に
ダン・ティ・タムはひとりで見、そして
ユエンの唇は言葉をふたたびすでに知りかけていた。事実
見、見る以上にダン・ティ・タムはむしろ聞き
彼女の唇は開きかけたから。ふたたび忘れ、もはや自分が何を云おうとしたのか

聞き、そして聞くたびにダン・ティ・タムは
ふたたび忘れるその一瞬前、口火を切りそこねた唇のくずれてふたたび塞がりか
ける寸前には、そしてその時に
又見るたびにダン・ティ・タムは
ユエンの唇は言葉をふたたびすでに知りかけていた。事実
ただ混乱を強くするのだった、一体何が？...と
彼女の唇は開きかけたから。みたびひらきかけて、その時に
一体、誰が、
まさにその時にコイの正気付いた眼——我に
そして
我に返った目がそして、コイは頸をふろうとし、横に
まさに誰が、何を
コイが頸を振ろうとしたときにタオがその時に
何をしているの？
まさにその時に怒声をあげたのをユエンは聞いた。みみもとに
みんなでかさなるように
だからすでに、わたしも誰も、誰も彼も、彼女もレ・ハンも、
束なった視線を集めて、そこに
わたしさえもすでに知っていた。タオの唇が怒号を発した事実をは、そして
あなたたちは今、何を

誰も、コイも誰も、ユエンも誰も、誰も彼も、彼女もレ・ハンも、タオさえもが
わたしの目は見ているのか。何を
私を除いたすべての人が、その時はすでに知っていた。タオの唇が
そこであたたちの耳は
發した怒号の言葉の意味を。見た。
一か所に集まった耳は
私は、ユエンの振り上げた右腕が、その振り上げた一瞬に唐突に握りしめられて

聞いていたのか、私の
だから側頭部をなぐられたコイは殊更に鼻水をちらしながら顔からズ面に倒れ伏
した。

まさに私の耳は？

ひとりで彼の尻をだけでもたげて。

ゆっくりと、むしろ浮き上がるようにゆっくりとコイの上半身が、そしてコイが前のめ
りに地にふして、そして尻をだけ揃った太もゝが突き上げるを見た。壬生は、その時に
耳にアルミ板のテーブルが音を立てて、そして揺れてさえたので壬生は、コイが頭を
その隅にぶつけたにちがいないことを知った。人の口は、そして人ゝの口はふたたびさ
わぎはじめて、そしてユエン達の周辺数歩をだけにいつか隔離地帯をさうさせて置く儘
さまざまに音響を、おちそう、と。

ヒエンはまばたかずに想った。

あなたの肩の、ドレスの、その、と、その
細すぎる糸のような右の、
右の肩紐だけが。

——聲は立った。その騒音を壬生は周囲に聞いた。そして騒音の中心にいたユエンは、
ひとりで怒り狂った顔の儘に泣いていた。聲もなく、そしてすくなくともまさに滂沱のと、
そう云って謂うべき涙を大量にながしていた。悲しんでいたに違いなかった。壬生はそ
う思った。聞いていた。耳に。ユエンの唇が発熱した嗔りにわなゝきながら罵声だけをコ
イにのみ浴びせるのを、そして事実としてコイはいまだに殴り続けられ蹴り上げられ続
けた無垢の犠牲者のように、誰にもすて置かれた儘に頭を腕に守って尻を震わせた。壬
生は彼がすでに失禁してるに違いないと想いかくて偲を以て頌して曰く

立ち去ろうとして

あなたはまだ生きて居る。だから

踵すを返した眼差しに見た

あなたはいまだにスイカをすする

私の目は

あなたはまだ生きてる

はなれた奥の祭壇の前で

はずかしげもなく

ふたりならんだ僧侶の前で

失禁の下着を洗濯機に抛る

その黄色の法衣のこちらに白い
あなたはまだ生きてる
褐色のレ・ハンの私を見なかった目がただ
恥知らずの儘に生まれたから
コイたちだけを見てあきらかに
恥を知らずに生きていける
嘲り笑むその目の色を
誰が彼を処罰できるだろう？
わたしは見た。かならずしも
処罰され得るのは
かのじょを咎める気も無くて
すでに恥を知ってあるものだけだ

又

タオはその時に
時に、まさにその時、まさにまさに
コイに、その時に
時に、まさにその時、まさにまさに
まさに見たことも無いような笑い顔をさらさしていたのだった
時に、まさにその時、まさにまさに
軽蔑？
あられもない、無防備な迄のまさに
羨望のような
あられもない、無防備な迄のまさに
侮蔑？
あられもない、無防備な迄のまさに
憧憬のような
時に、まさにその時、まさにまさに
コイの頭部が
時に、まさにその時、まさにまさに
娘の拳に打ちのめされる直前のその
時に、まさにその時、まさにまさに
須臾なる一瞬の、その時には

かくに聞きゝかくて壬生ユエンが家に歸りき歸りて鬱とシてたゞ鬱然たりき故に壬生思ひ出でるともなくに片岡が番号を鳴らしき鳴らし鳴らしゝて彼終に出ズ又やゝありて壬生鬱としてたゞ鬱然たりき故に壬生思ひ出でるともなくにふたゝびに片岡が番号を鳴らしき鳴らし鳴らしゝて彼又も終に出ず又やゝありて壬生鬱としてたゞ鬱然たりき故にかくて迦留我由衛爾ゴック・アイン思ひ出でるともなくにゴック・アインが番号を鳴らしき鳴らし鳴らしゝて彼終に出ず又やゝありて壬生鬱としてたゞ鬱然たりき故に壬生思ひ出でるともなくにミたびに片岡が番号を鳴らしき鳴らし鳴らしゝて彼又ゝに終に出ず又やゝありて壬生鬱としてたゞ鬱然たるまゝに身を洗いながシかくて居間なるソファに横

たわりてひとりなりてコイだにタオだに歸へらずして飛登里インターネット翫ぶまゝに
寝うたゝ寐シて寢覺め又うつら宇都羅なりて醒めてメ覺メて日はすでに暮レタリテ室内
暗がるにそノままに放置して壬生ひとりなりてコイだにタオだに歸へらずして飛登利イ
ンターネット翫ぶまゝに寝うたゝ寐して寢覺め又うつらウ豆良なりて醒めてメ覺めテ時
すでに夜なりて外に物音なくうちに鼠の驅ける音何処にかに鳴りて壬生ひとりなりてコ
イだにタオだに歸へらずして日斗りインターネット翫ぶまゝに寝うたゝ寐して寢覺メ又
宇都囉宇豆囉なりて醒めてかくて寝ね寐覺め寝ね寐醒めしねざめの寝ねめざむらんとす
るうちに見て夢を見て観て夢観見て観キかくて頌して

あなたに話そう

玉散るのは血、その

まさにあなたの爲に話そう

腐った、その

その色を知るべきだろう

生き生きしたその

あなたはまさにひん曲がった背骨をへし折れる寸前に曲げてそれでいて猶

玉散ったのは血、その

翳り

翳るあなたの

深く、深く、ただ深く翳って極彩色の

鏡の内にも

色のない

見る翳りの

肉と腐った肉の、骨と噛み千切られた骨と、筋と千切れ飛んだ神経系の

まさにあなたの

極彩色のかたちが俱なり

咬む

むさぼり咬み千切る肉と肉の

噛みつき

骨と肉の

咬む、猶も

神経と筋と

猶も尚もあえてだに更に

筋と筋と肉と筋肉と

咬む

それぞれの無数の歯と

噛みつき

歯と歯ゝと

咬む

その肉

咀嚼し

肉と肉ゝの
咬む
血、玉
噛みつき
玉散るのは血、その
咬む、猶も
その時にも血、
咬む
玉散ったのは血
噛みつき
その時にも
咬む
見ていたのだった。わたしは
咀嚼し
その夢の内にも、だから
咬む
あなたも見ていたのではなかった
噛みつき
そでに齒と齒に咬みつぶされた
咬む、猶も
眼球の飛び散らせた体液の玉さえ
猶も尚もあえてだに更に
玉散り失せた時にも猶も
咬む
その剥き出しの
噛みつき
肛門が加えた眼球を以て
咬む
又は
咀嚼し
鼻の孔で
咬む
又は
噛みつき
耳と耳のかさなりあう隙間で
咬む、猶も
あなたは見るべきだった
猶も尚もあえてだに更に
降る雪
咬む

まさに雪
 噛みつき
あなたとあなたたちに
 咬む
降る雪
 咀嚼し
わたしと私たちに
 咬む
降って居た雪
 噛みつき
わたしたちとあなたに
 咬む、猶も
あなたとわたしたちに
 猶も尚もあえてだに更に
まさにすでに
 咬む
降り続けていた雪
 噛みつき
溶けもしない、その
 咬む
零度の温度さえも無い、その
 咀嚼し
雪
 咬む
花、沙羅の
 噛みつき
沙羅の白い花の夥しい
 咬む、猶も
みだらなまでにも夥しい
 猶も尚もあえてだに更に
卑猥なまでにも夥しい
 咬む
無様なまでにも、容赦なきまでにも
 噛みつき
穢らしいほどに降り
 咬む
降り落ち、降り
 咀嚼し
降りつづけたその
 咬む

無数の花、沙羅の
 噛みつき
白い花、花ゝ
 咬む、猶も
花、花ゝ花
 猶も尚もあえてだに更に
花、花ゝ花ゝ
 咬む
花、花、そしてその花、それら花と、花の向こうに
 噛みつき
花、花、そして花
 咬む
花ゝ、そして花、花、花
 咀嚼し
それら、白の
 咬む
花、花、
 噛みつき
白の
 咬む、猶も
花、花、
 猶も尚もあえてだに更に
沙羅の
 咬む
花、むこうにも
 噛みつき
花、沙羅の
 咬む
白い、花、そして
 咀嚼し
向こうのその奥の
 咬む
花、花、花ら
 噛みつき
花、
 咬む、猶も
そして花、花
 猶も尚もあえてだに更に
そして花、花、花ゝ
 咬む

花、それら
 噛みつき
地にふれるまえにはすでに
 咬む
花、それら
 咀嚼し
かたちにはふれるまえにはすでに
 咬む
花、腐り腐敗して行く花
 噛みつき
沙羅の、白い
 咬む、猶も
何をも
 猶も尚もあえてだに更に
なにをも救おうとだにしなかった救いの欠片さえないただ白い花、その、それら、
雪のような無限の散華を
又
 夢を見た
 喰うのだった
夢の中で、その中でも夢を見た
 決して飢えた譯でも無くて
その、まさにその
 ひたすらに喰い
まさにその夢にわたしは差し出すのだった。彼に
 喰うのだった、その
わたしがその時殺した大津寄が
 だれかの顔、顔
そのままに未だ
 だれかの鼻、鼻梁
三十年以上も時を隔ててそのままに
 あるいは軟骨、軟骨
微笑んでそのままに
 睾丸、だれの？ わたしの？
わたしが殺した時の儘に
 誰かの、胃、胃、骨のある胃、心臓を喰えた
頭に血をながして夥しく濡れながら
 すすりあげる腎臓、その
その、まさにその
 噛みつかれた脳漿、もはや
まさにその少年にさしだす

噛みついた歯がすでに
わたしは差し出す、まさに私の肛門の歯が
わたしである必然などなどなかった、むしろ
噛み千切った腕を、わたしの
だれかである必然さえも、むしろ
すでに無数に甲殻虫じみて無数の足を
おびただしいそれぞれとしてまさに
いきいきと曝した未成熟な腕を
それぞれなる儘にまさに
玉散らす
わたしがわたしであったことなどなかった
血の腐臭さえそのままに、その
あなたがあなたであったことなどなかった
まさにその腕を、わたしは彼に
疾走する
さしだして、口がさけて、まさに
歯の無数の甲殻の鼻糞の疾走を
私の口は避けて噴き出した
あるいは
脳漿のような神経系の、無数に生やした歯と歯ゝの
かみ砕かれた眼球の失踪を
それらが生やした歯と歯ゝに
無言の咀嚼の、無残な唇が生やした
それらが生やした歯と歯ゝに食われる
七十八の腓臓の痙攣を
咬み、噛みつかれ、咀嚼の中に
その色を
差し出した腕を、わたしは見る
腐った匂いを
肛門の目、啜えられた目が吐き捨てられながらに
ねらって虚空を咬んだ鼻毛よ
大津寄の笑みを

又

取り残された水の面に
誰かが見ていた、その拡がる
波紋、ひろがる
波紋、その拡がった
波紋

又

内側に身をすべて長く引きのばした獣がむせぶ

その聲を聞く

又

無間に引きのばされた舌はすでに太陽を拘束し破壊した
その最期の無数の火花に消えた

又

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こう

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き、垂れおちる

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こうたれおちる儘

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き、落ちる前、その

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こうの、その

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き、落ちる寸前の、その

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こう、玉

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き、玉散ろうとする、その

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こう、玉、ふるえ

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き、ふるえるままに

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こう、落ちる直前の血の玉が

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と

鳴った音を聞き垂れた腸の

りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る

る、と

鳴った音の向こう、千切れた肉の

ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と
鳴った音を聞き、たれずれする腸の
りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る
る、と
鳴った音の向こうかみちぎられた肉の
ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と
鳴った音を聞き、先端の
りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る
る、と
鳴った音の向こう咀嚼の前の
ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と
鳴った音を聞き、血の玉の
りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る
る、と
鳴った音の向こう、肉の血が
ろろ、ろろ、ろ、と、...ろろ、ろ、ろろ、ろろ、と
鳴った音を聞き、見る。震えるのを
りゆ、りり、ゆ、りゆ、ゆ、りり、りゆりゆ、りゆ、り、りりりゆ、りゆ、り、る
る、と
鳴った音の向こう見ていた、その肛門の
かくて偈を以て頌して曰く
力つきるように眠り、
力尽きるように目覚める、いつも
なんども目を覚まし何度めかにも見た、その
天上に、市川雪菜の翳りが誰かの未生の誰かの肉を喰い千切った
力つきるように眠り、
力尽きるように目覚める、いつも
なんども目を覚まし何度めかにも見た、その
わたしのうでに取りついた見知らないすでに死んだ誰かが
わたしの知らない未生の誰かの骨と肉に咬まれる。まさに
彼がその眼球の指を咬みつぶしたその時に
力つきるように眠り、
力尽きるように目覚める、いつも
なんども目を覚まし何度めかにも見た、その
壁に生えた、翳りの肉の塊りが長い孤をかいて飛び散る
力つきるように眠り、
力尽きるように目覚める、いつも
なんども目を覚まし何度めかにも見た、その
翳る私が喰い散らした、その、未生の子
わたしの未生の子供を掌に陥没させた肛門の腸の齒の繁みに

力つきるように眠り、
力尽きるように目覚める、いつも
なんども目を

かくに聞きゝかくて壬生寝ね寐て寢覺め醒めすルうちに居間ノ広げたる儘なるシャッターの端に気配感じき壬生恠しむともなく見て觀寝ころびたる儘に瞰るに何も變り異なるあらざるに見テ觀見テ瞰つづけたるうちに時に顔ひとつ覗キ見けりその顔まさに小さくまさに仮面に素顔隠シたりき仮面赤ク斑ラにして赫シ常なる一様ノ彩色に在らずシて赤または朱朱または黒黒または灰灰又は褐色褐色または白白くて又赫かりける色と色ゝいろいろにこきまぜた凶ツ化け物が假面なりき壬生誰ノ戯れとも気付かず見て觀ルに凶ツ面見て壬生を觀テその顔笑みたるように見ゑて又呻き笑ひ呻きテ白目剥き剥きシかくて仮面が顔隠れたりきふたたびシャッター何も變りなしかくて變りなく異なるあらざるシャッターをのミさらしてありき壬生立ちて見テ觀て瞰をりたるに顔ふたたびに現れかくて壬生立ちたるそのままに笑ミ笑みかけテ凶ツ化け物面おもはずに壬生ノ笑ミたる艶に見蕩れて視へタルに壬生思うともなくに歩み寄りテ凶ツ化け物壬生の歩ミよりタルに氣付きだにせづたダ茫然たるにシャッターが向かふ月の直射の光あかきにその凶ツ化け物面少女の体軀なりキかくて壬生は見キかくて壬生は知りキかくて壬生見て見知りて知り見知りてこの少女レ・ダン・リーなりきかくて頌して

あなたに話そう。

素顔は仮面にかわらない
まさにあなたの爲に話そう。

だから
あなたにちがいない、と。

その仮面はまさに
わたしは思っていた。その時に、...ね、と。あなた

まさにあなただった
レ・ダン・リーなんだろう？

醜い子
かの仮面の顔に殊更に告げる気も無くわたしは...ね、とあなた

仮面さえもが
レ・ダン・リーなんだろう？

醜い子
ここにささやいた、どこへ...

仮面は素顔を隠さない
どこへ行ってたの？ あなたの父親が

仮面さえもが醜い子
あの　れたクアンが死んだ日に、その

素顔さえもが醜かったから
死んだまさにその時にさえも。そして

仮面は素顔をさらさない
こころは見た、わたしの心は、まさに彼女の髪をつかんで、その

さらけだしもしない儘に
顔面を拳に傷めてやるのを。又、その
仮面は素顔を隠さない
唇が挙げた失神の聲を、又、その
肌そのものの
拳にふれた齒の切れたくちびるごしのいたみを、なにを...
焼けた色
なにをしてたの？ あなたの父親が
肌そのものが
あの れたクアンが死んでまさに、コイが歎いたその
逆剥かれたように
無惨のまさにその時にさえも。そして
焼き壊された
こころは見た、わたしの心は、まさに彼女の腕を後ろ手に、その
その色の、いろいろな
肩をへし折って傷めてやるのを。又、その
さまざまな色の
喉がふるえた濁音の絶叫のみじかさを、又、その
焦げた匂いさえ
時に見上げた月の色を、あかるい夜だった。だから
いまだに目には
わたしは見ていた。はなれたそこで、横たわった
あきらかに
つま先の下に見えてゐた足の下の化け物の顔、見上げもせずにその儘立って正面
に見たその
かくしようもなく
顔。...ゆがんだ顔。歪んだように見えて、骨格の何が歪んだ譯でも無くてただ
感じさせた、その
そう見えるに過ぎない奇形の顔。異形の顔。...引き攣った顔。引き攣たように見
えて、慥かに
匂う顔
引き攣りながらも必ずしも、原型の何を替えたともない異端の顔。奇形の。顔、異
形の、
皮膚を焼いた
顔。その顔、爛れたような？ 爛れ、腐り、腐ったような？ 顔、穢れ、皴より、喰
い荒され、麤されたような、
その焰が匂う
顔。喰い潰されたような、顔。つぶれたような、叩きつぶして引き刷り廻された
ような、顔、無残な
筋肉まで焼いた

顔。ただ顯らかに無惨な顔に、時に白目を剥きながら、レ・ダン・リーは、あなた
なんでしょ。...ね？

その焰が匂う

あなたなんでしょ。白目を剥いたときに、思わずも不意に失神しそうになってそ
の、顔。

贅肉をさえ乾くかせた

レ・ダン・リーは、あなたなんでしょ。...ね？

その焰が匂ひ、目にだけ

あなたなんでしょ。白目を剥いて掠め取るように

はっきりと匂いたち

抜き打ちするように

仮面は素顔に変わらない

虚を撃つように

素顔は仮面に異ならない

空を舐くように

醜い子

その

素顔に同じ

一瞬の失神にまさに取り憑くようにわたしは

仮面さえもが

歩みよってかたわらに、忍び寄るともなく正面から

醜い子

はしよるともなく穏やかに、すぐさまにレ・ダン・リーに、あなたなんでしょ。
...ね？

あなたは匂う

あなたなんでしょ。近づいたとき、見た。慥かに彼女があなたなんでしょ。...ね？

あなたの顔が

あなたなんでしょ。レ・ダン・リーだったことを、その月の明るさの中に

あなたは匂う

あざやかなまでの夜のく昏い色彩の中にその顔はたしかに彼女の顔だった。そ
れはむしろ

鼻にさえ

仮面では無くて、顔だった、彼女の、おそらくは、自分でなんでも切りつけたに
違い無かった、あるいは

あなたは匂う

すり、擦り付け、例えば轟い壁の壁面に、顔だけあるいは

肉を焼いた

すり、擦り付け、なじるように、こするように血をにじませ、肉を、体液と共に
或いは

焦げた匂い

撃ち、叩きつけ、叩き、例えば路面に、コンクリートの轟路面にでもその顔だけ
あるいは

焼き捨てた

撃ち、叩きつけ、叩き、とりかえしのつかないほどに痛み、散る体液にも散りみ
だれ

焰が残した

散り塵に散る顔表面の痛みの、骨の痛みの、肉の、筋肉の肉の、肉の、贅肉の肉
の、肉の痛みの、

焦げついた匂い

それら痛みに、齒、へし折れた齒、歯頸の痛みに鼻、流れる膿んだ鼻水の、汁の、
痛みに、或いは

にじんでのるよ

焼き、焼いたのだった、レ・ダン・リーは、あなたなんでしょ。…ね？

滲みだす様に

あなたなんでしょ。彼女は自分の顔を

至る所から

焼き、生きた儘に、なんで？——ガソリンで？ だれかのバイクのタンクにでも

にじんでのるよ（——おびたしく）

無造作にどこにでも転がるガソリンで？

体液が（——肉をまで）

焼き、爛れさせ、爛れ、さらに焼き、焼き、爛れさせ、爛れ、さらに焼いた顔でま
さに

あなたの生きた（——その肉を）

レ・ダン・リーは、あなたなんでしょ。…ね？

体液が（——肉をこそ）

あなたなんでしょ。そこでまさに彼女は笑んだ。聲もなく

あなたの皮膚を（——肉をまでも）まさに

なんども失神しそうになりながら、手に持ったものを離さない儘

癒そうとして（——したたるように）

吐いたとでも思うのか？ 糞が壬生は気付いた、その醜い、まさに異形の顔の無残に吐い
たとでも思うのか？ 糞が見蕩れるともなく見茫然とした一瞬に、慥かに、と吐いたとで
も思うのか？ 糞が壬生は気付く。レ・ダン・リーは慥かに美しかった、と吐いたとで
も思うのか？ 糞がその顔、幼い皮膚の皮膚疾患の赫變の痛々しさの向こうで吐いたとで
も思うのか？ 糞がまたはその覆いかぶさった無様な髪が無残なまでの豊かな大量の翳で吐
いたとでも思うのか？ 糞が慥かに吐いたとでも思うのか？ 糞がレ・ダン・リーは美しかっ
た。間違いなくヒエンなど比べる迄もなく吐いたとでも思うのか？ 糞がレ・ダン・リー
は美しかった。間違いなくユエンよりも吐いたとでも思うのか？ 糞が人種はともなく、
雪菜よりも吐いたとでも思うのか？ 糞がレ・ダン・リーは美しかった。間違いなくゴッ
クなど、ましてタムよりも吐いたとでも思うのか？ 糞がまして吐いたとでも思うのか？
糞がレ・ダン・リーは美しかったその姉より、レ・ハンより吐いたとでも思うのか？ 糞

がゴック・アインより吐いたとでも思うのか？ 糞が壬生よりも吐いたとでも思うのか？
糞が美しかった。レ・ダン・リーは誰にも気づかれず誰も一度も見なかったうちに、明
らかに吐いたとでも思うのか？ 糞が誰より

だれ？

誰よりも、

うつくしい

誰？

だれよりも

だれ？

美しく、誰より

だれ？

だれよりも

だれ？

彼女は

だれ？

美しかった、と。壬生はそう思った。その目、瞼の明解な線の上の複雑な筋の極端な難解
さも、瞼の重力に負けた下部の悩みを知る線の、いまにも涙をこぼしそうな肉の淡いふ
くらみも。美しかった。慥かに、頬の翳り、曲線の鋭利な翳りのなめらかな流線も。美
しかった。慥かに、鼻筋のなよやかな隆起と絶望の陥没、そして落ちた下のやわらかな
窪みも。美しかった。慥かに、唇も、たしかに彼女は、と、壬生は思わず洩れかかった言
葉を飲みながらにかくて偈を以て頌して曰く

見た

殲滅しかけた

目は、私の目は、その目

殲滅しかけた、その荒れた

見た

荒れた

目は見た。眼を、その目

荒廃した

見た。うつくしい——本当は

荒み切った、その

誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーが

あれはてた

手にした顔、ぶら提げた顔のさらした目

荒れ、阿禮波天多

見た

ぼろぼろの

目は見た。眼を、その目

ずたずたの

見た。うつくしい——本当は

壊れ
誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーが
くずれ
手にした顔、ぶら提げた顔のさらした目の黒目、もはやなにも
さかむけ
見ている筈のない驚愕も無く
崩壊した
ただ見開いただけの大きな目、目を
すでに滅びた
見たうつくしい——本当は
そしてなおも
誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーの手の生首の見せた
今も猶も
目はまっすぐにその目の先をだけ見てすべてを通り抜けるのだった
息遣い
見たうつくしい——本当は
まさに生き
誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーの手の生首の口の
癒し
そのあけっ広げた口だけが恥知らずの、恥も外聞もない驚愕の無様を曝し
癒され
見たうつくしい——本当は
まさにしたたるように
誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーの手の生首の首の
まさに瑞々しいほどに
下からなおも血がしたたり続けていたのだった。まさにただ、血は下にのみ落る
爲にあるとばかりに
それらはまさに息遣う
見たうつくしい——本当は
それらはまさに猶も癒す
誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーの手の生首をつかんだ手は
それらはまさに分裂し
そのレ・ダン・リーの幼い手は傷一つなく他人の血に染まり、そして病み憑かれた
ように痙攣をさらし
死んだものらは自ら干からび
見た。うつくしい——本当は
それらはまさに繁殖し
誰より美しかった爛れた耳のレ・ダン・リーの手の生首の髪は
死んだものが自ら黒ずみ
捉まれて伸び、伸びて垂れ、垂れて乱れ、乱れて流れ、すべては震えた、その手

それらはまさに營むのだった
手の
まさにそれらの
レ・ダン・リーの手のふるえにふるわされる儘ふるえ、震えた
命の沸騰をたばしらせ
その顔、レ・ハンの顔は
ほとばしらせて

かくに聞きゝかくて壬生見き顔潰シて仮面被りたるに似るそのレ・ダン・リー左ノ手ち
ひさきにまさにみたされる髪の毛つかミあげて首ひとつぶら提げてありきを壬生はみた
される見きその首が顔まさにみたされるレ・ハンが顔に他ならヌを壬生はまさにわたし
は見きかくてレ・ダン・リー見上げてまさにわたしは見たる眼差しにまさにわたしは壬
生に見蕩れみたされる見惚れたるかの魅登レ多ル色みたされる見ゑて而シテ壬生はみた
される知らずそのまさにわたしは

みたされた

ささやかれた

わずかのこゑのひびきさえなかった

あなたのしずかな、その

まなざしのなか

やさしさのなかで

恍惚の色さざめくヲすでにレ・ダン・リーいくたびもみたされる失神シ失神しかゝりみ
たされる失神シかゝりかゝシをりければみたされる知らずその失神の目の須臾まさにわ
たしは光らす色壬生にみたされる恍惚ノ色みたされてさざめき立ちけるヲはみたされる
知られざりて壬生まさにわたしはレ・ダン・リーを見てみたされた

つつみこまれた

いつくしむまなざしの

その

やさしさのなかに

その剥き剥くさざなむ白目白目に壬生さざなむ知りき波紋のさざなむ無際限に続きたる
にゝてさざなむ煮え煮えくりかえるにゝてさざなむ焼き焼きつけさざなむえぐるかにゝ
てさざなむ痛みのさざなむ痛ミそのさざなむ肉の内にもさざなむ肉のさざなむ筋が内に
もさざなみ盛かり盛かりてさざなみ又蘇り蘇りシつツけてさざなみ痛ミさざなみだって
燃え盛かり続けるさざなみ痛みのさざなみかさなるさざなむむげんの

もはやむげんの

むげんのはてなきやさしのなかに

痛みのさざなむ容赦も無きさざなむ痛みのそのさざなむ痛くさざなむ痛きをさざなみか
くてさざなみ頌して

あなたに話そう。

月。——醒める、まさに

まさにあなたの爲に話そう。

夢からも、まさに

いくつもの絶叫がさまざまに、細胞の
うつつからさえ、月。——
ちいさい細胞のいくつもの絶叫がさまざまに、それら細胞の
醒めるような
ちいさい細胞のいくつもの絶叫がさまざまに、それら細胞の
その、月。——まさに
ちいさい細胞のいくつもの絶叫がさまざまに、それら細胞の
無垢とでもいうほかないその
ちいさい細胞のいくつもの絶叫がさまざまに、つらなり、かさなり、
血も涙もない、その
つらなり、つらなり、かぶりあい、かみつき、かさなり、もたれ、もたれかかり、
かぶりつき、たれ
情け容赦ない無惨の、その
かかり、かさなり、つらなり、ひびき、ひびきあい、かさなり、かみつき、つぶ
れ、ちり、とびちり、かさなり
光、月の、落ちる、庭の、翳りの、影の、蔭の上に、
ひろがり、かさなり、かさなりあいするそれら、それらの聞こえない絶叫の音響
のもろもろを聞いたと、そう
月。——その
思った時に私の拳は殴った。その顔
無慈悲な迄の、その
異形の顔を。殴り、飛び散ればよかったのに——と。
絶望的な迄の、その
そう思った。異形が、拳にいまだに健在だった骨格の痛みを残して、そして
ただ冴えて冴える、その
体液をちらして後ろ向けにころぶのを見て、むしろ果物が——と。
照らすだろう、間違いも無く、その
例えば果物、西瓜が粉々に砕け散るようにその異形もみずからの血肉のしぶきの
なかに
臆てのいつか、その時に、その
まさに消えてなくなって仕舞えば、と。
今ある生き物の悉くの盡きた、その
そう思った。そして私は見ていた。その異形の顔の生やした体躯の生やした四肢
が漸くに起き上がり、ようやくに
むしろ生き物と、今呼ばれた限りでの生き物のすべて盡きた、その
ななめによろめく儘転がるように庭を走りやがて
ないし生き物ですらないなんらかのなんらかのなんらかまでも盡きた、その
転び、何度も、何度も失神に冴え堕ちかかりながらたちあがり、よろめき、よう
やくに
あるいは物質だけただ冴えて覺めた、その

ななめによろめく儘転がるように庭を走りやがて
地上をさえもが、その
転び、何度も、何度も失神に冴え堕ちかかりながらたちあがり、よろめき、よう
やくに

光はまさに、その
ななめによろめく儘転がるように庭を走りやがて
そして海王星は知らない、そのダイヤモンドの海の底は、その
異形の顔が庭の門を出て行くのを見た
月の光をなどは一度も

壬生は思った。見たのだろうか、と、巧妙に誘いだされ、レ・ダン・リーに誘い出され、
そしてレ・ダン・リーに殺されてしまう前に、その顔、蟹股でいつものように歩いたあと
で、或いはすでに焼かれていたのか。その顔。あるいは未だ焼かれては?...いずれによ
その顔、レ・ダン・リーの顔を、蟹股で歩いたあとで。少なくともその目を、目、...と、
レ・ハンは、その目で、と、想い、その目、と、その、すでに抉り取られた目が、と、抉
り取られる前に? かくて偈を以て頌して曰く

足もとに転がった頸を見る
棄てろ、だれか
見て、唾吐くともなく身て
焼き、焼き捨てろ、だれか
それ、その穢いそれ、その
穢いもの、それ
穢い塊をみてわたしは、見
穢い、ただ、その
見捨てるようにつま先で蹴り
穢いもの、焼け、だれか
蹴ってすこしだけ転がし、それ
焼き、捨て、だれか
転がる、その
焼き

蘭陵王第二

2020.08.11.17-19.Se-Le Ma

修羅ら沙羅さら 2

著 Seno Le Ma

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
